井村君江（いむら・きみえ）

1932年、栃木県に生まれる。東京大学大学院比較文学博士課程修了。明星大学教授。イギリス、アイルランド・フォークロア学会会員。著書に『アーサー王物語』『妖精の国』、訳書にW. B. イエイツ『ケルト妖精物語』『ケルト幻想物語』など多数。

井村君江

ケルトの神話

女神と英雄と妖精と

ちくま文庫

井村君江

ちくま文庫

450
[437]

ちくま文庫

ケルトの神話

女神と英雄と妖精と

井村君江

筑摩書房

ちくま文庫

ケルトの神話

女神と英雄と妖精と

井村君江

筑摩書房

ケルトの神話

はじめに――ケルト民族のふしぎ

「大陸のケルト」と「島のケルト」

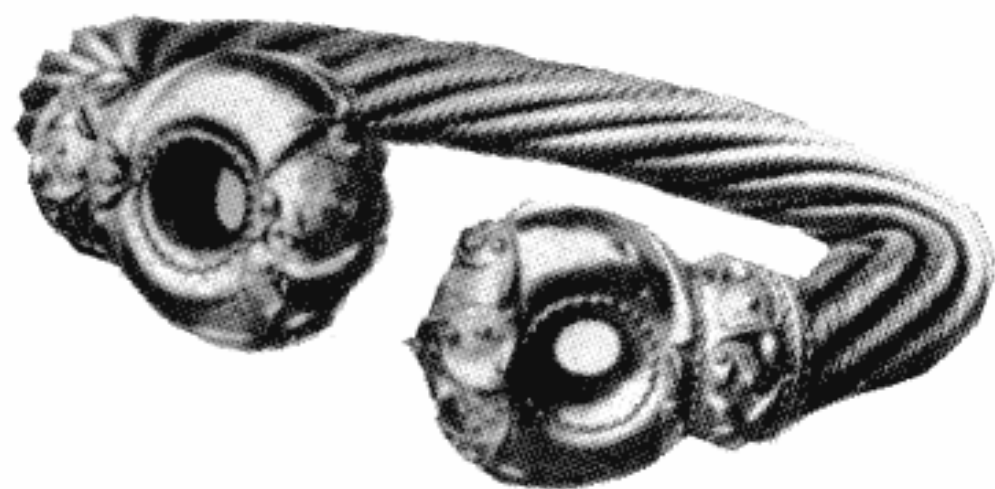
上部オーストリアの湖水地方、ザルツカンマーグートに、ハルシュタットという町があります。険しい岩の壁に囲まれた湖は、白い霧のヴェールにおおわれて眠るように静かですが、四千数百年の昔、この湖の上を、塩を入れた皮の籠を積んだ丸木舟が、いそがしく行き来していたはずでした。岩山と湖の下の層から、新石器時代には、大量の塩が出ていたのです。いまも深い坑道が、岩層の下に残っており、大規模な製塩所が、大昔にあったことを物語っています。

小高い山の中腹に採掘所はあるのですが、その草むらの中で、一八四六年に、鉱山の検査員であるヨハン・ゲオルク・ラムサウアーが、砂利層をさがしに行って、掘っているうちに、偶然、埋葬地を見つけたのです。そこから、二体の骸骨(がいこつ)と青銅のかざり帯と、骨壺(こつつぼ)が出てきました。そののち、七つの遺体と副葬品、首かざり、腕輪、ブローチ、短剣、留金(とめがね)など高度

な金工の装飾品がたくさん出てきました。ウイーンの国立博物館で、その発掘品は見られますが、残念ながら岩屑（いわくず）の中で塩づけになっていたミイラは、保存されませんでした。その後も、発掘がつづけられ、なんと一九年後には、九九三の墓と、六〇〇〇を越える出土品が現れたのです。その後一九〇七年にも、メクレンブルクのマリア大公妃や、好事家（こうずか）たちの手で発掘されたものは、一つの博物館をいっぱいにするほどの数になるといわれています。このことは、かなり高度の水準にある文化が、この白い鉱物（ハル）を中心に、ハルシュタットの地にあったことを物語っています。

　骨壺墓を作っていた埋葬の仕方や、出土品の材質や装飾や図柄（すでにケルト模様といわれる二つの渦巻（うずまき）や三脚どもえ〔トリスケリオン〕があります）から、考古学者たちは、紀元前一三〇〇年から紀元前六〇〇年の間に、ダニューブ川からやって来て定住したケルト人たちの文化であると推定しています。出土品のなかには、バルト海付近のコハクでかざった短刀や、フェニキヤのガラスをはめた青銅の鉢や、黄金や象牙の細工をした装飾品もあり、塩の商業の交易範囲が、広い地域にまで及んでおり、遠くエジプトまで、「塩の道（ソルト・ロード）」は続いていたことを示しています。塩は今もそうですが、大昔はとくに貴重で、莫大な財産源でした。その上に一時花開いていた豊かな文化は、「ハルシュタット文化」（紀元前七〇〇—四五〇年頃）と名づけられ、その後、スイスのノイエンブルクで発掘された「ラ・テーヌ文化」（紀元前四

アーダの聖杯

タラブローチ

トーク
（首飾り）

鉄の刀剣
（金の柄部分）

ブロンズのワイン入れ
(紀元前5世紀)

ケルト十字
（アイオナ）

五〇年―五〇年頃）とともに、ケルト人の謎を解く糸となっています。西ドイツのマンヒングの遺跡は、まだ発掘が続けられていますが、いろいろと新しい事実が今後も発見されるでしょう。

ケルト民族は、さまざまな謎にいまだに包まれているのです。共通した習俗や文化をもった共同体の中で、初めてケルト語で「ありがとう」といった人を、最初のケルト人と呼ぶべきでしょうが、それはどこの地でいつだったのか、が未知の雲のかなたなのです。発掘された骨は、語ってくれません。

学者たちは推定によって、ケルト民族の始源地をさまざまに探し、ダニューブ川（ドナウ川）の水源地付近とか、カスピ海の近くとか、ベーメンがケルトの祖先の原故郷かもしれないとか、考えているのです。今日ではケルト人はインド・ゲルマン語族に属していて、金髪で背が高い民族で、気候が悪くなったので本来の故郷をすてて移動をはじめ、それは紀元前九〇〇年ごろで、それから五〇〇年のあいだに、各地へ散っていったとされています。

ある学者は、紀元前四〇〇年ごろにダニューブの水源地地方（今日のハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア、南ドイツ）からアルプスを越えて、南チロルとポー平野にいたエトルリア人を追い払って住んだのは「平原のケルト」民族であり、一時はローマに入り北イタリア、シチリアに拡がった。主な都市トリノ（タウリーヌム）、ベルガモ（ベルゴム）、ミ

ラノ（メディオトラーヌム）を作ったのも、ケルト人だと推定しています（名まえの由来を調べて行きますと、パリも「パリジオルム」から、ヴィエナも「ヴィンドボナ」、ベルギーも「ベルガエ」、ダニューブも「ダーヌウィウス」からと、ケルト民族は主な都市の名づけ親であることがわかってきます）。

もう一つ、「山岳のケルト」ともいえる好戦的な一部族は、ライン川水源地地域から、スイス、北部フランス、西ブリテンの方へと拡がっていったのだという説があります。

主な経路を歴史的に拾ってみますと、紀元前三九〇年に、ケルト民族はシエナ地方でローマ人と衝突し、ローマに進撃して町を焼き、前四世紀にはアレクサンダー大王とダニューブ川付近で出会い、前三世紀にはギリシアに侵入してデルフォイを攻撃し、前一世紀にはユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）によって戦いに破れています。そのあいだガリアへ拡がり、スペインへ、ベルギーやデンマークへ、そして一部はハンガリーからバルカン半島を経てトラキア、マケドニアに入り、また一部はユーゴスラヴィア、ルーマニア、ブルガリアにも住んでいったというように、ヨーロッパ全域に散在していたのです。「もしこの動きが、一つの意志によって導かれていたならば、ヨーロッパ史上、最大の帝国の一つが生まれたであろう」とゲルハルト・ヘルムは『ケルト人』のなかでいっています。(注1)

しかしこのように多くの地域に拡がっていたことは、ケルトという単一な民族は存在しな

かったということでもあり、また多数の部族から成り立っていて、共通した言語や宗教・習慣・文化を持っていながら、一つの政治形態をもって定住しなかったことを示しています。一時は小さな国ガラテアを作りましたが、すぐに滅んでしまいます。各部族が協力せずに、争いで滅ぼし合ったことも、原因の一つでしょう。長いあいだの移動や戦いのあいだに他民族と混ざり合っているので、純粋民族としてのケルトは存在していないともいえるのです。このことは見方をかえれば、ヨーロッパ各国にケルトが入っていることになり、ケルト文化は「ヨーロッパ文明の基礎」にある、ケルトは「ヨーロッパのルーツ」である、といわれるわけです。

　ヨーロッパ大陸に拡がっていたケルトを、かりに「大陸のケルト」と呼ぶとします。一方紀元前五〇〇年ごろ、ブリトン語（Pケルト）を話すケルト民族たちが、スペインからブリテン諸島に渡り、ゴイデル語（Qケルト）を話すスペイン系のケルト人たちが、紀元前六〇〇年ごろにアイルランドの島に渡りました。最初にアイルランドに定住したのはいつか、という年代もさまざまですが、マイルズ・ディロン博士は、青銅器時代の初期で、紀元前一八〇〇年であると推定しています（神話では五種族が次々と入島したことになっており、このことは、物語のところでお話いたしましょう）[注2]。とにかく、ブリテン諸島に拡がり、スコットランド、ウェールズ、マン島、そしてアイルランドに定住していったケルト民族を、「島のケルト」

といってもよいと思います。

紀元前五五年に、ブリテン島に渡って来たユリウス・カエサルが、「島のケルト」が「大陸のケルト」と血筋がつながっているのを前提とした記録を残していることは、興味ぶかいことです。カエサルはケルト（古名ケルタエ）を、ガリア人と呼んでおり、島のガリア人のほうが未発達だといっています。紀元前五八年から紀元前四四年までの戦いを中心とした記録『ガリア戦記』(注3)は、髪を固めて立て、顔を青く染めた戦士のすさまじい戦いぶりや、堅固な要塞や、いけにえの風俗や神々など、ケルト人たちの貴重な記述になっています。ケルト民族自身の文字の記録は、これまでにはありません。

しかし、カエサルの記すケルトの三部族、ガリア人、アキタニ人、ベルガエ人の各種族は、シーザーの占領の下でローマ化され、ブリテン島に渡ったケルト人は、ピクトやジュート、アングル、サクソン各民族と混ざりあっていきます。しかし本島と離れたアイルランドの島だけは、ローマの被害をこうむらなかったのです。カエサルはなぜアイルランドに来なかったか、原因はいろいろ考えられますが、その一つに、ケルトの戦士たちが不思議に強いのは、「死を恐れず、死後も魂は滅びないという信念を持っているからだ」と書いていますが、そうした好戦的な不気味な戦士たちの一族が、一〇〇〇年近く定住している小さい島へ入ることを恐れたからかもしれません。ハルシュタット文化を作り、カエサルを恐れさせた古代ア

イルランド人のはじけ飛んだ一部が、そのために緑の島に保存されることになったのです。さらにアイルランドは、ヴァイキングの襲来はあっても、一二世紀の終わりごろまでは、外敵の大きな影響も受けずに来ていますので、ケルトの特色をよく保存した文化が残っています。そして口承されていた物語の記録のなかに、豊かなケルトの想像力が形となって現れ、神話制作者の手によって何世紀も凍結されたままのケルト民族の遺産が、「化石のなかの木の葉」のように、元の形のまま見ることができるのです。ですから、ケルト神話は、「島のケルト」、それもアイリッシュ・ケルトの神話を語ることになります。

ローマ人やギリシア人の見たケルト

考古学者たちは、骨や出土品からケルト民族を考えていったわけですが、ローマ人やギリシア人が書き残した断片からも、古代のケルト人のようすをのぞくことができます。ローマ人は「ガリ」（ゴール）と呼び、ギリシア人は「ケルトイ」、そして両者ともに小アジアのケルト人を「ガラタイ」と呼んでいるのですが、古代の歴史家、ストラボやディオドロス、ポセイドニウスなどがおもしろい記述を残しています。ギリシアの哲学者アリストテレスは、ガラタイ人はスペインの向こうに居住し、ローマを占領し、強力な戦闘で奪った多くの品々をたくわえていた、といっており、プラトンも、ケルトはいつも酔ったような民族で、争い

を好み、ギリシアに侵入したときは、ひじょうに狂暴だったといっていますが、これは紀元前二七三年のデルフォイの襲撃で、痛手を蒙った側の感情が入ったことばのようです。地理学者で旅行家だったストラボは、ケルト人に会った印象をいろいろ残していますが、枝編細工と泥土で固めた家に住んでいるとか、戦士は敵の首を馬にさげて帰るとか、記していますが、総じて、男性は好戦的で、情熱にかられ、興奮しやすく、論争好きだが、単純でだまされやすく、女性のほうは母性型で、多産だったと書いています。(注4)

シチリア生まれのギリシアの歴史家ディオドロスは、当時フランス一帯に住んでいたガラタイ人の外見について、細かい興味ある記述を残しています。(注5)「ガラタイ人を見ると恐怖にかられた……みな背が高く、皮膚は白く筋肉が盛りあがっている。髪の毛は金髪だが、それは生まれつきであるだけでなく、人工的に着色するのだ。また髪を何度も石灰水で洗い、額から上へ冠のように持ちあげて、首すじまで垂らしている。特別な洗い方のために、馬のたて髪のように太く堅くなって、まるで森のサチュロスかパンの神のように見えるのだ。あごのヒゲを剃っている者もいるが、ヒゲを生やしているものもいる。貴族たちは頬だけ剃って、鼻の下にはヒゲをたくわえ伸びるままにしておくので、口をすっぽりおおっている。食べるときにはヒゲに食べ物がひっかかったり、飲みものは、まるで濾過器のようにヒゲを通っていく。……はでな刺繍をした肌着をつけ、その上に半ズボン(ブラカエ)をはき、マントを

ケルトの戦士をあしらったローマのコイン

はおり肩をブローチでとめている。このマントは夏には軽く冬には重い布でできており、縞目やチェックの模様が、違う色でこまかくついている。」

これは黄色い髪を石灰で固めて逆立て、裸の上に金の腕輪や首輪をきらめかせ、走る馬にひかせた戦車の上から、槍を投げて戦う「戦士」と、ハープを聴きながら、ギリシアのワインに酔い、猪の肉の料理の宴会に明け暮れる「王や貴族」たちのようすです。カエサルは、ガリアには二種類の階級、「ドゥルイド神官」と「騎士」があるだけで、あとの一般庶民は、ほとんど奴隷と同じで、ドゥルイドが定め、王のおこなう命令に、服従していたといっています。

王侯たちの城砦の跡が、ボイン谷のターラやアーマに近いエヴァン・ヴァハに残っていますが、小高い丘を中心にした広大な土地には、その昔、王城や、祭儀所や、騎士たちの館、宴会場、奴隷たちの家や、馬や豚の小屋などが並び、一つの共同体を作っていたことがわかります。こうした一つの部族（トゥアハ）が、王を中心に集落を作り、土地を耕し狩りをしながら共同生活を送っていたわけですが、それが五つの地方、アルスター（古名オリー）、レンスター（ラギン）、マンスター（ムーイン）、コノート（コナハト）、ミーズ（ミー）に二〇〇以上もあったと推定されています。そして地方の各部族の王の上に、さらにそれを統治する王がいました。

興味ぶかいことは、王は戦いのリーダーではなく、高貴な家柄の者から選ばれたということです。しかしその選挙は、統率力を認められて、人々の総意によって、というのではなく、ドゥルイドの神官が、儀式によって決めたといわれています。その選挙の儀式には、いけにえとして二頭の牛が殺され、その肉をドゥルイドは食べてから眠り、その夢の中に現れた者を新しい王として定めたということです。さらにその王が年をとって、王としての任にふさわしくなくなると、儀式によって剣で刺され、その血の出方によって、次の王となるべき者を占ったということですが、神話のなかや伝説として伝えられている話なので、事実といえるかどうかわかりません。

王が部族の集落に住む人たちの最高の権威であったわけですが、ドゥルイド神官がより強力な支配力をもっていたことがわかります。それとともに、王はみずから戦わず、部落の戦士、あるいは雇い入れた騎士を職業とする専門家たちに戦わせるわけですが、騎士ク・ホリンとコノール王の関係は、ギリシア神話のアキレウスとアガメムノン王、アーサー王伝説のランスロットとアーサー王、そして中世の騎士トリスタンとマーク王の関係と似ているようです。これは赤枝の戦士たちやフィアナの騎士たちの話のところでおわかりになると思います。

シーザーの記す神々

戦いと農耕と狩りと移動に明け暮れ、定住の地を持っていなかった「大陸のケルト」は、ハルシュタットやラ・テーヌやマンヒングの出土品に見られるように、「強烈なケルト的色彩」を持った組紐文様や幻獣の図柄、形の細かい巧みな芸術を創りましたが、文字としての記録は残していません。信仰の対象としての神のために神殿を建て、神の像を作りましたが、神の話は残しませんでした。デンマークの泥炭の沼地から、一八八〇年に掘り出されたグネストルプの大釜(コールドロン)(紀元前一二〇年ごろ)には、さまざまな神さまが彫られています——鹿の枝角を生やした神、蛇と輪をにぎった神、イルカに乗って空を飛ぶ神、空想動物のまん中にあぐらをかいているような神、ガーゴイルに似た怪物と戦っている神——それらの動作や表情を見ていますと、さまざまな神話の場面が浮かび、ケルト人の奇抜で奔放な想像力と、巧(たく)みな表現力に感心し、不思議な妖しい神さまたちの話を知りたいと思うのですが、神々の輪郭しか伝わっていないのは残念です。

カエサルが『ガリア戦記』のなかで、ケルト民族が崇(あが)めていた神々を、属性のよく似ているローマの神々と比べながら書いていますが、ごく簡単なものだけです。それらは、テウタテス(ローマではメルクリウス)、エスス(マルス)、タラニス(ユピテル)、ベレノス(アポロン)、ケルヌンノス(ディス、プルートーン)の神々で、ミネルヴァに相当する神はあがって

いませんが、ケルト神話の研究家プロインシウス・マッカーナー博士によれば、女神ブリギッドであるということです。(注6)

各神々を少し見ていきますと、「テウタテス」はもっとも崇拝されており、神像が幾種もあったようです。あらゆる技術の発明家で、旅人の守り神であり、商売と金もうけの神です。血のいけにえを喜び、シャーマンの要素ももっているようです。テウタテスには「好戦的な」という意があり、他の二神エススは「在(あ)る」、タラニスは「光」という意味がありますが、この三神は三位一体ともいえるように、類似しています。

「エスス」はテウタテスとあまり区別がないようですが、戦いの神になっています。雄牛が紋章で、三羽の鶴が回りをまわっています。ケルヌンノス（死者の国、冥府(めいふ)の王）と同一視されてもいますが、この神はグネストルプの青銅の大釜(コールドロン)に描かれた絵では、角をはやし蛇と輪を手にあぐらをかき、鹿や幻想的な動物の中に座っています。エススのいけにえは木につるされました。

「タラニス」は電光と雷鳴で天を支配し、人間のいけにえを好むといわれます。「人身御供(ひとみごくう)はガリアの国家的な制度として認められている。ある部族は、枝編細工でひじょうに大きな人形(ひとがた)（ウィッカーマン）をこしらえ、その手足、胴に生きた人間をいっぱいつめて火をつける。人間は炎に包まれ、息絶えるのである。泥棒とか強盗とか、その他の罪をおかした者を

「グネストロプ」の大釜（コールドロン）
（コペンハーゲン国立美術館）

ケルトの神
（ブロンズ大釜の彫刻．紀元前１世紀）

殺せば、不滅の神々が、いっそう喜ぶと信じられている。けれどもこうした罪人の数が足りなかったら、無実の人も無理やり殺してしまうのである」とカエサルは述べていますが、この犠牲式（いけにえしき）はドゥルイド僧たちがおこなったようです。

「ベレノス」はアポロンと考えられ、太陽神、病を癒（いや）す神といわれています。マッカーナー博士は、ベレノスから「ベルティナ」（五月一日・アイルランドの新年）が由来しており、ベルは、「輝く」意で、ティナは「火」の意といっています。また太陽崇拝は古代アイルランドに強く残っており、太陽は神聖な力、不変の象徴と考えられていたようです。

「ケルヌンノス」は、ベレノスと反対の闇・死・夜・他界の神で、「角（つの）」という意味を持ち、プルートーに相当します。シーザーは、「ディス」ともいっていますが、すべてが、そこから生まれ、そこへ帰って行く大地の創造力を賦与されて、「父」なるという形容詞が、使われています。ガリア人は自分たちはすべて「父なる神ディスの子孫」といっています。

もう一つは「ミネルヴァ」（ブリギッド）ですが、「ミネルヴァは工作と手芸の手ほどきを授ける」としか書いていません。ブリギッドについては、ダーナ神族のところで述べておきました。とにかくシーザーは、ケルト人たちが信仰していた、少なくとも三七四柱はあるといわれるたくさんの神々をローマの額ぶちに入れ、メルクリウス、アポロン、ユピテル、マルス、ミネルヴァ、プルートーといった六つの型のなかに分類しようとしたようです。

このほかガリア人の神として当時崇められていた神をあげますと、カエサルがメルクリウスに相当する神といっているのは「ルゴス」で、太陽や光の神です。「オグミオス」は歴史家ルカンがガリアのヘルクレスといっていますが、雄弁の神であり、「エポナ」は「大きな馬」という意味を持つように、馬の女神です。そしてこうした神々が時代を経たり、政治的な制約を加えられながら、人々の心でさらに生長し、アイルランドの世界に生きてくるわけです。

テウタテス、エスス、タラニスは、三位一体の神として、光と太陽と、あらゆる技術の神である「ルー」のなかに集約され、ケルヌンノスは「ドン」となり、ミネルヴァは「ブリギッド」（ダヌ）として現れてくるようです。属性の類似といえば、黄金のかぶとにサンダルをはき、魔の槍を持ち魔法を使い、巨人を殺す光の神ルーの姿には、北ゲルマン人がオーディンとしてヴァルハラに入れたヴォータンが重なりますし、古いインドゲルマンの神のひとり、ゼウスも魔法を心得ていて変身し、巨人族の父クロノスを殺したことが思い浮かびます。この三人は「クルガン人の子孫が古い伝統から離れ始めた時代に生まれたのではないか、という推測が成り立つ」とヘルムが述べているのは興味ぶかいことです。このルーは女神ダヌを母神とするダーナ（巨人）神族のひとりとなっており、神話では半神半人の英雄ク・ホリンの父として、活躍します。

ドゥルイド僧と修道僧

ケルト社会の二種の階層として、王権に匹敵し、あるいはそれさえ支配したのが、ドゥルイド神官たちでした。ケルト神話の中でも、王の助言者として常に王座の隣りに座をしめ、予言をおこない、オーク（樫の木の仲間）の杖で魔術を起こして活躍します。アーサー王に影のごとくつきそい、その行動の糸を操るように、先に起こることを予言し用意するマーリンも、あるいはドゥルイド僧だったのかもしれません。トールキンのホビットの世界で魔法の剣をふるう、白いひげのガンダルフも、あるいは――と考えられてきます。

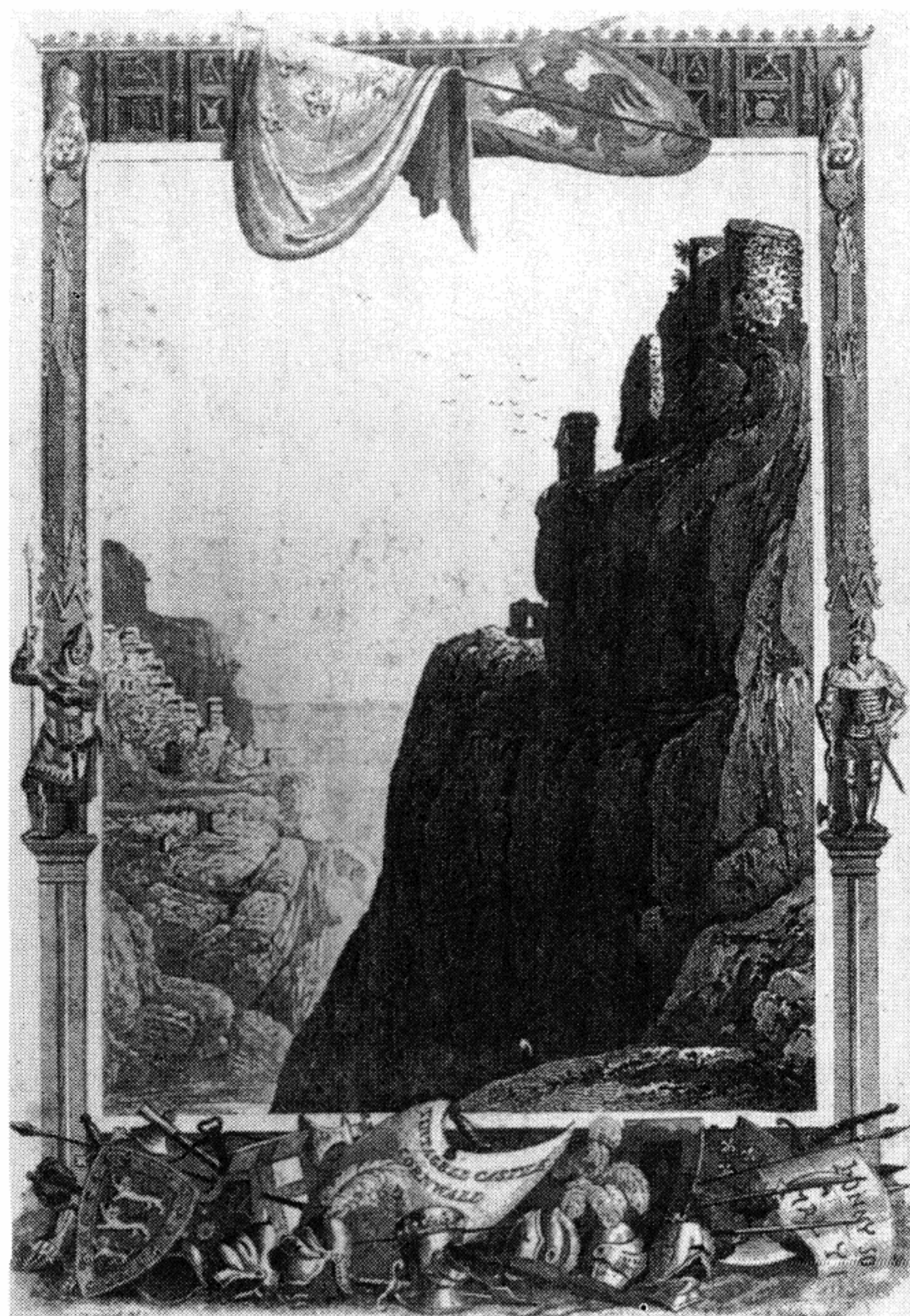
ドゥルはいくつか説がありますが、「オーク」の意、ウィドは「知識」であり、ドゥルイドは「オークの木の賢者」の意、また「ドル」は「多い」で、「ウィド」は「知る」すなわち多く知るの意だという説もあります。オークの木は神木であり至高の神の象徴ですが、樹齢何百年も経つ大木に、うっそうと葉が繁っているところは、神性が宿るという感じを起こさせます。一説によりますと、古代ケルト人が住んでいたころのヨーロッパ大陸は、大部分がオークの木の森林におおわれていたようです。オークの実は、豚が食料として食べたようですが、豚を食べる人間もまた、オークの実をひいて粉にし、それでパンを焼いて食べていたらしく、人間や家畜の生命源として、パンのなる木として、オークの木は、尊ばれてもい

たのです。

プリニウスは『自然誌』のなかで、ドゥルイドの儀式について書いていますが、(注7)このオークの木に宿る「やどり木」(パナケア)が、より神聖なものとされ、毎月六日になると、白衣に黄金の胸当てをつけたドゥルイド神官が、まず白い牛二頭をいけにえに捧げ、木に登って三日月型の黄金の鎌でやどり木を切り、白い布に置いてこれを信仰したと記しています。やどり木の持つ意味もいろいろいわれていますが、万能薬として、煮て飲めば血圧を下げ、つぶして貼れば化膿止めとなるそうです。また落雷よけや魔よけになるという信仰もあり、ゲルマンの神ロキが、光の神バルドゥルを刺した槍も、やどり木製だったことが思い浮かびます。月の下に白くそそりたつ巨石ストーンヘンジの下で、ドゥルイドは儀式をおこない、このストーンヘンジの巨石もアイルランドからドゥルイドが魔法で運んだ、と信じられてきましたが、これはドゥルイド僧の神秘な力を讃えるあまりの作り事のようです。もっとも、ソールズベリーのストーンヘンジも、フランスのカルカッタの巨石群も、暦や占星術のために古代人が作ったようで、祭司や医師のほか、占星術や暦を定める役も果たしていたドゥルイド僧と、縁がないとはいえないようです。

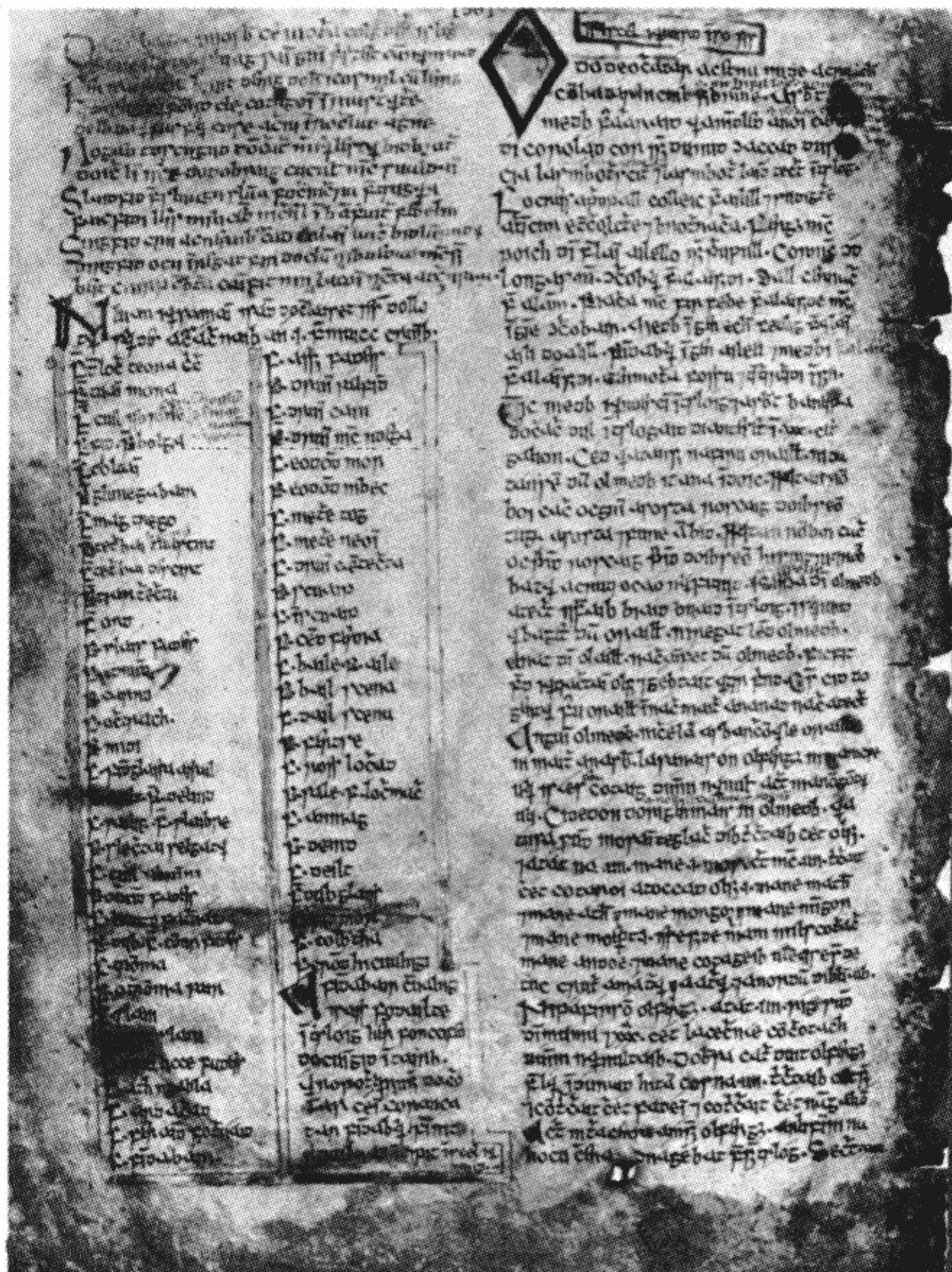
ドゥルイドは「紛争や悶着が起こったら、これを判決する」とカエサルはいっていますが、裁判長の役もやっていたようで、こうした多くのことをひとりで兼ねていた時代もあります

が、しだいに三つ、立法者、祭司と政治、詩人に分かれていきました。詩人というのは重要な役で、これからお話する古い物語を伝承させた人々になるわけですが、今のように創作するだけが詩人ではありません。この時代では、国の法律や宗教の教義や、王家の家系や英雄の栄誉や出来事は、みな詩人がその記憶にとどめ暗誦していったのです。「ぼうだいな教義の詩句を暗誦するといわれ、二〇年間も修業の学校に残る」とカエサルは驚いたように書いています（修業期間は七年から一二年といわれています）。

教師から弟子へと、口移しに伝えられ、暗誦しやすいように教義も系図も規則も物語も、韻律を踏む詩のようにして、合唱したようです、たぶんお経を読むように。ですから、古い物語や、ケルト民族の全知識は、紙と文字で書庫に納められるというのではなく、生きた頭脳にしまわれ、再び生きて次へという形で、何世代にもわたって生きて伝わっていったのです。詩人たちは「語り部」（フィラ）であり、また王の宴の席で竪琴を奏で英雄の物語を歌う「吟唱（弾唱）詩人」（ボエルジ）であり、のちには他の王城をまわって出来事を歌って広める「吟遊詩人」（バード）にもなりました。新聞やラジオはありませんから、騎士の手柄や名誉や王の功績を讃え、みなに伝える伝達機関は詩人を通すほかはありません。そこで騎士も王も、詩人のきげんをそこねぬよう、諷刺されたり悪口をいわれぬよう、詩人を大切にし、ある王などは、詩人の命令通りに、自分の首さえ捧げたそうです。詩にはことばの魂が

凝結しており、呪文と同じ超自然の力が宿る、とも考えられ、それを自在に操れるフィリー（単数フィラ）は、予言者、学者として、また神官として、ドゥルイドのなかでも重んじられていきました。

もちろん口頭伝承だけでなく、西暦四世紀ごろから「オガム」文字といわれるものはありました。これはラテン語を基にしたとも、サンスクリットからだともいわれていますが、五つの母音と一四の子音を、点と線で垂直線の上に示す単純な表記法です。いまでも遺跡の石碑の銘文に残っているので見られますが、名まえや記録ぐらいで複雑な表現には向かないようです。しかし古代では木の断片やロウ、羊皮、牛の皮の上に書かれていたようで、ドゥルイドの呪文や騎士たちの誓約（ゲッシュ、複数はゲッサ）などは、オガム文字で木の上に書かれたようです。

ある話によりますと、ク・ホリンの登場する『トィン・ボー・クールニャ（クーリーの牛争い）』の物語は、ファーガス・マクロイによって木の板にオガム文字で書かれていました。ある吟遊詩人がイタリアに持っていってしまい、紛失したというのです。詩人の長シェナハーン・トルペシュトが、あるとき、王に伝説のうち最も美しいものを歌うよう命ぜられましたが、『トィン』が失われていることを恥と思い、ふたりの息子マアゲンとイーメナを探索の旅に出しました。エイン湖のそばで疲労したマアゲンは休み、弟だけが先へ行きました。残

オガム文字の立石

クーリーの牛争い
（12世紀の写本）

ったマアゲンがそばの石を見ますと、オガム文字でファーガス・マクロイの墓と刻んでありましたので、『トィン』の物語を再話させてほしいと祈ります。すると、霧がわき閃光がひかり、『トィン』の物語が自分の中に甦えるのを覚えたマアゲンは、帰って王の前で語りつづけます。何日も語りつづけるマアゲンのまわりに、不思議な雰囲気がたちこめ、気味わるく思いはじめた王は物語るのをやめるように命じました。歌をやめたとたん、マアゲンは一塊（いっかい）の土と化し、王によって海の中へ沈められ、そのマアゲンとともに、再び『トィン』は消えたというのです。アイルランドの英雄ク・ホリンの話が、オガム文字で書かれ、フィラたちによって歌われ、伝えられていったことを語る興味ぶかい挿話です。

聖パトリックと霊魂不滅の思想

神話も伝説も、こうしたドゥルイドの詩人フィラたち、高度の訓練を積んだ名人たちによって、口伝えに数世代にもわたって伝えられていったのです。そして七〇〇年のころ、はじめて、『クーリーの牛争い』の物語が文字に書かれ（これは残っていません）、それを十一世紀の修道士たちが、あらためて赤い牛の皮の上に筆写していき、『赤牛（ドゥン・カウ）の書』として残っているわけです。それから次々とキリスト教の筆写僧（スクリブナー）たちの手で、「福音書」や「典礼書」「聖歌書」にまじって口承の神話や英雄の物語が装飾され記録され手写本

の形で残されてゆきました。現存するのは断片をまぜて九六〇にものぼるといわれています。『ダロウの書』（七世紀頃）、『ケルズの書』（九世紀頃）、『侵略の書』（一二世紀）、『レンスターの書』（一二世紀）、『レカンの書』（一四世紀）、『バリモートの書』（一五世紀）、『リズモアの書』（一五世紀）など、美しい装飾をほどこされた数々の本が、谷間の緑に囲まれた石造りの修道院から生まれていったのです。円塔とキリストのまわりに太陽の車のあるケルト十字が建つグレンダロックの修道院などは、一時期は部族の集落のように僧房や教会が建ちならび、僧たちは神学だけでなく、古い伝承物語の筆写にいそがしく、ヨーロッパの各地の僧も集まって来て、文芸や学問の中心でした。聖パトリックが四三二年にキリスト教布教に訪れてから、五〇〇年ほど経ったころのことです。

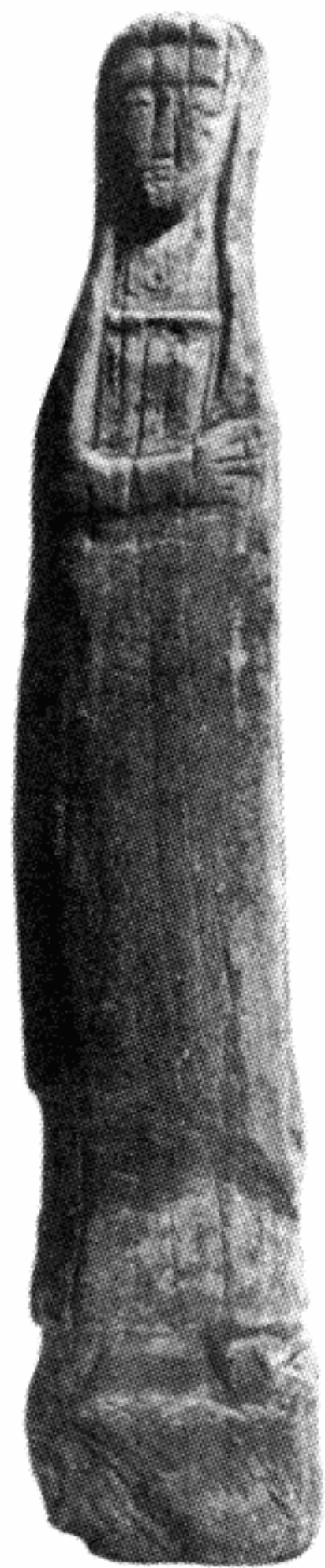
口頭で伝承されていた古代の神話や物語には、異教（ペイガン）の神々がたくさん出てきますのに、聖パトリックも修道僧たちも、それを邪神として否定したり、破棄しなかったことは、異教の神々にとって幸いでした。聖パトリックは、ローマ化されたケルトの地主の息子として、ウェールズ中部に生まれ、一六歳のとき誘拐されアイルランドに奴隷として売られました。アントリムのスレミッシュで六年のあいだ、草を刈り牛を追って農民と暮らしているときに、貧しい人々の心の支えとなっていた土着信仰を知り、ドゥルイドの教義の根深さを身をもって経験したのでした。けっきょくは奴隷生活に耐えられず、故郷のダンバート

ンに逃れ、修行ののち、再びキリスト教布教にアイルランドに来るわけですが、この時の体験が、古い神話や伝説の世界と新しい聖者の世界の境界を、ゆるやかにしたようです。聖パトリックは赤枝の戦士ク・ホリンやファーガスをあの世から呼び出して話したり、フィアナ騎士団のオシーンやキィルータとも旅の道づれになり、思い出の話や川や山や泉、洞窟についての伝説を聞き、聖者はそれを弟子に記録させているのです。

次に来た聖コロンバーヌスも、土地の異教の神たちと、キリストの教義を結びつけて、古い宗教を否定しませんでした、「わがドゥルイドはキリストなり、神の子なり、キリスト、マリアが子なり、大法王なり、父なり、子なり、聖霊なり」というように。見方をかえれば、緩慢な移行措置をとったわけです。ドゥルイドとキリストを重ね、アダムをケルトの祖先とし、ノアの娘を洪水四〇日前にアイルランドに上陸した、唯一にして最初の女性とすることによって、『創世記』と、アイルランドの最初の入島種族パーホロンを結びつけました。いささか強引でもあるようですが、そのためにアイルランドの神々、ひいては妖精たちは、邪神とか悪魔といった汚名をきせられて抹殺されるのをまぬがれ、他の国にくらべ、よりいきいきと息づいているのです。そうした聖者のもとにいた修道院の筆写僧（スクリブナー）たちも、新しい教えと自分たちの血の中のケルトの遺産とを継続させ、古いフィリーの家系の人たちが滅びる前に、メイヴやディアドラ、フィンの話を聞いては書きとめ、さらに、想像

力で豊かにしたのでした。

キリスト教が広まる前に、人々の間にあった土着信仰とは、太陽神や、土地や豊作の神への信仰であり、神話のなかに出てくるダーナ神族と、その末裔である妖精たち、小さな神々への信仰ですが、またその基にあるのはドゥルイドの教義です。「ドゥルイドたちがまず第一に人を説得したいと思っていることは、魂はけっして滅びず、死後一つの肉体から他の肉体へ移るという教えである。」カエサルは短いことばですが、ドゥルイド教の中心「霊魂不滅」と「転生」とをよく語っています。ドゥルイドの信仰は、太陽崇拝であり、自然は霊的な力を持つという汎神論的な考えです。自然すなわち太陽や星など天体の軌道の運行や、四季の移り変わり、そうした悠久の円環の動きを崇拝して、すべての霊、人間の魂は、この軌道と同じくまわると信じたのです。

そして自然の草木や動物や人間を貫いて、しかも森羅万象に生命と活動を与える遍在的な霊が存在すると信じ、その霊が不滅であり、永遠に活動を続けると考えていたのです。その大霊(たいれい)は永劫にめぐり動いて、生命を転生させてゆくと考えれば、死というものは終わりではなく、もう一つの生への入り口となり、他の生へ行くまでの休息期間となります。庭の小鳥は、昔かわいい子どもだったかもしれませんし、夕暮れにとぶ蛾は、おじいさんの魂かもしれないのです。

樫の木像
（いけにえの代わりに使われた）

ケリーの列石

神話には転生の話がたくさんあります。トァン・マッカラルが鹿・猪・鷲・魚に変わる話をのせましたが、ほかに生前自分が何であったかを覚えている者に、ウェールズの女神キャリドウエンの産んだタリエシンがいます。前世では違う人物ギォン・バッハであり、その生成の過程でたくさんの動物や植物に転生しているのです。兎——犬——魚——川獺（かわうそ）——鷹——麦となり、最後にニワトリになった女神に飲みこまれ、その体内に宿って生まれたとなっています。ク・ホリンもルーが小さな虫となって母親に飲み物といっしょに飲みこまれて生まれていますし、エーディンの二度目の生も同じ経路です。また白鳥に変わったり、蝶に変身したり、神話の世界の神や英雄たち妖精たちは、自在に他の生へ再生し、転身していきます。

自然や人間を共通に貫いて、目に見えぬ大霊が存在するとしますと、人間の生は目に見えない力にいつも支配されていることになるわけですが、この大霊が永劫にめぐり、生命を転生させていく力なのです。ケルトの人たちは目に見えぬ世界（常若（とこわか）の国）や、目に見えぬ種族（ダーナ神族）の存在を信じ、そこと自在に行き来しているのです。この世と直結し、隣接しているもう一つの世界と、もう一つの種族（神話の神々、伝説の英雄たち、伝承の妖精たち）とが、人間の生活と深い関わりを持っていると信じているのです。そして神話の世界ではたがいに行き来しています。神は英雄と結婚し、英雄はまた妖精の恋人となるというよう

に。

こうした古代神話を記録した文献は、ノルマンの侵入をくぐって残っているので、断片のものもありますし、さらに古代アイルランド語であるうえ手書きであるので完全な復元は難しいようです。先に述べた『赤牛の書』などは、一七世紀中期に、クロムウェルがアイルランドに侵入して来たとき行方不明となり、一八三七年にダブリンの古本屋が発見したのです。いまではダブリン国立図書館にだいじに保存され、もうこうした危険はないようですので、『トィン』の他の話も、現代語訳されるといいと思います。

ケルトの神々や英雄の話は、こうして修道僧の手で残されたり、一部は伝承の形で各地方の民間に伝えられたりして生き残っているわけですが、ケルトの学者マイルズ・ディロンの分類に従って、それを三つに分けてみました。

㈠ダーナ神族の神話群（アイルランドの最古の神々の話『侵略の書』、『レンスターの書』、『バリモートの書』の一部）。

㈡アルスター神話群（一世紀ころのコノール・マックネッサ王と赤枝の戦士団、『クーリーの牛争い』。『レンスターの書』、『リカン黄書』）。

㈢フィニアン騎士団（紀元四世紀ころのフィン・マクール王と騎士たち）。

ディロンは㈣として歴史（王たち）の物語を入れています。㈡と㈢は英雄サガに入るかも

しれませんが、アキレスのような半神半人の英雄たちの話であり、まだダーナ神族の神々たちが活躍しているのです、英雄の父親として。ですから神話の話として入れました。

（注1）Gerhard Herm : *Die Kelten* 1975『ケルト人』ゲルハルト・ヘルム著、関楠男訳、河出書房新社（一九七九年）
（注2）Myles Dillon : *Early Irish Literature* 1948『古代アイルランド文学』マイルズ・ディロン著
（注3）Julius Caeser : *De Bello Gallieo* 55 BC.『ガリア戦記』ユリウス・カエサル著、近山金次訳、岩波文庫（一九四二年）
（注4）Strabo : *Geographica*『地理学』ストラボ著
（注5）Diodoros Siculus : *Bibliotheke* 60-30 BC.『図書館』世界史四〇巻、ディオドロス・シケリオス著
（注6）Proincius MacCanna : *The Celtic Mythology* 1970『ケルトの神話』プロインシウス・マッカーナー著
（注7）Plinius : *Naturalis Historia* 77AD.『博物誌』プリニウス著、中野定雄・里美・美代共訳（三巻）、雄山閣（一九六一年）

Ⅰ　「天地創造神話」のない神話

地下から来た神々

ケルト民族には、ほかの民族が持っているような天地創造神話はありません。しかしこれはなかったということではなく、あったかもしれないのですが、残っていないという意味なのです。口承としてドゥルイド僧たちが、あるいは伝えていたかもしれないのですが、文字としては残っていません。あるいはドゥルイドの教えが、天地が創造されることについて想像したり、推定したりすることを禁じたとも考えられるのです。ですから、原初に空や地や水がどのような形であったか、そこから宇宙や世界がどう生成されてゆき、生き物がどう生まれていったかというような国生みの話はありません。

しかしここに興味ぶかい挿話があります。アレクサンダー大王の親しい友人であったプトレマイオス・ソテルが記していることですが、紀元前三三四年のころ、ドナウ河とポー河の

流域に住んでいたケルト民族と、アレクサンダーは同盟を結んでいました。大王はアジア遠征の志を抱いていましたので、その留守のあいだ、ギリシアの反乱を平定して手にした支配権を、ほかの国から守るために、戦いに強いケルトを味方にしておく必要を感じたのでした。あるとき、大王はケルトの使者を招いて宴会を催していましたが、使者たちにこうたずねました。

「あなた方ケルト民族が、もっとも恐れるものは何でしょうか？」

巨大なたくましい体をした、ケルトの戦士たちはこう答えました。

「わたしたちは、どんな人間も恐れません。ただわたしたちが恐れるのは、空がわたしたちの上に落ちて来ないか、ということだけです」

そしてさらにケルトの使者たちは、大王の前でこう誓ったそうです。

「もしわれわれがアレクサンダー大王との同盟を守らないならば、空よ、われわれの上に落ちて、われわれを木端微塵（こっぱみじん）に砕け、大地よ、裂けてわれわれすべてを飲みつくせ、海よ、割れてわれわれを巻きこめ！」

この挿話から数百年のちに存在したといわれるコノール・マックネッサというアルスターの王は、コノートとの戦いのとき、みなに向かってこういう誓いのことばをいいました。

「空はわれわれの上にある、大地はわれわれの下にある、海はわれわれの周囲にある。空が

三柱の地母神

ケルトの雷神タラニス
（ブロンズ像）

馬の女神エポナ
（石像）

われわれの頭の上に落ちてこない限り、大地が裂けてわれわれを飲みこまない限り、海が割れてわれわれを巻きこまない限り、わたしは女たちを家に返し、家畜を納屋に返すだろう！」

この二つのことばから推定されるのですが、ケルト民族の間には、「空が頭の上に落ちてくる」という恐怖に近い考えがあったということです。空や大地や海が重要な意味を持っており、それが英雄や王にさえ、誓いのことばとして使われていたことがわかります。たぶんドゥルイド教が禁じていた掟を破った者の上には、空が落ちてくるぞといわれていたかもしれません。空が墜落してくるという考えから、天地創造の神話時代が少しのぞけるような気がしますが、しかし落ちてくる空はどのように創られていたか、空・大地・海は、どう生成したと考えていたか、などについては知るよしもありません。

残っている記録から考えてゆきますと、ケルト民族は、そうした宇宙の起源や原初の世界のあり方を想像するより、国土の成り立ちやそこに住むようになった民族について、より多く考えていたようです。日本の神話でいいますと、イザナミとイザナギ二柱の神による国生みの部分がなく、高天原の天孫降臨から始まっているような印象を受けます。しかし、日本の八百神（やおよろずのかみ）が、天から下界の山へと下って来たと考えられているのにたいし、ケルトの神々は、地下から上へやって来たと信じられているのです。

ドンヌと呼ばれる地下の暗黒世界の神は、死と冥府の神でもあり、また父なる神でもあって、人間はそこから生まれて再びその「ドンヌの家」へ帰るのだといわれており、そのドンヌの家は、アイルランドの南西の方角にあると信じられています。ドンヌは恵み深い面と残酷な面を持っており、嵐を起こして船を難破させると同時に、家畜や穀物を稔らせもするのです。いわば地下と海のかなたのあの世から、人類は来て再び帰る、そうした円環の生命の動きを司っているわけです。混沌や深淵に大地の創造力があり、大地ガイアのエレボス（夜・冥府）からクロノスが生まれ、そこから人類が生まれてくるとするギリシアの天地生成神話に似た考え方があるようです。しかしどのようにドンヌから人類が生まれたかとなると、その話は残ってはおりません。

残っている古書『侵略の書（レボル・ガバーラ）』（九五〇年〜九八四年）には、エリン（アイルランド）の島にどのように種族たちがやって来て住みついたか、が記されています。ヨケイ・オフリンという詩人の一四編の詩の中に、古代神話の世界が歌われていますが、しかしこれはキリスト教が入ってから書かれましたので、ケルト民族をアダムと結びつけていますし、一番はじめに島に来たのは、ノアの息子ビトの娘セゼールであったとされています。『創世記』と結びつけたのでしょうが、興味ぶかいことに、セゼールたちは、ノアの洪水の四〇日前に島に来て、けっきょくは水に滅ぼされるのですが、そこでたったひとりフィンタンという男が生き残り、

五〇〇〇年も生きて、見聞きした古代神話の出来事を語り、それが記録されたことになっています。
『創世記』の中にモーゼはビトの名もセゼールの名も書くことを忘れています。ノアが方舟を作っているとき、ビトは自分と娘セゼールのためにも、舟の中に部屋を作ってほしいといったところ、ノアはこう答えたそうです。
「この世界の西の果てにある島に行くがよい。大洪水もそこまではとどかないだろうから」
そこでセゼールは三艘の船を準備し、七年と三か月海を漂い、アイルランドにやっと着いたときには、二艘は沈み、セゼールと父ビトと男ふたりに女たち五〇人になっていました。しかし罪にけがれていない、洪水の罰も下されないであろうこの西の島に、ノアの息子と孫とがはじめて上陸したわけで、これがアイルランドの最初の人類となっています。けれど四〇日後に水によって滅びてしまいます。
フィンタンだけがひとり生き残るわけです。
「大洪水がやって来てビトやセゼールを流したとき、わたしも洪水の激流の下になったり、逆巻く大波の上になったりしながら、ずっと一年のあいだ眠り続けていました。それからアイルランドの島にパーホロン一族が西の方ギリシアからやって来るまで、わたしは海に漂っていたのです」

フィンタンは次々と入来した五つの種族の歴史を語っています。(1)パーホロン、(2)ネメズ、(3)フィルボルグ、(4)トゥアハ・デ・ダナーン、(5)ミレー族、これらが神話時代の五つの種族で、最後のミレー族から人間の歴史に入って行くことになっています。この神代の五種族の興亡については、フィンタンほど長生きではありませんでしたが、三二〇年ほど転身しながら生き続けて歴史を見ていたという、パーホロンの生き残りトァンの話を後で聞くことにいたしましょう。

ただこの五種族たちのほとんどが、西の国、海の西の方角からやって来たとされていることは、興味ぶかいことです。最初の種族パーホロンの父の名はセラですが、「西方」という意味です。西の海のかなたには幸いなる他の国、死の国が横たわっていると考えられていました。フィンタンはギリシアからといっていますが、またスペインからあるいはシシャ（黒海北海岸にあった国）から来たともいわれています。そして各種族はフォモール族と戦わねばならなかったとなっていますので、フォモール族のほうがあるいは古い居住者のように思われますが、記録は残っていません。あるいは海を渡って攻めてくる北の海賊のようになっていますので、定住地はないのかもしれません。フォモールとは「海の下」という意味で、茫漠とした黒い水の底は魔性のものが生まれるところで、闇や悪を象徴する邪神と考えられていたようです。ぶかっこうな怪物が多く、一つ腕だったり、山羊や馬や牛の頭をしている

かと思うと、ケンコスというのは足がありませんし、キコルは手も足もない魔物で、バロールは二つ目があっても一つ目しか使えず、そこから人を殺す光を出しますので、ギリシア神話のサイクロップスとメデュゥサの混合した怪物のようです。この巨大で醜く残忍なフォモール族たちと、神話の種族は次々と戦いを交えるわけですが、最後に、光と昼の神、ルー（ルーク）の正義の剣（つるぎ）の下に滅ぼされることになります。

ヘシオドスのギリシア神話でも、ギリシアの神代に地上に次々と原初の人類たちが現れ、次の種族が来る前に、前にいた人類はぜんぶ滅びてしまったことになっていますが、アイルランドの五種族も同じように滅んでいます。またヘシオドスではオリンポスの神々によって初めに「黄金の種族」が創られてクロノスの支配の下に暮らし、次に「銀の種族」が創られてゼウスの下に住み、とつぜん怒りにふれて絶滅すると、次にゼウスは「銅の種族」を創りだし、そして最後にもっと優れている半神半人の英雄たちを創ったことになっていますが、ケルト神話の五種族も、この神秘的な種族の出現と似ており、クロノスやゼウスといった神の創造の手はなく、西の方からやって来たわけですが、パーホロンは「銀の種族」に相当するでしょうし、ネメズは「青銅の種族」、トゥアハ・デ・ダナーンは「黄金の種族」、そして半神半人のテーベやトロイの英雄たちは、ミレー族のク・ホリンやオシーンたち英雄ということになるようです。

国造りを見た男トァンの話

いちばん初めにアイルランドに入来した種族パーホロンがぜんぶ死に絶えたとき、たったひとりだけ生き残った男がいましたが、それはトァン・マッカラルでした。トァンは次々といろいろな動物に生まれ変わりながら何百年も生き、島にやって来た五つの種族の盛衰のありさまを見て、後の世の人に語ったという話が、一一〇〇年ごろの『侵略の書〈レボル・ガバーラ〉』という古い写本のなかにあります。いわば神話を見た男の話ですが、これはちょうどわが国「豊葦原瑞穂国」に神々が天下られ、野蛮な悪神たちを平定して、国の礎をきずいた神話の時期に相当するかもしれません。

六世紀ごろ、すでに聖パトリックがキリスト教を布教してから一〇〇年ほどたったころのことですが、ドネガル地方のマグヴィルというところに、僧院がありました。聖フィネンが

僧院長として、多くの弟子たちと暮らしていました。あるとき、近くに住んでいた金持の軍人、トァン・マッカラルの家を、聖フィネンは訪ねました。しかしトァンは会うのを断りました。聖フィネンは思うところあって、トァンの家の戸口で断食をしてまで会おうとしましたので、異教徒のトァンも、とうとう聖フィネンに戸を開いて招き入れ、やがては彼のほうから僧院長を訪ねてくる間柄になりました。

親しくなった僧侶たちが、トァンに生いたちや祖先のことをたずねましたところ、驚くような答えが返ってきたのです。

「わたしはアルスターの人間で、いまはカレルの息子トァンです。けれど以前、わたしはセラの息子トァンでもあったのです。父のスターンは、アイルランドに最初に渡って来たパーホロンの弟です」

そこで聖フィネンが、トァンがこれまでに見たり聞いたりしたアイルランドの歴史を話してほしいと願ったところ、大洪水の前に次々と島に渡って来た種族たちの運命とようすを語りはじめました。

「一番初めに西の方から、海を越え船でやって来たセラの息子パーホロン一族は、二四人の男と女でした。この時期、アイルランドには一つの野原が開け、三つの湖と九つの河が現れました。五〇〇〇人まで人々が増えたとき、ある年、疫病が一族のあいだに流行し、ひとり

を残してぜんぶが死に絶えてしまいました。そのひとりがこのわたしです。たったひとりになったわたしは、岩から岩へ、狼をさける隠れ家を見つけながら、荒れ果てた島の中で二二年のあいだ生きていました。

わたしは老いと衰弱を感じ、体をひきずるようにしながら、岩の洞穴(ほらあな)で暮らしていたのです。そうしたある日のこと、崖の上からほかの種族たちが上陸して来るのが見えました。わたしの父の弟、アグノマンの息子であるネメズたちでした。このときまでに野原は四つになっていました。わたしの爪や髪は長くのび、髪の毛は真っ白くなり、裸同様でしたので、ネメズの連中に見られたくないと思い、岩屋のなかに隠れて暮らしていました。

しばらくたったある朝のこと、目をさましてみますと、自分が雄鹿に変わっているのに気づきました。年老いて弱り果てていた体には、再び若々しい生気があふれ、心は喜びでいっぱいになっていました。それで勢いよくかけ出しますと、森に入り鹿の王となったのです。わたしはネメズが島にやって来たことと、わたしの変身を喜んで歌いました。この時期アイルランドには一二の野原が開け、四つの湖ができました。戦いに勇ましいネメズたちに、森でわたしは傷つけられそうになりましたが、わたしにも勇ましい二本の角がありましたし、速い脚もありました。

ネメズ一族は三四艘の船に三〇人ずつ乗ってやって来たのでしたが、航海の途中で飢えや

難破でほとんどは死に、上陸できたのは九人、ネメズのほか、四人の男と四人の女だけでした。その後何十年かが過ぎ、男女合わせて八〇六〇人になったとき、不思議なことにとつぜん、ぜんぶ死に絶えてしまいました。一方ではフォモール族と戦ったのですが、一〇人の三倍だけを残して、海はすべてを飲みつくしてしまいました。」

（残った三〇人は島を去ってギリシアか北の国へ行き、後世の記録では、このときに逃れたネメズの一族がブリテンの統治者となり、ほかの二家族が一つはフィルボルグ族となり、もう一つがダーナ神族となって、再びアイルランドに帰って来たという説もあります。）

「またわたしの体には変化が起こりました。老いと衰弱を感じながら、森の洞穴の前に立っていますと、急に自分がほかの動物になっているのに気づいたのです。肉体はまた若々しくなり、心は喜びにあふれ、力いっぱい野山をかけめぐると、こんどは猪の王になったのです。やがて、フィルボルグ（《皮を持つ人》の意）一族が、動物の皮袋の船に乗ってやって来ました。この時期になりますと、島にはもう地形の変化はなく、フィルボルグ一族は、島を五つの部分に分けて、住みよい共同生活をしていました。

わたしはまた年老いて、弱り果ててきました。暗い洞穴のなかでたったひとり、三日のあいだ何も食べずにじっとしていました。三日目に、全身の力がぬけたように感じますと、こんどは大きな海鷲になっていました。心には再び喜びがもどり、なんでもできるような感じ

がしました。翼に若さと力をみなぎらせて、空に舞いあがり、空の高みから島ぜんたいを見下ろしたとき、女神ダヌから生まれた一族たち、トゥアハ・デ・ダナーンが島にやって来るのが見えました。ダーナ神族は魔の雲に乗って姿を隠してやって来ました。雲が消えてやっとフィルボルグたちに見えるようになったときには、すでにダーナ神族はコノートの北西に上陸し、レイン平原の砦の中にいました。すぐれた技術と知恵を持ったダーナ神族は、一時は島を支配しましたが、次にやって来た、ビレという地下の神の息子ミレに率いられ、三六艘の舟に乗って西の方からやって来たミレー族に破れてしまいました。ミレー族たちは、ティルタウンの戦いでダーナ神族に勝ったのです。戦いに破れたダーナ神族は、地下と海のかなたに逃れて、そこに国を造って住むことになりました。

ある日、また体に変化が起こるのを感じて、河のほとりにある木のほこらで、九日のあいだ断食をしていました。断食が終わりに近づいたころ、眠りに襲われ、さめてみますとこんどは鮭になっていました。漁師のつり針とモリの先を逃れて、河の中を自在に泳ぎまわって、楽しい日々を過ごしていました。ところがある日のこと、漁師の網にかかってしまったのです。漁師はわたしを、そのころ、アイルランドの統治者であったミレー族のカレルの妻のところへ持って行きました。わたしは料理され、カレルの妻に食べられてしまいました。わたしはそのままカレルの妻の子宮に落ちると、カレルの妻の腹から、カレルの息子トァンとな

って、またこの世に生まれて来たのです。わたしはそのときのことをよく覚えていますし、カレルの家のようすやその時代にあったこともよく記憶しています」

こうしてトァン・マッカラルは、自分の生いたち、転身のさま、入島した五つの種族の歴史を次々と語り、僧侶たちが後世に伝えてくれることを願いながら、まもなくこの世を去ったのでした。

II　ダーナ神族の神話

ダーナの神々

トァン・マッカラルが語った入島した五つの種族のうち、際立った属性を持った神々がたくさんいるのは、トゥアハ・デ・ダナーン、つまり「女神ダヌを母とする種族」です。ダナーン巨人神族ともいわれるこのダーナ一族は、いわば昼と光と知恵を表す良い神々で、次に来たミレー族に戦いで破れ、海のかなたと地下の国に逃れ、そこに美しい国を造って、目に見えない種族、妖精（シー、シーブラ）となったと信じられています。

トァンはこの種族にだけ、神々ということばを使っています。そしてこの島にやって来るのに魔の雲に乗ってやって来たので、三日のあいだ太陽は隠されていたといわれています。ダーナ一族は魔術や予言やドゥルイドの呪術にもたけていたようで、神々は超自然の力をさまざまに発揮します。金髪碧眼で、背が高く美しい姿をしており、音楽の才にもすぐれてい

たとされていますが、ミレー族たちが、滅んだ種族を、後になって美化したとも考えられています。

女神ダヌ（属格ダーナ）は、中世までブリギッドといわれ、同じ神とされていますが、ゴール族の記録には、ブリギンド、ブリテンの古書ではブリガンティアとあるのがこの女神だといわれており、ケルトの万神庁（パンテオン）の主な神、生命の源の母神となっています。全能の神ダグダの同じ名まえである三人娘のひとりといわれ、ダヌが朝日と共に生まれたとき、家は炎で明るくなり、火の柱は天にのぼったといわれ、火とかまどと生命と詩歌の女神とされています。他のふたりの姉妹は、鍛冶と法律の女神になっていますが、これは三位一体であるようです。フォモールの王ブレスの妻となって、ブリアン、ヨハル、ヨハルヴァという三人の息子を産みました。この三人は芸術と文学の神です。しかし三人ではなくて、エクネという知恵と詩歌の神ひとりだともいわれていますが、ケルトは三という数を好んで、母のダヌの場合も、ひとりのうちに三人の姉妹が入っているように、三つの面を示しているとも考えられます。

母なる女神ブリギンドへの信仰は、ゴール人たちの間に古くからおこなわれていましたし、ブリガンティア崇拝もウェールズやイギリスの地方に古くから伝わっていました。アイルランドには一二世紀の古文献にブリガンティスという形で書かれていますが、語源である「ブ

リ」には、「優越、能力、権威」という意味があります。中世になってアイルランドで、ブリギッドはダーナという名まえで呼ばれるようになり、キリスト教が入りますと、キルディアの聖ブリジッド信仰との混同も見られてきます。

さらに興味ふかいことは、ローマやギリシアの歴史家が述べていることですが、ローマを征服したゴールの隊長も、デルフォイを攻撃した兵士たちの指揮官もブレノスと呼ばれており、フランスの歴史家は、ブレノスというのはゲール語で「王」という意味があったといっていることです。そして女神ダヌの息子ブリアンとブレノスが混ざりあってゆきます。またブレノスという語は中世以前にはブリガンテス、後になるとブリジッドとなったとする説もあり、名まえの上でいろいろな混合がおこなわれていったことがわかります。そして、ローマやギリシアを一時でも打ち負かした超自然的な驚くべき力を持った軍隊が、神秘的なブレノスに指揮されていたと信じられ、その母神であるダヌへの恐れと崇拝が敵側にも味方の側にも強くなっていったとも見られるのです。ブレノス、のちになってブリアンがダーナ神族の第一におかれ、その母神たるダヌは昼と光と生命の神々の代表となり、女神の主な属性も混ざりあって主神になっていきます。

他の女神とも混同される例として、マンスター地方の守護神であるアーニャがありますが、信仰の聖地であるケリーの二つの丘「アーニャの乳房」はダヌのものだともいわれています。

キルディアの聖ブリジッドとの混同も、ダヌ（ブリギッド）を崇拝するあまり、この異教の神をキリスト教の聖者ブリジッドと同一視させて信仰しようとする現れと見られます。ウェールズの中世の学者ギラルドゥス・カンブレンシスは次のようにいっています、「いまでもキルディアのお宮には、たえず聖なる火が燃えつづけている。ブリガンティアと同じと見られて信仰されているようだ」。ケルトの人々が目に見えぬ霊を大切にし、宗派がどうであれ崇める傾向があったことがわかります。

さて、このダヌ女神から出た神族たちが、魔の雲に乗り、風と雨といっしょにアイルランドにやって来ましたので、フィルボルグの人々は、三日三晩外に出られなかったと、トァンは語っていました。しかし、海を越え、南の島からやって来たのだという説もあります。この説がおもしろいのは、ダーナ神族がその島から、魔法の力のある道具を四つ持って来たとされていることです。南の島の神秘の四つの町、フィンディアス、ゴリアス、ムリアス、ファリアスで、ダーナ神族は詩歌の才と魔術を身につけたとともに、各町から宝物を持って来たのでした。わが国の三種の神器、八咫鏡（やたのかがみ）、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）、草薙剣（くさなぎのつるぎ）に似て、権威や豊饒や戦いの象徴のような宝物です。

まずフィンディアスの町からは、ヌァダの神の剣を持って来ましたが、ひとふりで敵を倒し何者にも破れぬ「魔剣」です。ゴリアスの町からは、光の神ルーの「魔の槍」、ムリアス

の町からは、ダグダの神の「魔の釜」でした。この釜からは、いくらでも中身が出て絶えることがなく、ちょうど打出の小槌のような釜です。そしてファリアスの町からは、「リア・ファイル」という「運命の石」が来ました。この石はアイルランドの初期の王たちの手に渡り、正しい王が戴冠式のときにその上に立てば、人間の声で叫び声をあげ、予言をするといわれています。六世紀にアイルランドの王マータフ・マクアークから、ファーガス大王が即位するときに借りてスコットランドに運んだことになっており、その後一二世紀にエドワード一世がスコーンからイギリスへ移し、いまはウェストミンスター寺院に、「戴冠石」として安置されているのが、その石であるといわれています。しかし後世の説によりますと、スコットランドのスコーンの石とアイルランドのターラの石との二つは別であり、またターラの石は元の場所とは違いますが、ターラの丘にいまでもあるそうです。

先住のフィルボルグは、スレングという戦士をダーナ一族に送って会見を申しこみました。ダーナのほうはブレスという戦士を送り、ふたりはおたがいに相手の武器を見てまわりましたが、ダーナ一族の槍も剣も楯もみなきらきらと輝いて鋭そうでしたのに、フィルボルグ一族の武器はみんなさびて切れ味が悪そうでした。フィルボルグ一族はダーナのすぐれた武器や技術を認めて、島を二つに分けて住むことを承知しました。しかしまもなく後から来た種族に支配権を譲ったことへの不服が爆発して、モイツラの平原で戦いとなりました。この戦

いはヌァダに指揮されたダーナ神族の勝利となり、王マクアークの下のフィルボルグの軍勢は破れて、コノート地方にだけ住むことになって、一時期、アイルランド全体はダーナ神族の統治となったのです。

そしてまたダーナ神族は、モイツラの野で二度目の戦いをフォモール族と交え、これを破りました。「死と夜と悪」の邪神にたいする「生命と昼と善」の神々の勝利ということになります。この戦いでは光の神ルーや技術の神ダグダ、知恵の神オグマなど、多くの神々が活躍しますが、神々の話は独立させて述べることにしましょう。そのためにも、代表的なダーナ神族を女神ダヌのほかに一二人掲げるとすれば、次の神々になると思いますので、簡単に紹介します。

1　ダグダ　大地と豊饒の神、赤毛の知恵の神、父なる全知全能の神ともいわれる。魔法の棍棒と竪琴と釜を持つ。ダヌの父。息子にオィングス、オグマ、ミディール、ボォヴがいる。

2　ヌァダ　ダーナ神族の王。モイツラの戦いで失った片腕の代わりに、ディアン・ケヒトが銀の腕をつけたので「銀の腕のヌァダ」と呼ばれる。「不敗の剣（つるぎ）」を持つ。戦いの神として、ローマのマルスやユピテルと同一視される。

3　ルー　太陽・光の神。知識・技能・医術・魔術・発明など全技能に秀でる。戦いにも強く槍を巧みに使うので「長腕のルー」ともいわれる。「ルーの鎖」は天の川。ディアン・ケヒトの孫。金髪で美男で強く、英雄の原型で、英雄ク・ホリンの父。ローマのメルクリウスといわれる。

4　マナナーン・マクリール　海の神リールの息子で、父リールより海神としての性質を多く備えている。海のかなたの「常若の国」の王。マン島にはマナナーンの王座がある。魔法の船、魔法の馬、魔剣を持つ。彩色のマントをひるがえし、馬車(シャリオット)に乗って海をかける。水夫・漁夫の守り神。

5　ディアン・ケヒト　医術の神、薬草と魔術で病いや傷を癒す。泉に呪術をかけ、傷ついた戦士を元通りの体に治す。生命の神として、ローマのアポロンに相当する面を持つ。娘にエーディン、息子にキァンほか多くの子どもがいる。

6　ゴヴニュ　鍛冶の神、技術とくに建築の神、呪術者でもある。作った武器は必ず敵を倒す。病を治す力も持つ。他郷(アザー・ワールド)に行き「ゴヴニュの宴(うたげ)」で酒を飲めば、不老不死を得る。

7　ミディール　地下の神、ロングフォードとマン島に妖精の丘を持つ。ダグダの息子。マナナーン・マクリールに育てられ、オィングスを育てる。魔法の牛と魔法の釜を持つ。

8 **オイングス** 愛と若さと美の神。ダグダとボアーンの間の子。ボイン河のほとりにある妖精の丘の王。

9 **オグマ** 雄弁、霊感、言語の神、また戦いの神。オガム文字の発明者ともいわれる。ライオンの毛皮を着た年寄りの姿をし、舌先の金の鎖が耳につながり、ことばは黄金を示している。ディアン・ケヒトの娘エーディンと結婚する。トゥレン三兄弟、諷刺詩人コープル、ダーナ神族の三人の王マクイール、マクケフト、マクグレーネも子どもたちである。

10 **モリガン（モリグー）** 戦いの女神。カンムリ鳥の姿で戦場を飛びまわり、血と死を求める邪悪な女神。乙女、老婆の姿、牛・狼・鰻・海蛇に変身する。アーサー王伝説のモルガン・ル・フェの前身。ダグダの愛人。

11 **ヴァハ** 戦いの女神であり、モリグーとバズヴと彼女の三人はしばしば同一視される。戦場の人間の首を餌とする鳥の姿をとる。浅瀬で、戦死するはずの人の鎧や武器を洗うといわれ、死を予告する不吉な妖精バンシーの前身。

12 **ボアーン** ボイン河の女神。ダグダの母でその愛人。ふたりの間にオィングスが生まれる。ボイン河のほとり（ニュー・グレンジ）の妖精の丘（ブルー・ナ・ボーニャ）の女王。

ダーナ神族と妖精と常若(とこわか)の国（チル・ナ・ノグ）

ダーナ神族が後から来たミレー一族に破れたときの興味ぶかい挿話があります。

ミレーの軍勢がアイルランドに上陸したとき、ターラにいた三人の王は、三日の間ミレーの軍勢が退くなら、戦いを続けるか屈服して国を渡すか、どちらかに決めると申し出ました。ミレー一族は、王の弟で最古の詩人であるアマーギンの助言と予言に従いました。

それはダーナ神族の申し出を入れて、海岸から九つの波の長さだけ船で退いて待ち、また帰ってくること、そして戦いを再び始めるなら、正しい戦いの権利によって、三日の後にはアイルランド全土はミレー一族のものになるだろう、という予言でした。このことばに従ってミレーの軍勢が船で海上を引きあげ始めますと、ダーナ神族は魔法の力によって大波と霧とを起こしました。ミレーの軍勢は視界をさえぎられ、海上を迷い続けました。恐れたミレ

ーの軍勢たちは、ダーナ一族が魔法の風を起こしたのだといい、ある者はドゥルイドの神の起こした嵐だといい、ある者は自然の霧と風だといいました。そこで原因を知るため、ひとりの兵士がマストに登りました。自然に起こった嵐や霧であるなら、またドゥルイドの神の風や霧であっても、空の上には同じように風が吹き霧が立ちこめているはずです。

マストのてっぺんに登った兵士は、大風のためはげしく船がゆれたので、ふり落とされて、甲板にたたきつけられてしまいましたが、死ぬ前にこう叫びました、「上の方には、風も霧もなかった！」。それでみなは、やはりダーナ神族が魔術を使って風と霧を起こしたことがわかりました。そこで詩人アマーギンが呪文を唱えますと、嵐はやみ、霧は晴れ、舟は海岸へと向かいました。ところが、ミレー族の軍勢の大将のひとりであるエバァ・ドンが、ダーナ神族にたいして憤り、「剣にかけてみな殺しにする」と誓いを立てました。すると再び大きな嵐が襲って来たのです。この恐ろしい誓いは、ドゥルイドの神の怒りにふれたのでした。この嵐で軍勢の船はなん艘も沈み、エバァ・ドンの船も海底ふかく沈んでしまったのでした。

けれどティルタウンの原で大合戦となり、三人の王は殺され、ダーナ神族は破れて予言通りミレー族の勝利となったのです。予言を占って呪術で嵐をとめたのは、詩人でした。当時詩人は最高の能力を持ち、思想に火をつける者として、崇められていたことがわかります。そしてダーナ神族たちが、天候を支配する超自然の力を持っていたことも、この挿話から、

うかがえます。

勝ったミレー一族は、地上の全土を支配し、ダーナ神族は地下に逃れて住むことになりました。しかし姿を隠す衣を着て地上に出て来たり、また人や動物や鳥や蝶に変身して目に見える世界に自在に現れ、ダーナの神々は生き続けていると人々は信じています。また先史時代の石塚（ケアン）の下や、土砦（ラース）や塚（マウンド）・丘（シー）の地下に美しい宮殿を建て、楽しい常若（チル・ナ・ノグ）の国を作り、体は縮んで小さくなっても、神々は永遠に生きているのだともいわれています。アイルランドで妖精は「シー」といいますが、このことばは塚や砦など丘の場所を指すものでしたが、そこに住む人たちの意味となり、シー（丘の人たち）といえば、超自然の力を持った精霊（シーブラ）たちを意味するようになりました。ダーナ神族たちが丘の人々、妖精となり、地下の国を支配していると信じられ、地方ではいまでも土や作物・豊作の神、そして川や湖の神となっています。

「異教の神トゥアハ・デ・ダナーンが、しだいに崇拝もされず、供物も捧げられなくなると、人々の頭のなかで小さくなっていって、今では身の丈わずか二、三〇センチほどになって妖精になった」と好古家たちのことばを引いて、アイルランドの文学者W・B・イエイツはいっています。「土地の霊」と祖先の魂「祖霊」と「自然の霊」への信仰が、しだいに混ざり合っていき、神々や妖精に象徴されて、いまでも人々の心に生きているようです。

土の下だけでなく海のかなたにも常若（チル・ナ・ノグ）の国を作って楽しく暮らしているともいわれていま

すが、この他郷は「楽しき郷（マグ・メル）」、「喜びヶ原（メグ・メル）」とか「至福の島（イ・ブラセル）」とか呼ばれ、西の方角にあるとされています。海の神のマナナーン・マクリールがこの海上はるかな楽土の王ですが、養子であるミディールもマン島の海に、美しい宮殿を持っています。丘の下の地下楽園の王はダグダで、ボイン河の丘（ブルー・ナ・ボーニャ）（ニュー・グレンジ）に宮殿があり、息子オィングスがその後、王となりました。また、それぞれの神が妖精の丘に宮殿を持っています。たとえばリールはアーマのニュータウン・ハミルトンにあるシー・フィネハ（白原の妖精の丘）に、ミディールはロングフォードのスリーヴ・ゴルイにあるブリ・レイのシーに、オグマのシーはアーセルトレイといわれ、ルーはロドルバンに、マナナーンの息子イルブレックはシー・アサロエにというように、各地の地下に、神々が宮殿を持って住んでいるわけです。各地に残る先史時代の遺跡、住居跡の円型土砦（ラース）や城壁（フォート）、埋葬の場所であった石塚（ケアン）、土塚（バロウ）、それに石舞台のようなドルメンの古墳の下に、神々の楽園、妖精の国が広がっていると思われているのです。

　海のかなたや地下にある楽園、常若の国（チル・ナ・ノグ）には、いつも「りんご」の木がたわわに実をつけ、生きている「豚」と、食べるばかりに料理されていて、いくら食べてもなくならない「豚」があり、飲んでも尽きることのない「エール」、この三つがあることになっています。その常若の国（チル・ナ・ノグ）に行って帰った英雄オシーンや詩人トマス、その他の人たちが見たという楽園の話がたくさんありますが、共通している点は、地下の場合には、細い道をたどって行って、太

陽や月のないうす暗いところを通り、水や流れを渡ると、緑の草原が広がり、花が咲き果物が実り鳥が歌い、いつも夏で、死もなく老いもなく争いもなく、歌声のあふれる国になっていることとです。そして柘榴石（ざくろいし）や黒石や水晶などさまざまな宝石で豪華にかざられた宮殿のルビーの光があふれる広間で、楽しい宴が催されているのです。オルフェオ王が行った地下の国では「ガラスの塔、水晶の銃眼、尖塔は金と美しい宝石でかざられ、あたりに光を投げかけていました」と描写されています。

海のかなたの常若の国（チル・ナ・ノグ）はどうでしょうか。そこに行って帰ったフェバルの息子ブランの話があります。

ある日ブランが丘を歩いていますと、心地よい音楽の調べに誘われてまどろみ、覚めてみますと白いりんごの花が咲く銀の枝が手にありました。城に帰りますと目の前に美しい乙女がこつぜんと現れ、海のかなたの楽しい国へ行きましょうと誘いかけました。「冬もなく貧しさもなく悲しみもないところ、海の神マナナーンの金の馬が岸べをかけ、遊びやゲームが飽くことなく続けられているところ」でいっしょに暮らしましょうというのです。

二七人の仲間と船に乗り、海に出たブランは、途中で馬車に乗った海神マナナーンに会いました。マナナーンは杖をふり海を花咲く野に変え、魚を羊の群れに、鮭を牛に変えました。まもなく不思議な島に着きましたが、そこは色とりどりの豊かな島で、女性しか住んでいま

せんでした。尽きることのないおいしい食べ物に囲まれ、楽しい日を送っているうちに故郷が恋しくなったブランは、仲間とともにアイルランドに帰って行きました。船が港に入り、集まって来た人に、自分はブランという名まえだといいますと、数百年前にブランの航海という話があったことは聞いているという答えが返ってきました。ブランは女たちの注意を守って土地にはふれずに、集まった人たちに自分の体験した常若の国のことを話したのち、いずくへともなく去って行きましたが、仲間の者は船から下りて故郷の岸べに足を着けたとたんに、灰となってくずれ去ってしまいました。日本の「浦島太郎」の竜宮に似て、常若の国で数年と思った時は数百年たっており、玉手箱を開けるとすぐに白髪（しらが）の老人となってしまったように、常若の国から帰った人はこの世の土に足がふれたとたんに、ひとにぎりの灰塵（かいじん）になってくずれ去ってしまうことが多いようです。

　地下と海のかなたの別世界は、不老不死の楽土として、後世の話になりますと、描写の筆が細かく美しくなっていきますが、この霊境はまた、英雄たちが永生を得て憩っているところとも信じられています。ク・ホリンもオシーンやブランそしてアーサー王も、永遠に楽しい日々をこの国で送っており、国の大事の時にはそこから帰り、一年に一度、ハローウィンの日（十月三十日）には、従者を従えて馬で現れ、丘（シー）をひとめぐりするといわれています。

銀の腕のヌァダとブレス王

ダーナ神族がフィルボルグとモイツラの平原で戦い勝利をおさめたとき、戦いの指揮をとったのはヌァダ・アーガトラムでした。彼は二〇年のあいだダーナ神族の王でもありました。ヌァダという名まえには「幸運をもたらす者」とか「雲を作る者」という意味があるようです。ヌァダには、病を治す力もあり、水に縁のある神でもあります。ローマの支配下にあったブリテンのグロスタシャーに、ノドンの神に捧げられた寺院がありましたが、この神はヌァダと同じとされています。またセヴァン河のほとりのラドネイ《ラド》はヌァダの語源《ヌド》と同じ）に、ヌァダの神を祀った寺院の跡がありますが、病気の治る霊験あらたかな場所として、病人たちはヌァダの像のそばで一晩眠れば病気は治り、子どものほしい女の人は、そばの泉に針を投げ入れてお願いすれば、子どもが授かると信じられ、薬師如来に

似たご利益があったようです。

ヌァダはゼウス（ユピテル）にもたとえられ、戦いの神でもありました。戦いに強いということは、力と能力のある条件で、強力な神は戦いの神でもあります。フィルボルグ一族とのモイツラの戦いでは、陣頭の指揮をとり、めざましい活躍をみせました。モイツラの戦いは六月五日にはじまり四日間続いて、フィルボルグの王エオホズ・マクアークは破れ、ダーナ神族は勝利をおさめたのでした。

しかし不幸なことには、この合戦のときに、ヌァダは片腕を切り落とされたのです。医術と技術の神ディアン・ケヒトが、精巧な人工の銀の腕を作り、ヌァダにつけました。それからは「銀の腕のヌァダ」という名まえで呼ばれるようになりました。ダーナ神族を勝利に導いたヌァダがとうぜん王位についていいはずでしたが、ケルトの風習として、肉体的な欠陥のある者は、王位や高い地位にはつけない決まりになっていました。そこで王位は、七年のあいだブレスが継ぐことになったのです。しかし、ディアン・ケヒトの息子ミァハが、ヌァダの腕を、元通りに治すまでの間のことでした。不幸なことに、元の腕をヌァダにつけたミァハは、父に殺されてしまったのです。それにはこうした話があります。

ヌァダの城に、ディアン・ケヒトの息子と娘で、医者であるミァハとアミッドがやって来ました。門のところに座っていた門番の男は片目で、そばには猫が眠っていました。門番は

おまえたちは何者かとたずねました。
「わたしたちは医者です」
「それならわしに新しい目をつけられるだろうな」
「おやすいご用です。あなたのそばに眠っている猫の目をとって、ないほうの目に入れてはどうでしょうか」
「そうしてくれるとうれしいね」
そこでミァハとアミッドは、猫の目をとって上手に門番の眼窩へ入れる手術を終え、門番の男はりっぱに両方の目が開きました。しかし困ったことには、夜になって人の目は眠っていますのに、猫の目のほうは起きていて、ネズミをたえずねらっており、昼間は日だまりで眠ってしまうことでした。けれど門番はないよりましと喜び、すばらしい医者たちが城に来たことをヌァダに報告しました。
ふたりの医者はヌァダの腕のことを聞き、切り落とされた腕はどこかとたずねました。それはずいぶん前に土の中に埋めてありましたが、掘り出して持ってこさせました。ミァハは、その古い腕をヌァダの肩に当てると、
「筋は筋に、神経は神経につながれ！」
と呪文を唱えてからつけました。それからいく日かが過ぎますと、ヌァダの腕は元の通りに

つき、指先まで動くようになっていました。

ミァハの父ディアン・ケヒトは、ヌァダに自分がつけた銀の腕をとって、息子がもっとすばらしい技術をみせて、本物の腕を再生させたことに腹を立てました。息子のほうが自分よりも医術にすぐれ、自分をしのぐ者になるかもしれないと恐れたのです。ディアン・ケヒトは、息子を剣で切りました。剣は皮膚を切っても肉は切りませんでしたので、ミァハはすぐに治してしまいました。ディアン・ケヒトは、また剣でミァハを切りました。こんどは骨まで達しました。けれどミァハはまた治しました。三度目の剣は、頭を割り脳に達しました。けれど三たび、ミァハは治してしまったのです。しかし四度目に、ディアン・ケヒトの剣は、脳みそを真っ二つに切ってしまいました。もうミァハにはどうすることも出来ず、死んでしまいました。

埋められた墓からは、三六五本の草が生え、一つ一つが人間の体の神経に効く薬になっていました。妹のアミッドは、その薬草をつみ、一つ一つ注意ぶかくマントに並べ、病気に効く薬をいろいろと調合しようとしました。けれど嫉妬の怒りのしずまっていない父親は、そのマントをひっくり返して、薬草の順序をめちゃめちゃにしてしまいました。もしそのとき薬草の順序がばらばらになっていなければ、人間は不老不死の薬を、このとき手に入れられたかもしれなかったのです。

ヌァダの腕が治ったので、人々は暴君ブレス王を、王座より下ろそうとしました。ブレスはダーナ神族とフォモール族との両方から血を引いており、ダグダの娘ブリギッドを妻にしていました。しかしブレス王は欲が深く、人々に重い税を課してようしゃなくとり立てるのですが、自分からは人々に与えようとはしないのでした。国じゅうの赤牛から出るミルクは、ぜんぶ王家のものと決めたかと思えば、野原を焼き、そこを通ったマンスターの牛のミルクはとりあげる、といった無法勝手な政治のやり方でした。

貴族や詩人を歓待することは、王としての礼儀でしたが、ブレスはそれすらやろうとしないけちぶりでした。ブレス王のテーブルについた従者たちのナイフは油でよごれず、口はエールの匂いもしないのでした。広間には詩人の歌う声、ハープの調べもなければ、楽しい歌声も聞こえません。ブレスは、野蛮なフォモール族の血を引いていたので、詩や音楽に趣味がないのは当然でしたが、詩人や歌人に何も支払いたくないからでした。

ある夕べのこと、コープルという吟唱詩人が王宮にやって来ました。詩歌の神オグマとエダンという女詩人の息子でした。王はコープルを、火もなくベッドもない小さな暗い部屋に通しました。少したって、そまつで小さいテーブルの小さい皿に、乾いたパン菓子が三こ出て来ました。その返礼として、詩人のコープルは、次のような詩を作ったのでした。

皿には食べ物がすぐには盛(も)られず
小牛が飲み育つミルクすらない
夜の真っ暗やみは人間のすみ家(か)でない
詩を語る者への報酬(ほうしゅう)も支払(しはら)われない
ブレス王を同じ目に会わせるがよい。

この「ないないづくし」のけちな王の接待を歌った詩は、アイルランドのはじめての諷刺詩でした。吟唱詩人の歌う詩は、魔法の力を持って、人々の心のなかに滲透していく力がありました。この諷刺詩が人々のあいだに歌われていき、それがもとで、とうとうブレス王は、王座を下りねばならぬ羽目になったのです。

このブレス王の統治の七年のあいだに、ヌァダはディアン・ケヒトの息子ミァハによって元通りに腕がもどったので、再び王座にもどることになりました。ブレスはターラの王座を戦うこともせず明け渡したのですが、内心は不満でした。母であるダーナ神族のエリのところに行って相談しますと、父であるフォモール族のエラサのところへ助けを求めに行こうということになりました。

フォモール族のエラサは、北の海を越えてエリのもとへ通い、結婚したのち、再び北の国

へ去って行ったのですが、そのとき指輪をエリに置いていきました、指輪がきちんとはまる者に渡すようにといい残して。ブレス王の指にその指輪がきちんとはまっているのを見たエラサは、ブレスがわが子であることを認めました。しかしエラサは、ブレスをひややかに迎えたのです。いくらわが子であっても、王座を下りたのは彼自身の不徳のいたすところと思ったようでした。しかしダーナ神族と戦い、王座を奪い返すことには賛同したのです。

そこでエラサは、ふたりのフォモール族の長のところへ、助けを願って行くようにいいました。ひとりは「魔眼バロール」でした。バロールの片方の目はいつも閉じていましたが、もう片方はひとにらみで相手を殺す恐ろしい眼力を持った巨人でした。もうひとりは夜と冥府の神ドンヌムナの息子インデッハで、この強力なフォモール族の長たちに助けを求めに行ったのです。

ブレス王は、このふたりの長の協力のもとに、大軍勢を率いて、ダーナ神族に戦いをいどんで来ました。ヌァダは再び武器をとって戦ったのでしたが、狂暴なフォモール族の蛮力を押し返すことができず、とうとう破れてしまい、国じゅうはフォモール族の圧政のもとに、苦しめられることになってしまいました。

トゥレン三兄弟の試練の旅

ダーナ神族たちが、ブレス王の率いるフォモール族の軍勢に破れて、その支配のもとに苦しんでいたときのことです。フォモールたちは北のロッホランからやって来ては、ダーナ神族に重い税を課しとり立てて行くのでした。一年に一度、ひとりずつ黄金を一オンス支払えというのは重い税で、それを払わなければ情ようしゃなく、その者の鼻をそぎ落とすのでした。とり立て役人の上には、恐ろしい魔眼バロールがにらみをきかしていましたので、国じゅうはしかたなく、この重い税を払うために苦しんでいたのでした。

ちょうどその年の支払い月のことでした。ヌァダ王と貴族たちは、ターラの近くにあるユーサの丘に集まっていました。すると西の方から白い馬に乗った戦士の一団がやって来るのが見えました。先頭の若い騎士は、ことのほかりっぱでりりしく、姿は太陽のように明るく

見えました。この若い金髪の騎士は、光と太陽の神ルーだったのです。大平原の王ドゥアハに育てられて成長し、鍛冶の神ゴヴニュにあらゆる技術を授けられ、いま海の神マナナーン・マクリールや、妖精の一団とともに、国に帰って来たのでした。

知恵にすぐれていたのはもちろんですが、戦いにも強く、魔法の剣や槍を、目にもとまらぬ速さで使うので、「長腕のルー」といわれていました。ルーは魔法の宝物を持って帰りました。乗っている白馬はマナナーンの馬で、春風のように速くかけ、乗り手の思いのままに陸でも海でも走りました。着ている鎧は、どんな剣も通さぬ力を持っていましたし、腰に帯びているのは、どんな固い鉄でも貫いてしまう魔剣、応酬丸（アンサラー）でした。そして乗り手の意志のままに陸も海も走る船、静波（ウエーヴ・スウィーパー）号も持って来ました。ルーの兜のまん中には、二つの宝石が光り、ぬいだときのルーの顔は、夏の日のようにひかり輝きました。

ヌァダ王たちは、この白馬の一行を喜び迎え、挨拶を交していましたが、そのときとつぜんみんなの目は、丘の反対側からやって来る不気味な一行に向けられました。恐ろしい顔つきをした連中はやって来ると、王に向かって乱暴なことばをあびせましたが、王や貴族は立ちあがると、ていねいに礼をするのです。王がそうした無礼な人々を、かえって自分たち以上にもてなすのを見て不審に思ったルーがたずねますと、税をとり立てにやって来た蛮族たちだったのです。ルーは剣をぬくとたちどころに、その場で何人ものフォモール人を殺して

しまい、残された九人はほうほうのていで、海のかなたに逃げ帰り、ダーナの若造にやられ、王たちがこれから税は払わないと強がっていることを報告しました。

バロールは怒り、すぐさま戦いの準備にとりかかり、大将たちに向かい命令しました。

「こしゃくな若造の首をはねよ。ダーナ一族をみな殺しにして船にしばりつけ、氷と暗闇が閉じこめている北の海へ、首といっしょに投げこんでしまえ」

だけどその強い若者はいったいだれだろうと、不思議に思いました。

「わかりましたわ、それはあなたとわたしの娘エスリンの息子です。若者になってエリンに帰って来たとき、ダーナ族の不幸は終わり、フォモールは終わるのです」

バロールの妻ケフレンダはいいました。

バロールはかつてドゥルイド僧から聞いた予言、自分の孫の手で殺されるということを思い出して身ぶるいしましたが、その恐怖と怒りを戦いの出陣に向けるのでした。

フォモールの軍勢が島の西に上陸したという知らせが、ヌァダ王のところに届きましたので、ルーも戦いの準備を急がねばなりません。そこでルーは、父のキァンとふたりの叔父に助けを求めましたところ、承知した父キァンは北へ、弟たちふたりは南へ、妖精の軍勢をととのえるために出発したのでした。

キァンがちょうどダンドルク近くの平原にさしかかったとき、向こうから三人の戦士たち

がやって来るのが見えました。トゥレン家の三兄弟、ブリアンとヨハルとヨハルヴァでした。キァン一族とこのトゥレン一族との間には長いこと争いが続いており、出会って戦いになることを避けたいとキァンは思い、ドゥルイドの杖で姿を豚に変えると、道ばたで草を食べていた豚の群れの中に隠れました。けれどブリアンはこのことに気づき、ふたりの弟をドゥルイドの杖で二匹の猟犬に変えると、キァンの豚を探して追わせたのです。ブリアンの投げた槍は、茂みに逃げこもうとする豚に命中しました。豚は死ぬ前に、人間の姿にかえることを許してほしいとたのみました。

「たしかに豚を殺すより、人間を殺すほうが殺しがいがあるな」

ブリアンはこういって、キァンが人間にもどることを許しました。人間の姿になったキァンは、兄弟たちにこういいました。

「もしおまえたちが豚を殺したのなら、豚の罰だけ払えばよかった。だがおまえたちはいま人間を殺したのだから、人間に払うべき償いをせねばならない。それはこの世に生を受けた者に課される、もっとも重い償いになるだろう。どんな武器でわしを殺そうと、おまえたちの罪はわしの息子ルーが知ることになるはずだ」

「何をいうか、それなら武器など使わず、道ばたの石で殺してやる」

こうブリアンはいって、道ばたにあった大きな石をとると、兄弟もいっしょになってキァ

ンをうち殺してしまいました。そして土を掘って死体を埋め、ターラに向かって立ち去ったのでした。

蛮族を打ち負かして引きあげたルーは、父キァンのゆくえがわからずおかしいと思い、父が進んで来たであろう跡をたどってみることにしました。ちょうど平原にさしかかったとき、とつぜん道ばたの石が叫び声をあげて、ルーを呼び止めたのです。そしてキァンがどのように残酷なやり方でトゥレン兄弟に殺されたかを語りました。掘り出してみた死体は、その無残な最期をよく物語っていました。

ターラに帰ると、ルーはヌァダ王や貴族たちの前で、父キァンが無残にもトゥレン兄弟に殺されたので、仇を討つため償い（エリック）を要求したいと述べました。この当時には、殺された者の親族や友人が、殺した相手にたいして、仇を討つために重い罰をやらせることを償（エリック）いといいました。このとき、父の仇としてルーが課した償（エリック）いは、次のものを探して持ち帰ることでした。

三つのりんご――西の国へスペリデスの庭になっている赤ん坊の頭ほど大きいりんごで、
　黄金に光り蜜の味がし、食べた者は病気が治るというりんご。

豚の皮――ギリシア王の宝物で、傷の上にのせただけで、どんな重い傷でもすぐに治る魔
　力のある豚の皮。

一本の槍――血と戦いをいつも求めていて、その熱は町さえ溶かすほどなので、いつも氷につけてあるペルシア大王ピサールの毒槍。
二頭だての馬車――陸でも海でも自在に走る美しい馬車で、シシリー島のドバール王のもの。
七匹の豚――黄金の国の王アサールの持ち物で、夜殺されても翌朝生きかえり、食べても減らない豚。
小犬――イルアド王の飼っている輝く小犬で、どんな猛獣でも従わせる力を持つ。
焼き串――水の底にある妖精の国フィンコリーの女たちが使っているもの。
丘の上で三度雄叫(おたけ)びをあげること――ミドカン魔王と三人の息子が見張っている丘に登って、その厳しい警戒をくぐって叫び声をあげること。
こうした品物を探し出して持ち帰ることは、不可能に近いと、兄弟たちには思われました。しかし自分たちが犯した罪の償いはしなければいけないと決心し、父と妹イーネに別れを告げると、三人は困難な探索の旅へと出かけたのでした。
ルーから魔法の船「静波丸(ウエーヴ・スウィーパー)」を借りられたのは幸いでした。この船のおかげで三人は、黄金のりんごの実るヘスペリデスへと、荒れ狂う波も乗り越えて、ひとすじに進んで行けたのです。三人は三羽の鷹に姿を変えると、庭の上を飛び、りんごをもぎ取りました。豚

の皮を取ってくるときには、詩人に化けてギリシア王の宮殿に入り、盗み出してしまいました。毒槍も同じように詩人といつわってピサール王に近づき、すきを見て盗み出しては、「静波号」に乗せて引きあげるのでした。

四つ目の馬車のときには、兵士になってドバール王に近づいて雇われ、手入れをするふりをして警護の兵士を出しぬき、とつぜん飛び乗ってあっというまに盗み出してしまいました。次の七匹の豚は、三兄弟たちのこうした武勇の話に感服したアサール王から贈られましたが、小犬のほうはイルアド王と一騎打ちの末、捕虜となった王に生命(いのち)とひきかえに差し出させました。このように次々と難かしいと思われた仕事を、三兄弟は力を合わせてやりとげていったのです。残るは妖精の国の焼き串と、ミドカン丘の上で叫ぶことの二つになりました。

そのとき、一部始終を魔法の力で知っていたルーは、兄弟たちに呪文をかけたのです。三人は忘我の状態になると、まだ残っている二つのことをすっかり忘れてしまい、これまでに手に入れた宝物を船に積むと、エリンに帰って来てしまったのです。ターラではハイ・キングをはじめ貴族や戦士たちが、三兄弟の帰りを喜び迎え、その仕事をほめ讃えました。宝物を王に捧げ、これでキァン殺しの罪の償い(エリック)は終わったと思ったとき、ルーは兄弟にかけていた呪文を解き、こうたずねたのです。

「なるほど、りっぱに宝物を持ち帰られたな。だが、父上キァンへの償い(エリック)はぜんぶすんで

はいない。フィンコリーの妖精の焼き串はどこにあるのだ？　ミドカン丘での三度の雄叫びはどうしたのだ？」

正気にもどっていた三人は、このことばを聞くと、課された仕事がまだ終わっていないのを思い出し、落胆と嘆きのあまり、地面に倒れてしまいました。

ほどなくして三人を乗せた船は、また海へと出て行ったのです。償いをぜんぶやりとげるという誓いは、守らねばなりません。あてもなく妖精の島フィンコリーを探し、三か月のあいだ船は荒海を漂いつづけました。ようやくの思いでわかったことは、フィンコリーの島は海の下にあるということでした。ブリアンは魔法の水着を身につけると、二週間のあいだ海底を探して、やっと島にたどりつきました。

海草がゆれて鈴のように鳴りひびく庭のなかで、赤い髪の娘たちが、海底の光のなかで宝石のまわりに金で刺繍をしているのが見えました。五〇の三倍ほどの娘たちが、針をせっせと動かしながら、美しい歌をうたっていました。

ブリアンが焼き串に向かってまっすぐ歩いて行くのを、娘たちはだまって見ていました。ブリアンの手が焼き串にさわったとき、さざ波のような笑い声がひびいたと思うと、こういう声が聞こえました。

「持っていってもいいのです、ブリアン。それはあなたの勇気へのごほうびですから」

妖精たちの好意に感謝しながら、ブリアンは焼き串を手にすると、弟たちの待つ船にもどり、すぐに最後の目的地であるミドカン丘に向かったのです。

丘を守るミドカンと三人の息子たちは、兄弟が来たのを見ると、恐ろしい勢いで戦いをいどんで来ました。地上のどんな戦いよりもすさまじいものとなり、足元の草は真っ赤に染まり、体にあいた傷口は、山鳩が飛びぬけられるほど広がり、たがいに、空腹なライオンのようにはげしくせまり、森の猪のように突進し、怒った熊のように猛烈にいどみかかり戦いました。ミドカンの息子たちは、ひとりまたひとりと倒れてゆき、トゥレン兄弟も草を血に染め、いまにも息絶えんばかりになりました。

やっと体を支え起こしたブリアンは、ふたりの弟たちをかかえて、一歩一歩、丘の頂に向かって登って行きました。そして三人は最後の息をふりしぼって、三度叫び声をあげたのです。三兄弟は課された重い償い（エリック）を、これでぜんぶやりとげたのでした。生死のあいだをさ迷いながら、三人は船でエリンの国へもどったのでした。

岸べに迎え出た父に、ブリアンはたのみました。

「どうか、この焼き串をルーにとどけてください。われわれ三兄弟は、キァンへの償いをぜんぶやりとげたことも報告してください。そしてわれわれの傷を治すのに、あの魔法の豚の皮を貸してくださるようたのんでください」

兄弟が受けた深い傷を治して生命(いのち)を救いたい一心で、豚の皮を貸してほしいという年老いた父トゥレンの願いを、ルーはことわりました。父を殺されたルーの復讐の念は、それほど強いものでした。そして、これほど多くの武勇を残し、後の世まで詩人たちに語りつがれるほどの栄誉と名声も得られたのだから、もう生きる必要はない、というのがルーの返事だったのです。

ブリアンは父からこのことを聞くと、ふたりの弟の間に身を横たえて死を待ちました。父もまた、三人兄弟の死体の上に身を投げて、息絶えたのでした。悲しみで心臓がはりさけてしまったのです。妹イーネは、四人を一つの墓に葬り、悲しく勇ましい三兄弟の探索の旅の話を、オガム文字で碑文に刻みました。

光の神ルーと魔眼バロール

フォモール族のむごい政治に苦しむダーナ神族たちを解放し、二度目のモイツラの戦いで勝利にみちびいたのはルーでした。ルーは魔眼バロールの娘、エスリンの息子でしたが、ダーナ神族側についていたのは、父親がディアン・ケヒトの息子キァンだったからです。ルーはダーナ神族の危機を救うため、養子として育っていたフィルボルグのエオホズ王のもとから、ヌァダ王のターラにもどって来ました。重税を課して苦しめている魔眼バロールと、ルーは自分の祖父であっても対決せねばならないと心に決めていたのでした。

ヌァダが王位に再びつくことになって、人々が祝宴を開いているときでした。ルーはターラの王宮の門に近づきますと、門番は王のようにりっぱな服装をしたこの他国の者を見て、まず名まえをたずねました。

「ルーといいます。ディアン・ケヒトの息子キャンの子です。バロールの孫です」
「おまえの職業は何だ？　一つのことにすぐれている者にでなければ、この門は開けない」
　こう門番にいわれ、ルーは答えました。
「わたしは大工です」
「大工ならいらない。すぐれた大工ルフティネがいるから」
「わたしはすぐれた技術を持つ鍛冶工です」
「鍛冶工なら、ゴヴニュがいる」
「わたしは戦士でもあります」
「戦士もいらない。オグマというすぐれた戦士がいるから」
「わたしは竪琴も弾けます」
「上手に竪琴を弾くものはたくさんいる」
「わたしは戦争のいろいろな技術を知っています」
「そういう戦士たちならもういる」
「わたしは詩人で、語り部です」
「上手な詩人や語り部ならもうけっこうだ」
　それからルーは呪術者であること、医者であること、銅の細工師であることなど、たくさ

んの仕事を並べましたが、門番はみんな王宮にいるといいました。そこでルーはこういいました。

「それでは王のところへ行って、そうした仕事をみんなただひとりででき、熟達した者がいるが、入用かあるいはこのまま帰ったほうがいいか聞いてくれ」

門番は奥へ入ると、王に「何でもできる男（イルダーナフ）」がやって来たことを報告し、ルーはイルダーナフと呼ばれて王宮に入ることを許されたのでした。

ヌァダ王の前に来たルーは、一ばん賢い者だけが座ってよいとされる「賢者の椅子」に腰かけました。すると戦いの神オグマが、力くらべをいどんで、大きな砂岩を広間から戸の外に出して見せました。四頭の牛が引かなければ動かないほどの大きな岩でした。ルーは椅子から立ちあがると、戸の外からまた広間の元のところに持って来ました。みなはルーに竪琴を弾いてくれとたのみました。ルーが眠りの調べを奏でますと、宮廷の人々はぜんぶ眠ってしまい、さめたときは、翌日の同じ時刻でした。悲しい調べを奏でますと、みなは泣き、喜びの調べを奏でますと、みなの心はうき立つのでした。

ヌァダ王はルーの能力を認め、フォモール族と戦うのに力を貸してほしいとたのみました。ルーは一三日の間だけ、自分に王座をゆずるようヌァダにいい、フォモール族との戦いの準備のために、ダーナの神々を集めました。ルーは医者のディアン・ケヒトにたずねました。

「フォモール族との戦いで、あなたはどのように協力できるだろうか？」

「わたしは戦場で傷ついたり、首を切られたりした者を、すぐに治し生きかえらせましょう」

鍛冶の神ゴヴニュにたずねますと、戦いでこわれた武器はすぐに直し、自分が作った槍や剣や弓はあやまたず敵を殺すだろうという答えでしたし、大工の神ルフティネは、戦士たちぜんぶの楯や槍の柄を作りましょうということでした。戦いの神オグマは、必ずフォモールの王の首を切り落とすという答えでしたし、全能の神ダグダは棍棒でフォモール軍勢を霰（あられ）のように打ちのめしてやるといいました。戦いの女神モリグーは、逃げる敵をどこまでも追いつめて討ち果たすということでした。詩人コープルは諷刺詩を作って敵に不名誉を与え、呪術の力で戦士に立ち向かえなくするということでしたし、聖杯を持つ魔術師たちは、フォモールの目から、国じゅうの湖や河を隠してしまうといいました。そして最後にドゥルイド僧のフィゴルは、フォモール族に三本の火の流れを送り、気力や精気をぬいてしまい、ダーナ神族には倍の精気と力を与えて、七年戦っても疲れぬようにしようといいました。そこでルーは、フォモールとの戦いの準備をしたのです。ルーはフォモールの王である魔眼バロールをひとりでやっつけるのですが、これにはルーの生誕の話がついています。

娘が産んだ子に殺されるだろうということは、ドゥルイド僧の予言でバロールにはわかっ

ていました。しかしその予言を避けたいと思ったバロールは、妻ケフレンダとの間にあった幼い娘エスリンを、トオリイ島に建てた塔の中に閉じこめてしまったのです。一二人の侍女にかしずかれるというより見張られて、バロールのほかは男性の顔さえ見たこともなく、エスリンは美しく成長していきました。

ある日のこと、ディアン・ケヒトの息子のキァンは、バロールがその塔へ行くのを見かけました。キァンはバロールが帰るのを見とどけると、塔の中へ入り、火をともしました。すると美しい乙女がいるのを見て驚きました。エスリンはキァンを喜び迎え、ふたりはバロールに隠れて、楽しい日々を過ごしました。やがて子どもが生まれ、エスリンはキァンに赤ん坊を連れて逃げてくれるようにたのみ、子どもといっしょに灰色の牛も渡しました。やがてバロールにこのことが知れてしまいましたので、キァンは灰色の牛の手綱を引くと海べへ行き、マナナーンを待ちました。海の神マナナーンは、キァンが危険な目に会ったときには、いつでも助けに現れようと約束してくれていたのです。

マナナーンの小舟（コラクル）にキァンが赤ん坊と灰色の牛といっしょに乗ったとき、ちょうど怒って追いかけて来たバロールの手から逃れることができました。バロールは呪文で嵐を起こし、船を沈めようとしました。けれど海の神マナナーンがドゥルイドの呪術で、嵐をしずめてしまいました。バロールが海を火に変えましたが、マナナーンがそれを石に変えてしまいまし

た。こうして無事に逃れたキャンに、マナナーンは何を報酬にくれるのかとたずねましたが、キャンはこの息子しかない、二つに分けることはできないから、どうぞ連れていってくれ、といいました。

「それは願ってもないことだ。この子はいまに比べるものがないほどりっぱな戦士に成長するだろう」

そういってマナナーンはその子を連れて王宮へ帰り、ドル・ドナという名をつけました。「全知全能」という意味です。この少年が成長した、あるドニブルック市の日のことでした。この日はみながお祭りのように無礼講にさわいでよい日でしたので、彼も弓矢を持って浜べで遊んでいました。そのとき見知らぬ人をのせた小舟がやって来ましたので、その方をねらって矢を放ちますと、運悪く、舟の男の人に当たってしまいました。それは魔眼バロールでした。ドゥルイド僧の予言どおり、バロールは孫に殺されたのです。この少年はのちにルーになるわけです。

ルーが魔眼バロールを倒す話は、いろいろな形で、いろいろな地方に伝わっていますが、トオリイ島の話は、筋がやや複雑になっています。読み比べますと、神話が語られていくうちに変わってゆく過程がうかがえおもしろいので、筋を紹介いたしましょう。

ドネガル地方に三人の兄弟ガヴィダ（鍛治の神ゴヴニュのこと）とマッキニーリ（キァンのこと）とマックサウエンが住んでいましたが、三人は腕のよい鍛治屋であり農夫でした。そのころ、トオリイ島に砦をもって、本土をおびやかしていたバロールという海賊がいました。マッキニーリの持っているミルクのたくさんでる灰色の牛を、あるときバロールは盗んで、トオリイ島へ運んでいってしまいました。

マッキニーリは復讐を思い立ち、バロールはまだ生まれていない孫の手で殺されるということを知っていましたので、妖精の助けを借りて女に変装し、バロールの娘エスリンが閉じこめられている家にしのびこみました。その結果、生まれると予言されていた孫は、ひとりではなく三人だったのです。バロールは三人の赤ん坊を溺れさせようとしましたが、ひとりだけは親切な妖精の手で助けられ、父マッキニーリに送られその手で育てられました。

ほどなくしてバロールは、マッキニーリを捕えると、大きな白い石の上で頭を切ってしまいました。いまでも「キニーリの石」として残っているそうです。バロールはこれで事がすんだと思い、孫がひとり生き残っていたとは、気がつきませんでした。その男の子はガヴィダが育て、りっぱな鍛治工になっていました。バロールは変装しては、鍛治場に現れて武器を盗んで行くのでした。

ある日のこと、ガヴィダが出かけて留守の鍛治場に男の子ルーだけがいました。バロール

はやってくると、いかに自分は強いか、どうやってマッキニーリをやっつけたかを、少年をただの見習工と思って得意になって話しはじめました。話が終わらぬうちに、ルーは火の中から真っ赤に焼けた鉄の棒をとり出すが早いか、バロールの目に刺しこみ、頭まで貫いてしまったということです。
　ダーナ神族は全力をあげてルーのもとに戦い、フォモール族は破れ、ルーはヌァダに代わって王座についたのでした。

かゆ好きの神ダグダ

ダーナ神族のうち能力も活力もあって、さまざまに活躍するのがダグダです。ダーナ神族がフォモール族と戦ったとき、和平を結ぶのに使者に立って、最善をつくして帰ってきたとき、神々が口をそろえて「あなたは良い神だ」とほめたので、ダグダ（良い神）という名まえがついたといわれています。エラドウ（知識）の息子で、知恵や力・技術・魔術にもすぐれていたので、「大知を持つ全能者」とも呼ばれています。

武芸にも秀で戦いに強く、モイツラの戦いのとき城壁を築いたのもダグダで、建築の才能もあったようです。武器として特別な棍棒（こんぼう）（バット）を持っていましたが、八人がかりでやっと運べるほどの大きいものでした。片方の端でひとふりしますと、九人を倒し、その者の骨は「馬のひづめの下に飛び散る霰（あられ）」のように飛び、反対の端をふれば、死んだ者を生きか

えらせることができるのでした。死と生命とを与えることが、両方ともできたわけです。あるとき、この棍棒を引きずって行進してしまったために、その跡に城の濠のような大きい溝が、二つの地方にまたがって出来てしまいました。この棍棒は、北欧神話のトールが持っているを万能のハンマーを思わせます。

ダグダは最高の能力を持った神ですが、体が巨大で不可思議な行動が多いので、巨人の話がややグロテスクでこっけいなのに似た感じがあるようです。体や服装も変わっていて、ケルトの神々はたいがい長いマントを、品位と尊厳の象徴のように着ていますが、ダグダは木こりたちが着るような膝までの服（チュニック）を着て、漁師のはくような馬皮の長靴をはき、大きな太鼓腹をつき出しています。ダグダは地下の神として常若（とこわか）の国に豚を持っていますが、これが不思議な豚で、料理されて食べられても、すぐ翌日には元通りになりますので、ダグダはいつもこの豚をおなかいっぱい食べていたのです。

ダグダは《棍棒》のほかに、《大釜》と《竪琴》という特別な道具を持っていました。ダグダの大釜は、食べる人の徳に応じていくらでも、そこから食べ物が出て尽きることのない宝庫のような釜です。この釜は他郷（アザ・ワールド）へ通じていて、そこから限りなく豊かにさまざまな食料があふれ出てくるのです。いわばこの大釜は、ダグダが他郷の神で地下の王であり、豊饒の神でもあるという徴だとも見られましょう。

ダグダは天候や穀物の稔りを、自由に支配できる力も持っています。ダグダは竪琴を奏でて、四季や天候を変えたのです。楽しい調べにつれて春が訪れ、悲しく強い旋律とともに嵐が起きるのでした。また竪琴の三本の絃は、一本目は眠りの絃、二本目は笑いの絃、三本目は涙の絃で、聴く人をそうした感情や状態にひき入れることができました。

あるときのこと、フォモール族が、この竪琴を盗み、広間の壁にかけておきました。ダグダはルーとオグマといっしょに取り返そうとして、敵の陣営に忍びこみました。敵はほかの広間で宴会を開いていましたので、ダグダは門のところでそっと竪琴を呼びました。すると、主人の声を聞いた竪琴は、壁からはなれ、空中を飛んで、ダグダの手の中に帰って来ました。竪琴を手にしたダグダは、第三の涙の絃、第二の笑いの絃を弾き、最後に第一の眠りの絃を弾きますと、フォモールの戦士も女たちも子どももぜんぶ眠ってしまいましたので、そのすきに三人は無事に竪琴を持って帰って来られたということです。

ダグダはおかゆが大好きで、しばしばこれが欠点にもなっていました。フォモールとの戦いのとき、ルーはダグダを敵陣へ偵察に送ったのですが、いつまでたっても帰って来ません。じつはフォモールの連中が、ダグダのかゆ好きを知っていて、ひきとめる戦術としておかゆをごちそうしていたのでした。この日は十一月一日サウィンの祭りの日だったといわれていま す。八〇ガロンの牛乳とバターと穀物が大釜で煮られ、その中に山羊と羊と豚が投げこま

れました。おかゆがたきあがりますと、地面を掘ってその中に流しこまれ、それをダグダは大きな木のスプーンで食べたのですが、そのスプーンの中には、男と女がひとりずつ入って寝られるほどの広さだったそうです。おかゆをぜんぶ食べつくしてしまったダグダは、指先で土の底をほじくりながら、汁までぜんぶ平らげてしまいました。いまでも十一月一日のサウィンの日には神々に食物を供える習慣があり、これはダグダへの崇拝を表す供物といわれています。

ダグダは活力と生産の神、豊饒の神でもあって、たくさんの女神と結婚し、たくさんの子どもがいます。妻は三人、ブレグ（いつわり）、メング（ずるさ）、メイベル（醜さ）で、三人の娘が生まれましたが、みんなブリギッド（ダヌと同じ）という名まえでした。三人の息子ブリアン、ヨハル、ヨハルヴァの三人だったとも、これはひとりの息子エクネだとも、いわれていますし、愛の神オィングスも、知恵の神オグマ、地下の神ミディール、戦いの神ボォヴもみんなダグダの子どもたちです。

ある年のサウィンの日に、コノートのウニウス河のほとりをダグダが歩いていますと、女の人が両岸に足をかけて、体を洗っていました。戦いの女神モリグーでした。ダグダはモリグーと結婚して、戦いの手助けを約束させました。いまでもウニウス河のほとりには、「ふたりの寝床」という岩があります。またボイン河の女神でダグダの母ともいわれるボアーン

とも結婚しましたが、日が暮れて河の神である夫のネフタンが帰って来ると秘密がばれますので、夜にならないようにと、九か月のあいだずっと太陽を空に出したままにしておきました。九か月の終わりに、ふたりの間にはオィングス・マクィノグ（若さの息子オィングス）が生まれたのでした。

ダグダはボイン河のほとりのニュー・グレンジの丘の下に、美しい王宮（ブルーナ・ボーニャ）を持っていましたが、ミディールに育てられて成長したオィングスが来て、昼と夜と滞在させてほしいとたのみました。ダグダは許しました。二日たってもオィングスが楽園を去ろうとしませんので、ダグダが帰るようにいいますと、「昼と夜」というのは「永遠」ということで、あなたはそれを許可したはずだといいました。それからずっとオィングスはこの王宮に住んで、妖精の国の王になりました。

愛の神オィングスの夢

オィングスはゲールのエロスともいわれるように、愛と若さと美の神として、ボイン河のほとりの妖精の丘の王宮に暮らしていました。父ダグダのように竪琴を持っていますが、オィングスの竪琴は黄金で、やさしく美しい調べを奏でますので、聴く者は心を奪われてしまうのでした。オィングスの口づけは小鳥となって、若者の頭の上を飛び、そのさえずりは愛の思いとなって若者たちの心に飛びこむのでした。

ある夜のこと、オィングスの寝ているベッドに、乙女がひとり近づいて来ました。いままで見たこともないほど美しい乙女でしたので、オィングスは手をとり、ベッドの方へ連れてこようとしますと、とつぜん、かき消すように乙女はいなくなってしまいました。オィングスは朝までその乙女のことを思いつづけて眠れず、食事ものどを通らず、病人のように苦し

み、思い悩むのでした。

次の夜、また乙女は現れましたが、こんどは手に笛を持っており、美しい調べを奏でてくれました。このように一年のあいだ、毎夜、乙女はオィングスのところに現れては、笛を吹いては消えてゆくのでした。オィングスは乙女を思う心から病気になって、しだいにやつれていきましたが、だれにも原因を話しませんでした。医者たちが診ても、その病気の原因がわかりませんでしたが、フィンゲンという医者がオィングスの顔を見るとすぐさま、病は恋であることを見通しました。

オィングスはフィンゲンに、毎夜現れる乙女を思っていることを打ち明けますと、フィンゲンはオィングスに母神ボアーンの知恵を借りるようにといいました。心配したボアーンは、悩む息子の思いをとげさせてやろうと、一年のあいだその乙女を探したのですが、むだでした。そこで父親ダグダに相談しましたが、ダグダにも探すことができませんでした。そこでマンスターのダーナ神族の王ボォヴのところにたのみに行きました。ボォヴは引き受け、アイルランドじゅうを探し、やっと一年ののちにガルティー山の竜の口（ベル・ドラゴン）の湖のそばで、その乙女を見つけたのでした。

オィングスは馬車にのると、ボォヴの王宮にやって来ました。三日のあいだいろいろと宴（うたげ）を催しもてなしたのち、ボォヴは、乙女のいる湖へとオィングスを案内してくれました。湖

には五〇の三倍の乙女たちが、ふたりずつ金の鎖につながれて歩いていましたが、そのまんなかにほかの者より背の高い乙女がいました。

「ああ、あのひとだ！」

オィングスは叫びました。

「あのひとの名まえを教えてください」

するとボォヴはこう教えてくれました。

「あの少女の名はカーといい、コノートのウェヴァンの妖精の丘に住んでいるエタル・アヌバァルの娘だ」

「大勢の乙女たちの中から、いまカーだけを連れて行くことはぼくにはできない」

オィングスは父の王宮に帰ると、ボォヴの案内で、乙女を湖で見つけたことを話しました。ダグダは、三頭だての馬車を仕立てると、乙女の住むコノートの女王と王であるメイヴとアリルのところにたのみに出かけました。

もてなしてくれてから、用件を聞きました。メイヴとアリルはダグダを歓迎して、一週間宴会でしており、ぜひ花嫁にほしいが力になってくれ、とたのみました。ダグダは、息子オィングスがエタルの娘に恋を

「われわれには、その娘をどうする力もないのです」

というのがコノートの王の答えでした。

そこでアリルは使いをエタルのところに送り、ダグダに娘をくれるようにと交渉してくれました。しかし、エタルはその申し出をことわりましたので、戦いとなりました。ダグダとアリルとは連合軍を組織して攻撃し、エタルを捕虜にして連れてきました。そしてアリルはエタルに、娘をダグダの息子の嫁にするようにと再びたのみました。

「それはできないのです」

またも拒絶の返事でしたので、不思議に思ってわけをたずねますと、娘のほうがずっと魔法の力が強いということでした。

「娘は一年ごとに鳥の姿となり、また人間の姿となって一年を過ごすのです。次のサウィン（十一月一日）には、白鳥の姿になって、竜の口の湖で、仲間の一五〇羽の白鳥たちと泳いでいるでしょう」

ダグダは、アリルとエタルのもとを去り、家へ帰ると息子のオィングスにこのことを知らせました。

サウィンの日になり、オィングスが湖に行きますと、一五〇羽の白鳥が金の鎖をつけ、頭上には金の輪をただよわせて泳いでいました。オィングスは白鳥に向かって呼びかけました。

「ここに来てぼくと話してください」

「わたしをお呼びになるのはどなた？」

カーの白鳥は答えました。

「オィングスです」

「湖にまた帰ってくることを許してくださるなら、そこにまいりますわ」

そういうとカーの白鳥は、オィングスの方に近づいて来ました。オィングスがカーを抱きますと、ふたりは二羽の白鳥となっていました。二羽の白鳥は三度、湖をめぐってから、美しい白い翼をひろげ、妖精の丘の王宮へと、連れだって飛んで行ったのでした。白い二羽の鳥は美しい歌を歌っていました。それを聞いた者は三日三晩のあいだ、眠り続けてしまったということです。カーはそれからのち、ずっとオィングスと楽しく暮らしたということです。

蝶になったエーディン

ミディールは海神マナナーンの養子でしたが、その代わりに愛の神オィングスの養父でした。貴族の子弟はある年齢が来ると、礼儀や教育を身につけさせるため、他の貴族の家に養子となって、男の子は一七歳、女の子は一四歳まで生活する風習が、ケルトにはあったのです。神々もそうでした。

ミディールは地下の神で、マン島に王宮を持っていましたが、そこでは魔法の三匹の牛と大釜が、いつも絶えることなく豊富な食べ物を満たしてくれました。王宮の入り口には三羽の鶴が番をしており、だれかが近づきますと、一番目の鶴は「来てはいけない！　来てはいけない！」と鳴き、二番目は「あっちへ行け！　あっちへ行け！」と鳴き、三番目は「通りすぎろ！　通りすぎろ！」と鳴くので、「来るなの三羽鶴」といわれています。

この楽しい地下王宮に、妻のファームナッハと暮らしていたミディールは、新しい花嫁エーディンを迎えたのです。あるときミディールは、養子であったオィングスを王宮に訪ねて、国じゅうで一ばん美しい娘を嫁にしたいといいました。養子であったオィングスは、コノートの王アイルの娘であるエーディンが一ばん美しいと教え、さっそくアイルのところにいってたのみました。アイルは高価な貢ぎ物を要求しました。だれも住んでいない一二の平野と、魚がいっぱいの一二の河と、娘の重さと同じだけの金銀というものでした。オィングスは、父ダグダの助けを借りてこれをそろえ、エーディンはミディールの妻となりました。

ミディールは一年滞在してから、エーディンといっしょに自分の宮殿に帰りました。ミディールの最初の妻ファームナッハは、夫が連れて来た美しい花嫁を見て、はげしい嫉妬を覚えました。「エーディンのように美しい」と人々が形容詞として使うほど、エーディンは若く美しくしとやかでしたから、とうぜんのことでした。ある日のこと、ファームナッハは、魔法の杖でエーディンを打ち、水たまりに変えてしまいました。水たまりは毛虫に変わり、やがて毛虫は紫の蝶となって、美しい羽を広げて飛び去りました。蝶のまわりにはいつも美しい香りが漂い、美しい調べが聞こえました。紫の蝶がいつも自分のまわりをひらひら舞いながらついて来ますので、ミディールはそれが姿を消してしまったエーディンだとわかりました。

ファームナッハは再び魔法の杖をふりあげると、蝶のエーディンを王宮から追い払いましたので、七年のあいだエーディンは、荒涼とした岩野やさびしい海の上をさ迷わなければなりませんでした。ところが幸運なことに、一陣の風が、蝶のエーディンをオィングスの王宮の窓に吹き入れたのです。オィングスにはそれがエーディンであることがすぐにわかりましたので、なんとかして魔法を解こうとしましたが、ファームナッハのかけた魔法はがんこに解けませんでした。

そこでオィングスは、エーディンの蝶のために、よく陽のあたる美しい四阿（あずまや）を作ってやり、囲りには甘い蜜のある花々をたくさん咲かせる草や木々をいっぱい植えました。夜がふけてある時刻になりますと、エーディンは元の姿にかえることができましたので、この花咲く四阿でふたりは恋の喜びにひたっていました。しかしまもなく、ファームナッハは、このエーディンの隠れ家も見つけ、魔法で嵐を起こすと、またエーディンを吹きとばしてしまったのです。

蝶のエーディンははげしい嵐によって、アルスターのエタアという王の広間に吹き入れられたのでした。そしてエタアの妻が飲もうとしていた杯（さかずき）の中に落ちたのです。エタアの妻は酒といっしょに、エーディンの蝶を飲んでしまいました。蝶はエタアの妻の子宮に落ち、再びこの世に生まれたときには、エタアの娘エーディンとして人間になっていました。しかし

アイルの娘エーディンとして、妖精の丘に生まれてから、エタアの娘エーディンに再び生まれるまで、すでに一〇一二年の歳月が過ぎていたのです。エーディンは祖先のダーナ神族のことも、昔の身分も何も知らずに、人間の娘として成長していったのでした。

　そのころアイルランドの王に、エオホズ・アイレヴがなりました。しかし王妃がいないので、人々は税を納めようとしません。そこで王は貴族たちに、アイルランドじゅうで一ばん美しい娘を探してくるようにいいつけました。使者のひとりが帰り、エタアの娘エーディンがもっとも美しい娘であることを報告しました。エオホズ王が会いに行きますと、エーディンは泉のほとりで、金箔のかざりのある銀のくしを手に、髪を洗おうとしていました。四羽の黄金の鳥がつき、紅玉（ルビー）がちりばめられている銀のたらいがそばにありました。エーディンは、深紅のマントを、金細工のしてある美しい銀のブローチで止めていました。下には金の縁（ふち）かざりのついたやわらかい緑色の絹のチュニックを着ていましたが、それにはフードがついていました。チュニックの緑の絹と肩のところについている金銀細工のかざりとが、太陽の光を反射してまぶしいほどに光っていました。

　洗おうとして解かれた髪は、金色でした。それをおさえようと、服のそでで口からさし出された両腕は雪のように白く、彼女の頬は野原のジギタリスのように赤く、眉はカブト虫のように黒く、歯は彼女の頭上に降る真珠の雨のように真っ白でした。彼女の目はヒヤシンスの

ように青く、唇は辰砂（しんしゃ）のように赤く、両肩はやわらかく真っ白でした。その指は白く長く、腕は長くなめらかで羊毛のようにやわらかく、首すじはくだける波のように白くすらりとしていました。腿（もも）はつややかに白くひかり、膝は丸く小さく整っていて真っ白でした。脛（すね）は細くすんなりと伸び、どんな定規をあてても狂いがないほどまっすぐでした。顔は月のように端整で気高く、声はやさしく上品で、歩く姿には女王のような威厳がありました。世界じゅうの女性のなかで、エーディンほど美しく完全な女性はいませんでしたので、人々はエーディンはきっと妖精にちがいないと思うのでした。エオホズ王はエーディンの美しさにうたれ、妻に迎えることに決め、ふたりはターラの王宮へと帰って行ったのでした。

　エオホズ王には、アリルという弟がありました。アリルはエーディンを一目見て恋におち、病人のようになり、床についてしまったのです。そのうちエオホズ王は、国を見回りに出かけることになりました。王は妻のエーディンに、自分の留守のあいだ、弟の看病をしてくれるようにたのみました。もし弟が死んだら、墓石を建て、いけにえを捧げてやってくれ、といい残して出かけました。弟のアリルが、自分の妻を思って病気になっているとは、思いもよらなかったのです。

　王が出かけてから、エーディンが見舞いに来たとき、アリルは抑えていた心の悩みを、打ち明けてしまいました。死ぬほどに苦しんでいた病気の原因が、自分への思いであることを

知ったエーディンは、その思いをアリルにとげさせてあげて、病気をなおしてあげたいと思うのでした。それで王宮の外の丘にある家で、ふたりは夜になったら会おうと約束をしたのでした。しかし不思議なことに、三日続けて、夜のその時刻になると、アリルは眠さに勝てず、深い眠りに落ちてしまい、エーディンとの約束を破ってしまうのでした。

しかしアリルの代わりに、別の人が丘の家にやって来たのでした。それはエーディンの最初の夫であるミディールだったのです。彼は美しい姿で現れると、楽しい妖精の国へ帰って再びいっしょに暮らそうとエーディンをくどいたのです。けれどエーディンには前世の記憶はなく、ミディールは見知らぬ人でしかありませんでした。ミディールは、昔ふたりが夫婦として暮らしていた常若(チル・ナ・ノグ)の国のことを語って聞かせ、いっしょに昔の王宮へ行くようエーディンに説きすすめました。エーディンは、エオホズ王が承知すればよい、といいましたので、ふたりは王宮にもどりました。王の弟アリルは、深い眠りにおちている間に、エーディンへの熱い恋の思いはすっかりさめて、病気は治っていました。

それから少したった夏の日に、エオホズ王がターラの王宮から平原を見下ろしていますと、見知らぬ気高い騎士が現れました。ミディールでした。銀の盤と金の駒を出し、チェスをしたいと申しこみました。勝負に負けた者は相手の要求をなんでもかなえなければならないことにしました。はじめのころ、ミディールはわざと負けて、エオホズ王が要求することを、

魔法の力ですぐにやりとげました。土地をきり開くこと、森林を伐採すること、河や沼地に橋をかけることなど――。エオホズ王は、自分は世界で一ばんチェスが強いと思いこみ、最後の大きな勝負をしよう、といいました。しかしエオホズ王は破れたのです。ミディールは要求しました。

「あなたの妻エーディンを抱いて口づけしたい」

エオホズ王は考え、一か月のちにその願いをかなえようといいました。そして約束の日がくると、ターラの王宮を軍勢で包囲し、ミディールを入れぬよう守りを固めました。そして王宮の広間で宴会を開いていました。王の杯にエーディンが酒をつごうとしたそのとき、こつぜんとミディールは、ふたりの間に現れたのです。高貴な服を着て、手に槍を持ち、無言でエーディンに近づいたと見るまに、ふたりは空中に浮かび、王宮から外へと飛んで行ってしまいました。人々の目に映ったのは、二羽の白鳥が輪を描きながら、スリーヴナモンの山を指して飛んでゆく姿だけでした。二羽の白鳥の首には、金の鎖がついていました。

しかしエオホズ王は、エーディンをあきらめられませんでした。ドゥルイド僧ダランにたのみますと、三本のイチイの木にオガム文字で呪文を書き、それと知恵の鍵を使って、エーディンのゆくえを探し当てました。ミディールのブリ・レイの王宮にいることがわかりました。九年のあいだ、王は島じゅうの妖精の丘を掘り起こし、壊していきました。そのあとか

らミディールが直していったのですが、まにあわず、最後の丘に追いつめられてしまいました。ミディールはエーディンをお返しすると王にいい、魔法で五〇人の侍女をエーディンそっくりに変え、ただしこの中からほんものを選べたなら、と条件をつけました。

五〇人のエーディンはエオホズの前に現れましたが、ミディールの計略は破れたのです。エーディン自身が、王に向かって、私がエーディンです、と教えてしまったからでした。エーディンは妖精の王より、人間の王を選んだのでした。エオホズ王とエーディンは幸福に暮らし、ふたりの間には娘エーディンが生まれました。

白鳥になったリールの子

モイツラの戦いで、ダーナの神族は侵入して来たミレー一族に破れて、エリンの島の神々の統治は終わりになりました。ミレー族の人たちは、国を地上と地下との二つに分けて、自分たちは地上をとり、地下をダーナ神族に与えました。ダーナの神々たちは戦いに破れて、地下と海のかなたに逃れたのですが、そこに宝石や金銀で美しい宮殿や町を建てました。果物はいつもたわわに実り、花々は咲き乱れる常若（とこわか）の国で、ダーナ神族たちは再び楽しい暮らしを始めました。

新しい国の王を選ぶことになって、神々は一堂に集まり、相談のすえ、「赤毛のボォヴ」が新王に決まりました。ボォヴはダグダの一番上の息子でした。ところが、海の神マナナーン・マクリールの父であるリールは、自分が選ばれなかったことに腹を立て、フィーニー丘（きゅう）

の宮殿に、閉じこもってしまったのです。他の神たちはこらしめのためにリールの家を焼き、リールの妻は悲しみのために死んでしまいました。

高い知恵と徳にすぐれた新王ボォヴは、和解しようと思い、自分の三人の娘のうち、だれかひとりをリールの嫁にやろうと、使者を送りました。リールは承知して、シャノンにあるボォヴの宮殿に来て、王の三人の娘、イーヴとエヴァとアルヴァに会いました。いずれも美しく賢かったのですが、リールは一番上のイーヴを選んで結婚し、二週間の祝宴(しゅくえん)のあと、フィーニーの宮殿にいっしょに帰りました。

ほどなくして双児(ふたご)の姉弟が生まれ、フィノーラとイードと名づけられ、リールは美しい新妻とかわいいふたりの子を授かって、幸福な毎日でした。一年ののちに再び双児の男の子、フィアクラとコーンが生まれましたが、不幸なことに、このお産は重く、イーヴは息を引きとってしまったのです。リール王は幸福の高みから、嘆きのどん底につき落とされてしまいました。

娘の死の悲しみの知らせが、ボォヴ王にとどきました。しかし喪が明けますと、王はリールに二番目の娘エヴァを妻にしてはどうかとたずねました。母のない子どもたちのことを思い、母の妹に当たるエヴァを、リール王は二番目の妻に迎(むか)えることにしました。妻になったエヴァは、はじめのころは四人の子どもをかわいがりました。フィノーラとイード、フィア

クラ、コーンの四人の姉弟は、父と祖父のボォヴ王の愛情、周囲の者たちの愛のなかで、かわいらしく賢く成長していきました。

リールの宮殿に幸福と喜びがあふれているように思われていたとき、とつぜん、エヴァの心に、子どもたちに対する嫉妬がわき起こったのです。夫の愛、父王の愛、ダーナの神々の愛がみんな四人の子どもにだけ向けられているように思い、子どもたちを憎みはじめたのです。そしてしまいには、子どもたちの姿を見るのもがまんできなくなり、目の前から子どもたちを、消し去ってしまおうと思うようになりました。

ある日のこと、エヴァは馬車に四人の子どもを乗せ、おじいさまのところへいっしょに行きましょうといい、シャノンの方へ馬を向けました。しばらく走ってさびしい森まで来たとき、エヴァは御者に向かって、子どもたちを殺すように命じました。

「おお！　なんと恐ろしいこと。お妃さまが求めていなさる悪事は、永遠の罪となりましょうに」

御者がしりごみをしましたので、またしばらく進み、ちょうどデラヴァラの湖のほとりまで来ました。エヴァはもう一度、馬車を止めさせると、

「馬を休ませている間、おまえたちは水浴びをするように」

といって、四人の子どもたちを湖に連れてゆきました。

子どもたちがおそるおそる服をぬいで、湖の浅瀬に体をひたしたとき、すかさずエヴァはドゥルイドの杖をふりあげると、ひとりひとりを打って、四羽の美しい白鳥に変えてしまいました。

「このデラヴァラ湖のさびしい水面（みのも）を、
おまえたちの住み処（すみか）として、永遠に過ごすがよい。
リールの力もドゥルイドの術も、
その永遠のさびしい波間の放浪から、
おまえたちを救うことはできないのだ」

このように自分たちの運命を告げられた四羽の白鳥は、悲しげに継母（はは）を見あげましたが、姉の白鳥フィノーラはこうたずねました。

「なぜ継母（かあ）さまは、こんなことをなさるのです？　わたしたちが何をしたのでしょう？　あなたの罰は、わたしたちの悲しみより、ずっと重いものになるでしょうに。わたしたちは、永遠に白鳥のままなのですか？」

そのことばにエヴァは、少し心を動かされたようでした。そしてこういいわたしました。

「三〇〇年をこのデラヴァラの湖で過ごせばいい。次の三〇〇年はエリン（アイルランド）とアルパ（スコットランド）の間にあるモイルの海で過ごし、あとの三〇〇年は、西の海の

グローラ島で過ごすのだ。北の国の王子と南の国の王女が結婚し、キリスト教の鐘の音がひびいたとき、おまえたちは、人間の姿にもどるだろう」

魔法の解ける日を教えてから、エヴァはこうつけ加えました。

「おまえたちに人間のことばを残しておこう。姿のほかは、心もいままで通りにしておこう。それに聞く者の心をなぐさめる、悲しく美しい歌声はあげよう」

こういってからエヴァは、四羽の白鳥を湖に置き去りにすると、馬車で父王ボォヴの宮殿に着きました。四人の孫たちがいっしょでないのを知って、がっかりしたボォヴは、父リールが来させなかった、という娘エヴァの説明を聞いて不審に思いました。ひそかに使者をリールに送ってたずねさせましたが、リールのほうも四人の子どもがエヴァといっしょにボォヴの宮殿に着いていないことに驚き、自分で確かめようと出発しました。

デラヴァラの湖まで来たとき、美しい四羽の白鳥が、やさしく悲しげに、人間の声で歌をうたいながら、馬車の方に近づいて来ました。フィノーラの白鳥がなつかしそうに父の足元に来て、小さな声で、四人の姉弟の身に起こった悲しい出来事を話したのです。これを聞いて驚き嘆き悲しんだ父リールは、急いでエヴァのいるボォヴの宮殿に馬をかけさせました。エヴァのやった悪事は、父にも祖父にもすっかりわかり、みなは悲しみと怒りにふるえました。

ボォヴ王は、娘エヴァの目に邪(よこしま)な影が宿っているのを見て、ドゥルイドの杖をとりあげると、娘をひと打ちし、「空気の悪魔」に変えてしまいました。叫び声をあげてエヴァははばたくと、黒い雲のなかに舞いあがり、それ以来今日まで、悪魔となって黒雲のなかに住んでいるといわれています。

四羽の白鳥が、デラヴァラの湖で歌う美しい妙(たえ)なる歌は、聞く者の心にやすらぎを与え、ダーナ神族のものは、次々とこの湖に集まって来ました。父リールも祖父のボォヴも、みなこの湖のそばで白鳥とともに暮らし、いっしょに歌をうたい、楽しく語りあい、三〇〇年はまたたくまに過ぎました。けれど、モイルの海に発つ別れの日が来てしまいました。嘆きながら、フィノーラはこう歌いました。

さようなら、さようなら、お父さま、
お別れの、悲しい時が来たのです。
さようなら、やさしいおじいさま。
さようなら、なつかしいお友だち。
つらい運命(さだめ)が終わる日まで、
親しい方や見なれた野山とも別れ、

悲しみと苦しみの家に住むのです。
また会えるその日まで、
嘆きの日々が続くでしょう！

さあ、飛び立つのです、弟たち、
デラヴァラの波間から、
南の風に翼を広げて、
お父さまやお友だちと今日別れ、
つきせぬ嘆きはあとに残して。
ああ、別れは悲しい、
波の逆巻(さかま)くモイルの海に、
飛び立つ翼は重く悲しい。
また会えるその日まで、
嘆きの日々が続くでしょう！

四羽の白鳥は、歌いながら翼を広げると、別れを嘆く人々の姿を地上に残して、定められ

たモイルの海に飛び立ったのでした。

北の海は、黒く冷たい岩に、果てしなく逆巻く波がくだけるばかりでした。あるときは嵐にもまれ、雪にこごえ、雷にうたれ、人気ないさびしい海の三〇〇年は、四羽の白鳥にとって、つらいみじめな日々でした。しかし背負わされた運命のために、陸へ上がることもできません。姉のフィノーラは弟たちをいたわり、はげしい嵐に羽根が岩に凍りつく夜は、両方の翼の下に、弟たちを抱きかかえて眠るのでした。

やがて最後の期間、グローラ島で過ごす三〇〇年の日がやって来ました。北のモイルの海から飛び立った四羽の白鳥は、途中でエリンの島の上を過ぎ、なつかしい父リールの宮殿まで来ました。ところが、そこには会いたいと思っていた人たちの姿はなく、昔の住み処には、くずれた城壁だけが残り、エニシダのしげみをぬける風のざわめきがあるばかりでした。丘の廃墟に舞いおりた白鳥たちは、悲しみの歌をうたいました。

いったいどうしたというのでしょう、
悲しい恐ろしい変わりよう、
嘆きに心もつぶれます。
昔たのしい父上の、

家も広間もあの庭も、
今は、わびしくくずれ果て、
草のみしげるばかりとは！

勝利にいななく馬の声、
狩りに出かける猟犬の、
声もとだえて、今はない、
この荒れ果てた広間の壁に、
昔、並んでいた楯、銀の杯、
着かざった騎士や若者たち、
あのあでやかな娘たちも、
いったいどこへ行ったのでしょう？

ああ呪われた身は、悲しい——
昔すごしたあの家の、
くずれた廃墟を見ようとは、

ああ、やさしく勇ましいお父さま、
あなたの栄光も悲しみも、
今は墓場にしずまって、
子どもは嘆きに暮らせよと、
お残しなされたのですか？

あの残酷な継母（かあ）さまの、
罪ある呪いを身に受けて、
この世に生のある者が、
味わったこともない悲しみと、
つらさのなかに姉弟は、
こうして生きているのです、
海から海へ、年から年へさ迷って、
魔法が解けるその時まで

四羽の白鳥は最後の試練の三〇〇年を、グローラ島にある小さい湖で過ごしました。その

美しい歌声を慕って、エリン全土から、いろいろな鳥たちが集まって来ました。それでいまでもその湖は「鳥の湖」と呼ばれています。そしてエヴリックという若い百姓が、エリス湾に住むようになり、四羽の白鳥たちと仲よくなって、その身の上話を聞いて心を動かされ、ほかの人たちに話しましたので、この物語がいまでも伝えられ残っているのだともいわれています。

ある朝、静かな湖の水面を伝わって響いてくる鐘の音で、リールの子たちは眠りをさまされました。それは一度も聞いたことのない不思議な音色でした。キリスト教の鐘の音というのかもしれない、エヴァのいった魔法の終わりを告げる音かもしれない、フィノーラが弟たちにいいますと、苦しみが終わりに近づいたことを知って、白鳥たちは喜びの歌をうたい始めました。

その高らかに美しい調べは静かな湖水を響き渡り、礼拝堂で祈りを捧げていた聖者ケモックの耳に入ったのです。

聖者は湖の四羽の白鳥が、リールの子どもたちであることを知ると、礼拝堂に迎え入れました。神への信仰の教えは白鳥たちを動かし、白鳥たちはそのときから、神を讃える教会の歌の仲間に入ったのでした。

やがてマンスターの王女デッカ――南の国の王女でした――とコノートの王子レーグネン

――北の王子――とが結婚することになりました。デッカはレーグネンに向かって、婚姻のしるしにあの評判の高い不思議な四羽の白鳥を贈り物にしてほしいといったのです。レーグネンは聖者を訪ねて交渉しましたが、聖者はことわりました。レーグネンは銀の鎖に四羽をしばると、力ずくで鎖を引きずり、むりにデッカのところまで連れて行こうとしました。

だがこれが、四羽の白鳥の受けた最後の苦しみでした。そうやってレーグネンが鎖を引きずり、教会を出て三歩も歩かないうちに、四羽の白鳥に不思議な変化が起こったのです。白鳥の羽根がすっかり落ちると、そこには四人の老人が現れました。真っ白な髪が腰まで伸び、数え切れぬほどしわがきざまれ、九〇〇年の年月の重みに腰の曲がった弱々しい四人の老人でした。

レーグネンは恐怖のあまり逃げてしまいましたが、聖者はこの哀れな四人への洗礼を用意しました。死が四人に、急速に近づいていることがわかったからでした。

「わたしたち四人を、一つのお墓に入れてくださいまし、コーンはわたしの右に、フィアクラは左に、イードはわたしと向かい合って。モイルの海の寒い夜には、こうやってわたしは、よく弟たちを暖めてやったものです。あのときと同じように、弟たちも並んで永遠（とわ）の眠りにつきたいでしょうから」

このことばを残し、四人の苦しみは終わり、魂は天に昇っていったのです。聖者ケモック

は、オガム文字で四人の名まえを墓石に刻み、天国に帰る日まで、リールの姉弟のために祈りました。

大地と河の女神――エスニャ、エリウ、ボアーン

ダーナ神族(トゥアハ・デ・ダナーン)は、女神ダヌ(ダーナは属格)を母神とする神族であることは前にふれ、ダヌについても書きましたが、女神が大地や地下の活力として、生命を産む源と考えられ、また稔りや豊かさの象徴として崇められることは、ケルトの場合も同じです。とくにアイルランドでは、地方の土地の守り神に女神が多く、丘や山・野原などの地名の由来や起源にまつわる伝承が、語り部によってたくさん伝えられているのですが、神格化としては女神が多いようです。

女神アーニャはダーナ神と混同されていますが、この神はマンスター地方の守護神であり、ケリーにある二つ並んでいる丘は「女神アーニャの乳房」といわれ、地母神や産土(うぶすな)の神として、また稔りや豊作の女神として信仰されています。マンスターの地下の女神とされている

のはクリーナーで、コークのマロー近くの妖精の丘が、その住み処とされています。マンスターの北部の女神はエヴィンであり、南部を守護する女神はエスニャで、アルスターの女神はアーニャですが、同じ女神とみられています。土地に関係のある女神たちは丘の下にある地下の世界に住んでいるわけで、のちになりますと妖精の丘に住んでいる妖精の女王とみなされていきます。ダーナ神族たちが地下に逃れたとき、ダグダから妖精の王とされたのはフィンヴァラでしたが、その王妃オーナが妖精の女王となって、全妖精界に君臨することになります。また地下や海のかなたにある他郷は、「女の国」とも呼ばれています。フェバルの息子ブランが、美しい調べに夢を誘われふと気づきますと手に銀のりんごの枝があり、その夜美しい女性が現れて、ブランを常若の国へ連れて行きます。そこは美しく若い乙女たちだけの楽園で、海の神マナナーンの支配する国でした。

マンスターのクリーナーはこのマナナーンの国に住んでいた乙女でしたが、恋人キーヴァンと国を逃れたのでした。ふたりが着いたのはコークのグランドア湾でした。キーヴァンが森へ狩りに出かけたあと、クリーナーは海岸の岩に腰をかけて待っていました。そのとき、マナナーンの国の妙なる調べが耳に入って来たのです。うっとりと心地よい気分になり眠りに誘いこまれてしまいました。クリーナーが眠っているあいだ、海は満ち潮となり荒れて、大波がうち寄せてきたと思うまに、クリーナーを飲みこむと、そのまま「女の国」へ連れ帰

ってしまいました。森から帰ったキーヴァンは、ひどく嘆きました。そのためグランドア湾は「クリーナーの波の浜べ」と呼ばれるようになったのでした。

さきにあげた土地の守護神のうち、マンスターのエスニャは、豊作と稔りの女神として、穀物と家畜を守る月の女神として、いまでも農夫たちに信仰されています。そして伝承の物語がたくさんあります。エスニャは人間の子どもを産んだのですが、その息子は、また魔法を使う貴族としていろいろな伝説のあるマンスターのゲラルド伯（フィッジェラルドともいわれている）です。この息子を産むとき、エスニャは一夜のうちに丘いちめんにえんどう豆を植えつけたといわれています。この丘はエスニャの丘（クノックエスニャ）と呼ばれており、六月二十四日の夏至前夜（聖ヨハネの逮夜の日）には、丘の頂きでその年の豊作を祝う祭りが催されます。

その夜、村人たちは、棒の先に乾草かワラを結びつけたタイマツに火をともし、それをかざしながら、エスニャの丘を夜おそくまで歩きまわって、豊作を女神に祈ってから、それぞれの畑に帰って、そのタイマツを自分の家の穀物や家畜の上でふりながら、再び豊かさと幸運とを願うのです。

ある年のエスニャ祭の夜のこと、村人たちは死者があったので、祭りをとりやめにしましたが、エスニャの丘を見ますと、ちらちらとタイマツの火が動いており、いつもより数が多

いようでした。不思議に思った村人が丘に近づいて、エニシダのやぶのなかからようすをうかがいますと、エスニャの女神が先頭にたって、タイマツをかざしており、あとにはちらちら赤い火が続いていたということです。

エスニャは人間の子ゲラルド伯を産んだわけですが、その父はデスモンドの貴族でした。あるとき、エスニャは白鳥の姿でグル湖に舞い下り、そのうすい衣をぬぎますと、美しい乙女の姿に変わりました。水浴びをしているあいだ、エスニャはうすい衣を岸べの草むらにおきました。この美しい変身を木立ちのあいだから見ていたデスモンド伯は、そのうすい衣を隠してしまいました。天女の羽衣のように、それがないとエスニャは身を隠すことができません。とうとう彼の妻となり、ふたりの間には息子ゲラルドが生まれました。

母エスニャから教えられ、ゲラルドは魔法に上達しました。エスニャは夫に向かって、ゲラルドがどのような術を見せても、けっして驚いてはいけないと禁制をいいました。しかしゲラルドがその魔法を使って見せた宴会の光景がこの世のものとも思えぬほどすばらしかったので思わず驚きの叫びをあげますと、エスニャの姿は家から消えてしまいました。しかし息子ゲラルドには、この世の生が終わったあとの生を、妖精界に用意しておいたのです。いまでもリマリックにあるグル湖の水底に、ゲラルドは国が外敵に襲われたときにはいつでも出られるよう部下たちを従えて眠って待っているといわれています。ちょうどアーサー王が

カドベリーの丘で眠って待っているように。そして七年に一度、夏至の前夜になりますと、武装した戦士たちを従え、馬に乗ってグル湖のまわりをひとめぐりするといい伝えられています。

地名の由来としてアイルランドの古い呼び方「エリン」も、女神の名まえから来ています。全能の神ダグダの三人の孫、マクイール、マクケフト、マクグレーネが、ダーナ神族の王として国を治めていたときのことです。王にはそれぞれの王妃、バンバ、フォトラ、エリウがおりました。アイルランドの民族の祖先になるミレー族が上陸し、王の城砦のある都ともいうべきターラに向かって進んで行ったとき、途中でマクイールの妻である女神バンバに会いました。

「あなた方は、島を占領しに行くのですか？」

この問いに、ミレー族の詩人でドゥルイド僧であるアマーンは答えました。

「いかにも、征服するためにやって来たのです」

「それでは少なくとも、わたしの一つの願いはかなえてほしいのです。この島をわたしの名まえバンバと呼んでくださいますか？」

「そういたしましょう」

アマーンは約束してから、再び一行が進んで行きますと、こんどは二番目の王マクケフト

の妃フォトラに会いました。島をフォトラと呼んでほしい、という同じ願いを受けて、また進んで行き、ウシュナまで来ました。そこで出会った三番目の王マクグレーネの王妃エリウはいいました。
「これからあなた方のものとなる島は、この世でもっともよい国になり、あなたの種族は、この世でもっともよい国民になるでしょう。島をわたしの名まえ、エリウと呼んでください」
「よい予言をしてくださった。あなたの名まえでこの国を呼びましょう」
こうアマーンは答えました。この三人の王妃はこのあとダーナとミレー両種族のティルタウンの戦いのとき、魔術を使って敵の船を沈めるのですが、最後には王といっしょに殺されてしまいます。けれど三王妃の名まえ――バンバ、フォトラ、エリウはそれぞれアイルランドの名称としても使われていましたが、三番目の王妃エリウの属格である「エリン」が長いあいだこの国の名称となっていました。
そしてエリウの夫マクグレーネには「太陽の子」という意味があり、太陽・光・生命が、大地の女神と結婚し、エリウの国になったという意味も含ませているようです。
また女神が丘や山を創った話もたくさん伝わっています。その一つにカリャッハ・ヴェーリの話があります。民話に現れてくるこの名は冬をもたらす妖婆(ハグ)ということになっています

が、神話の世界では、母神であり、土地の守護神であり、太陽神ルーの妻ブイと同じと見られています。アイルランドの南西の土地は、この女神が創ったのですが、あるとき、ケリーの西にある島の岩石で山を創ろうとして、エプロンに岩をたくさん入れて運んでいるうち、あやまって落としてしまったのがミースにある岩山だといわれています。またリマリック地方の妖精の丘の女王とも見なされています。

また平野を切り開いた女神としては、ティルテュがいます。彼女はフィルボルグの王エオホズ・マクアークの妻でした。種族がダーナ神族に敗れ、夫が死んだあと、ダーナ神のひとりと結婚しました。ティルテュは斧で、森林を切り開き、アイルランドのほとんどをクローヴァーでおおわれる緑の野に変えました。仕事の過労からティルテュは倒れて死んでしまいました。アイルランド全土の人々は嘆き、とくに養子であった光の神ルーはティルテュの祭りを、ルーナサドという収穫の祭り前後の十五日のあいだ（一か月）おこなうことに決めました。そのときは、「家々は穀物とミルクにあふれ、祭りは幸いと天候に恵まれるよう」祈るのです。ティルテュの死んだ場所は、ティルタウンと呼ばれるようになったのです。

このように、国の名称、土地や場所の名まえ、山や丘や湖や川などの自然の名まえにまつわる話がたくさん伝わっており、それが神話の世界に直接つながっているのです。

水を司り水に住むのは女神が多く、泉・井戸・湖・河などには女神の名まえが多いようで

す。シャノン河は女神シャナンから、セヴァン河は女神サヴリナから、デー河は女神デヴァ、クライド河は女神クロタ、ワーフ河は女神ヴェルベイア、ブレント河は女神ブリガンティアから来ています。泉には病を癒す力があり、幸運をもたらしてくれる女神や水の精が住むという信仰はいまに続いており、昔は泉に馬をいけにえとして捧げ、剣や楯など武器が投げ入れられましたが（泉や湖から古代ケルトの武器が発見されています）、いまではコインやピンや小石を投げ入れて祈ればよいようです。

スライゴーの町を流れる河の名は、女神ガラボーグから来ています。水源はメイヴ女王の泉で、それが女神フィニバーの湖（ギル湖）となり、それが流れて女神ガラボーグの河となるといわれています。この水の三つの変遷は、処女、母、老女を示すともいわれますが、メイヴ女王の三つの面、権威と悪と狂気を示し、またメイヴの印三脚どもえ（トリスケリオン）を示している三位一体であるともいえます。

女神ガラボーグの話は、その土地の民間に伝わるもので記述されてはありませんが、後のキリスト教と異教信仰とのまじりあった興味ぶかい話になっていますので書いておきましょう。

聖ロナンがキリスト教を伝道し、教会を建てるためにこの地を訪れたときのことです。スウィニィという男が聖者を襲って、祈禱書を泉に投げ捨ててしまいました。聖ロナンはこの

神をけがす行為を怒り、スウィニィに呪いをかけました、「狂気となり、裸形にて鳥のごとく国じゅうをさすらい、槍の穂先にかかりて死すべし」。

鳥となって山野をさ迷ううち、スウィニィは素早く飛ぶ力を身につけました。そうしたある日、森で女神ガラボーグに出会い、アイルランドの島を一周する競争をすることになりました。ギル湖を出発点とし、ふたりは全力をあげて島をまわりましたが、スウィニィが勝ったのです。負けた女神ガラボーグは、牝牛の湖に身を投げると、河となって流れていったということです。スウィニィは聖ロナンの予言通り、あるとき豚飼いの槍につかれて死に、天国へ行ったということです。

このほか河の女神ではボイン河の話がよく知られています。ダグダと結婚したボアーンは、ボイン河の女神といわれています。はじめこの河は泉でした。その岸には魔法の榛の木が九本、美しい木かげをつくっていました。榛の木にはいつもたくさん真っ赤な実がなりましたが、その実を食べた者は、たちどころに知恵がついて、世界の秘密がすべてわかるようになるのでした。いわば「知恵の木の実」ともいうべき赤い実でしたが、この実を食べることのできた唯一の幸運な生き物は、その泉に住んでいた鮭でした。真っ赤な実が木から水の中に落ちたとき、一飲みしたのです。それで世界じゅうのことをなんでも知っており、「知恵の鮭」と呼ばれていました。

最高の神でさえ、この実を食べることは禁じられていましたのに、ボアーンは好奇心から、この実を食べようと榛の木に手を延ばしもぎ取ろうとしたときに、木の下の聖なる泉はあふれ、ものすごい勢いでふきあげて彼女を押し流そうとしました。ボアーンは逃げのびましたが、泉の水は元へは帰らず、そのまま河となっていまも流れているのです。河べの榛の木は根こそぎ流され、知恵の実もろとも河に流れてしまいました。これがボイン河ですが、ボアーンはそのままこの河に住むことになり、その女神となったのです。知恵の実を食べた唯一の鮭は、のちになって捕えられ、英雄フィン・マクールに食べられることになります。

河や泉にまつわる伝説は、これと似た河の由来を持ち、女神が住んでいることが多いようです。シャノン河もはじめは泉でした。その水の側にはやはり榛の木がしげっていました。ただこの泉は地上ではなく、海の底の常若(とこわか)の国にあって、コンラの泉といわれていました。この榛は知恵と霊感の実をつけ、食べた者は世界の知識を得られ、詩人となれるのでしたが、神々にも食べることは禁じられていました。

海の神リアの孫娘であるシャナンは、この実を食べたい誘惑にかられ、赤い実に手をのばしてさわったとたんに、泉の水は怒(いか)り、水は波となってあふれ出し、猛り狂い、シャナンを巻きこんで流し、岸べへ打ちつけたのでした。シャナンはそのまま死んでしまいましたが、河となった泉はそのまま流れ続け、シャナンの名まえからシャノンと呼ばれるようになった

といわれています。

戦いの女神――モリグー、バズヴ、ヴァハ

スライゴーにクノックニィという小高い山がありますが、その頂にメイヴ女王の墓といわれる円型の小石でできた丘があります。メイヴはコノートのアリル王の妃で、アルスターのクーリーにいる赤牛を奪おうと戦いを起こし、英雄ク・ホリンと戦った勇ましい女王です。その戦いぶりは、ク・ホリンの物語に登場するときにうかがえますが、自らの欲望のおもむくまま実行に移すはげしい気性と強い行動力をみせ、またその戦いぶりは、すさまじく残忍でもあります。目にもとまらぬ速さで戦車の馬をとばし、また巧みな槍と剣の使い手でもありましたので、のちになって戦いの女神とも思われてくるわけです。

メイヴ女王は、王にかしずくというより、王を従えているようで、メイヴが馬車に乗り全軍を指揮して行進するあとから、アリル王が徒歩でついて行く場面は、よくふたりの間柄を

示しているようです。アルスターの王コノールの叔父で、国を捨て、コノート側についたファーガス・マクロイは女王の恋人でしたが、女王は情熱のおもむくままに何人も愛人を持ち、また母としてたくさんの子どもも産み育てました。メイヴには「酔った女」という意味もあり、野性的な性愛や母性愛に酔い、戦いに酔うといった、情熱的な戦いの女神と性愛の女神との両面が、メイヴの中で一つになっているようです。そしてメイヴには、女王という権威と支配の面がありますので、後になってきますと、伝承の、夢を支配する妖精マブと混じり合って、メイヴが妖精の女王と信じられていくようです。メイヴ女王の恋人ファーガスの妻フリディスは、森の動物や植物を守り司る守護神で、鹿に引かせた車に乗って、いつも森を縦横にかけています。

もっと勇ましく恐ろしい女神が、戦いの女神たち、モリグー、バズヴ、ヴァハ（あるいはネヴィン）の三人です。ブリギッドに三人の娘が重なっていたように、その三人の息子もエクネひとりに入っていたように、この三人もモリグーひとりのうちに、代表されることが多いようです。運命の女神（クロート、ラケシス、アトロポロス）が三人であり、天罰を司る蛇髪の女神フューリーが三人であるように、モリグーも三人なのです。ケルトは「三」の数を好んでいますが、それは「昔と今と未来」かもしれませんし、「若さ・成年・老年」ともいえるでしょうし、「天と地上と地下」かもしれません。その三つが一つのうちに存在している

こと、あるいは一つは他の面をいつも併存させていることを示しているようです。

メイヴ女王は軍勢を率いて、自ら戦場で戦う残忍で無情なアマゾンですが、モリグーたちは戦場に鳥や狼の姿をとったり、幻の馬車に乗って現れては、戦士たちにもっとはげしく戦うように、もっと残虐な行為をするように、そそのかすのです。ヴァハは戦死した者の首を食べるといわれ、叫び声をあげて兵士たちの間にパニックを作り、恐怖と戦慄をあおるともいわれていますが、大鳥やカンムリ鳥の姿となって、血や死の匂いを求めて戦場を飛びまわっているのです。

モリグーはアーサー王伝説に出てくる湖の妖精（フェ）、モルガン・ル・フェの前身といわれていますが、美しい湖の精ではなく、妖婆（ハグ）のような恐ろしい姿の魔性の女性です。ときには美しい乙女の姿となって現れますが、これは相手を誘惑しようとするための変身です。英雄ク・ホリンを誘ってことわられ、恨みと復讐のため、鰻・海蛇・狼・角のない雄牛に変身して、戦いのときに手足にからみつき、飛びかかってじゃまをします。半人半蛇のレイミアの映像も重なってくるようです。

あるときク・ホリンは、モリグーにひどい致命傷を負わせました。戦いのあと喉のかわきを覚えたク・ホリンは、草地で牛のミルクをしぼっている老婆に会いましたので、ミルクを飲ませてほしいとたのんだところ、わたしに祝福を与えてくれるならといいました。その通

りにしてミルクを飲み、気がついたときには、老婆は消え、モリグーが妖しく気味の悪い笑い声を残して飛び去って行くところでした。ク・ホリンの祝福で傷が治ったのです。しかし後にはク・ホリンの身を案じ、戦車のかじ棒を折って危機を予言したりしてたえずつきそい、息絶えたク・ホリンの肩にしずかにとまった烏は、この戦いの女神モリグーでした。

バズヴも「戦場の烏（バズヴ・カタ）」といわれ、戦う騎士たちの頭上を、不吉な羽を広げて飛び回ります。戦場を司るのが、この女神の役目だからです。ある夜すさまじい叫びを聞き、飛び起きたク・ホリンは、戦車を声のする方へ走らせますと、一本足の赤い馬が引く戦車が走って来ました。赤い髪の赤い服の女が、赤いマントをひるがえしながら乗っていました。ク・ホリンが名まえをたずねますと、「冷たい風」「斬る」「恐怖」という謎のようなことばしかいいません。怒ったク・ホリンが、戦車から飛びおり近寄ろうとしたとたん、女の姿は消え、烏だけが近くの木に止まっていました。

バズヴは魔術を巧みに使うとされ、神々ばかりでなく、人間の戦士たちを、姿を変えては誘惑します。また水の近くを好み、小川の浅瀬でときおり戦士たちの血で汚れた鎧や兜や武器を洗っています。見かけた者がその持ち主の名まえをたずねれば教えてくれますが、それは近いうちに死ぬことになっている人の名まえです。浅瀬で目を真っ赤に泣きはらして、死ぬ人の経かたびらを洗うという死の予告者、不吉な妖精バンシーの前身であるようです。

ク・ホリンは最後の戦いに行く途中、エマニアの野を流れる河の浅瀬で、泣きながら血にそまった鎧や胸あてを洗っている女に出会い、よく見ると自分のものなので、驚いて近づこうとすると、その姿はこつぜんと消えてしまいましたが、これはバズヴの変身だったのです。

バズヴもアーサー王伝説のモルガン・ル・フェの前身といわれますが、たえず戦士たちの身辺にいて、戦いを見守り、その運命を左右するというところは似ています。アーサー王の湖の精たちダム・ド・ラックやヴィヴィアンたちは、ランスロットを一人前の騎士に育てあげますが、こうした役割を持っていたケルトの女神たちは、「影の国の女王」「英雄の母」「武術の師」といわれるスカサハやオイフェです。スカサハは影の国に武者修行に来たク・ホリンに武術をしこみ、魔の槍を与え、一人前の戦士に育てあげています。モリグーたち超自然の魔術を使う戦いの女神の要素と、スカサハたち武術や武器を授ける保護者の要素が、混然と一つになってしだいに美化されてゆき、湖の精たちが生まれてきたようです。

モリグーとバズヴは戦いをしかけるだけでなく、戦いの勝利も叫ぶということを示すおもしろい挿話があります。ダーナ神族がフォモールたちを戦いで破ったあと、ダグダが祝いの歌を竪琴で奏でましたが、モリグーとバズヴは一ばん高い山の頂に登り、勝利の叫びをあげたというのです。それからバズヴは次のような歌をうたいました。

平和よ、天に登れ、
天よ、地にくだれ、
地よ、天の下に横たわれ、
すべての者は強い……

母神、大地の女神は地下の活力と生命を司るわけですが、戦いの女神はその反対の力である破壊・死への没落を示していました。しかしこの両方の要素をあわせ持っているのがヴァハです。戦いの女神でありながら、母神と大地の女神にもなっているのです。アルスターのハイ・キングの城のあった古都エヴァン・ヴァハの名の由来は、ヴァハが建設したからといわれ、また後にキリスト教の中心地になるアード・ヴァハの地名もこの女神の名まえから来ています。土地と結びつきますので、豊饒の女神として、あるいは八月一日のルーナサド（収穫の祝祭）でも、収穫の女神として崇められています。

しかし、もともとヴァハというのは、「烏」という意味で、ヴァハは戦いの女神として戦場を烏の姿で飛びまわり、戦いで死んだ人の首を食べているとも信じられているのです。ケルトの戦士たちは、敵の首を打ち落とし、それを手柄の証拠として釘にさし、門にかざる風習がありましたが、それを「ヴァハの木の実のえさ」と呼んで、この女神に捧げました。ヴ

ァハはモリグー、バズヴとともに、三人の戦いの女神となっていますが（ときにはヴァハの代わりにネヴィンになっています）、ほかの三人は、狂暴や殺戮・破壊・復讐・死を司る無慈悲な女神として恐れられているのに、ヴァハは戦いの女神でありながら、活力や豊饒・性愛・支配や産土の神などの要素が入っているのは、㈠入島して来たネメズ種族の首領の妻であったこと、㈡キンボイスの妻として王の城砦であるエヴァン・ヴァハを作ったこと、㈢人間の農夫クルンチューの妻であったこと――という三つの話の中で、ヴァハが妻、母として登場するからです。ヴァハの属性には人間的なものがかなりあり、そこに特定の土地の起源や、祭礼の信仰が結びつきながら、一個の女神になってゆくわけです。

まずヴァハはネメズの妻とされていますが、ネメズは、アイルランドに二番目に入島した種族で、死の国から来たとも、黒海の北岸のシシヤかスペインから来たともいわれる神話の種族で、悪や闇の巨人であるフォモールとの戦いで破れ滅びました。そのときヴァハは、フォモールの王「魔眼バロール」によって殺されたのですが、野原は夫によって「ヴァハ平野」と名づけられて、その土地の守り神となったといわれています。

二番目のヴァハは、はじめてアルスターの王となったキンボイスの王妃として、一時はアイルランド全土を支配します。ディトーバ、エイド、キンボイスという三人の兄弟が、交代で七年ずつ国を治めることになっていたのですが、エイドは、娘ヴァハをひとり残して死ん

でしまいました。王位の交代の時期が来て、ヴァハが王権を主張しますと、ほかの兄弟たちは、女はだめだといって渡しませんでした。そこでヴァハは戦いを起こし、叔父であるふたりの王を負かして、七年間王位を手に入れました。

ヴァハが王座についている間に、戦いに破れたディトーバは、五人の息子を残して死に、五人は反乱を起こそうと、コノートにやって来ました。兄弟たちが森で火をおこし、猪の肉を焼こうとしていたとき、ひとりのライ病やみの女が、近づいて来ました。兄弟のひとりが、この女の目はきれいだといい、ふたりで森に入りましたが、じつはこの女は、ヴァハの変装でした。兄は森の木にしばりつけられ、次々と三人は誘いこまれてはしばりあげられ、アルスターに連れ帰られました。そして兄弟はヴァハの命令で城や砦や堀や町を作るために、奴隷のように働かされたのでした。

ヴァハは次に王になる叔父のキンボイスと強制的に結婚をして、女王としての地位を確かなものにしました。建てた王城の名まえエヴァン・ヴァハは女王ヴァハから由来し、エヴァンはアイルランドのマントをとめる「かざり針」とされています。かざり針のブローチは、ふつう金・銀・青銅などでできており、まるい形に長いピンがさしてありますが、ケルトの住居が、まるい城砦でかこまれた小高い土もりの上に建てられていたので、形の上から「ヴァハのかざり針」と呼ばれたともいわれています。

第三のヴァハは、農夫クルンチューの妻です。アルスターの丘に囲まれた村のなかに、クルンチューという妻をなくした金持の農夫が、四人の子どもといっしょに住んでいました。ある日のこと、ふと、庭先に、美しい女の人が立っているのに気づきました。その女の人は、一言も口をきかず、家の中に入って来ますと、台所を片づけたり、牛の乳をしぼったり、食事のしたくをしたり、主婦の仕事をはじめました。夜になりますと、儀式をするように部屋を右まわりに歩いてから、ベッドに入りました。そしてそのまま、クルンチューの妻となったのです。

ヴァハが来てからその家は豊かになり、やがて子どもが生まれることになりました。そうしたある日のこと、夫はアルスター地方の集会に出かけることになりましたが、ヴァハは、ぜったいにわたしの名まえをいわぬように約束してくれといいました。もし名まえを人の前でいわれたなら、あなたとは、もういっしょにいられないというのです。クルンチューは、そうしたことはたやすいこと、と約束して出かけました。しかし競馬が始まり、王の馬が速くかけ、みながほめているときに、ついクルンチューは、うちの女房のヴァハのほうが、もっと速く馬をかけさせられる、といってしまったのです。

それを聞いたコノール王は、おまえの女房を連れて来て競争させよと、命じました。ヴァハはもう子どもが生まれる時が近づいているので、許してほしいと王に嘆願しましたがむだ

でした。そこでヴァハはしかたなく馬の用意をさせて競馬に加わりました。王の馬を追いぬき決勝点に入ったとき、とつぜんヴァハは、すさまじい叫び声をあげ、そのまま双児を産んだのでした。ヴァハは苦しみながら息をひきとる前に、アルスターの人々の上に、九代にわたるまで呪いがかかることを予言したのです。それは国ぜんたいの人が、戦争や危機のときに、女が子を産むときの苦しみを味わい、力のない状態になるだろうという呪いでした。これはアルスターがコノートのメイヴ女王と交えた「クーリーの牛争い」の戦いのときに現実となり、国は危険にさらされることになります。そしてヴァハが双児（「エヴィン」）を産んだことにちなんで、そのコノール王の地域は、エヴァン・ヴァハと名づけられたということです。そしてヴァハが競馬で勝ったことから、馬の女神ともみられて、のちになると、馬の女神エポナとも関係づけられていきます。

こうした戦いの女神たちは、はげしい気性と強烈な個性とすさまじい力で行動を起こすわけですが、モリグーがク・ホリンを誘い、ダグダを恋人にしているところからもうかがえるように、また、メイヴ女王と愛人たちのことを見ても、女神たちの愛は、はげしく野性的です。ケルトの女神には、ヴィナスやアフロディテのような優雅で美しい愛の女神は見あたりません。もちろんエーディンやディアドラやグラーニャのように美しい恋人たちはいますが、彼女たちは自らの恋だけを求め、その恋に酔っています。もちろん女王や妻として男性の伴

侶があり、よき慰め手であり、よき母である女神たちがたくさんいるのですが、どちらかといえばケルトの女神たちは、男性から独立して力づよく行動し、強い個性を持っているようです。

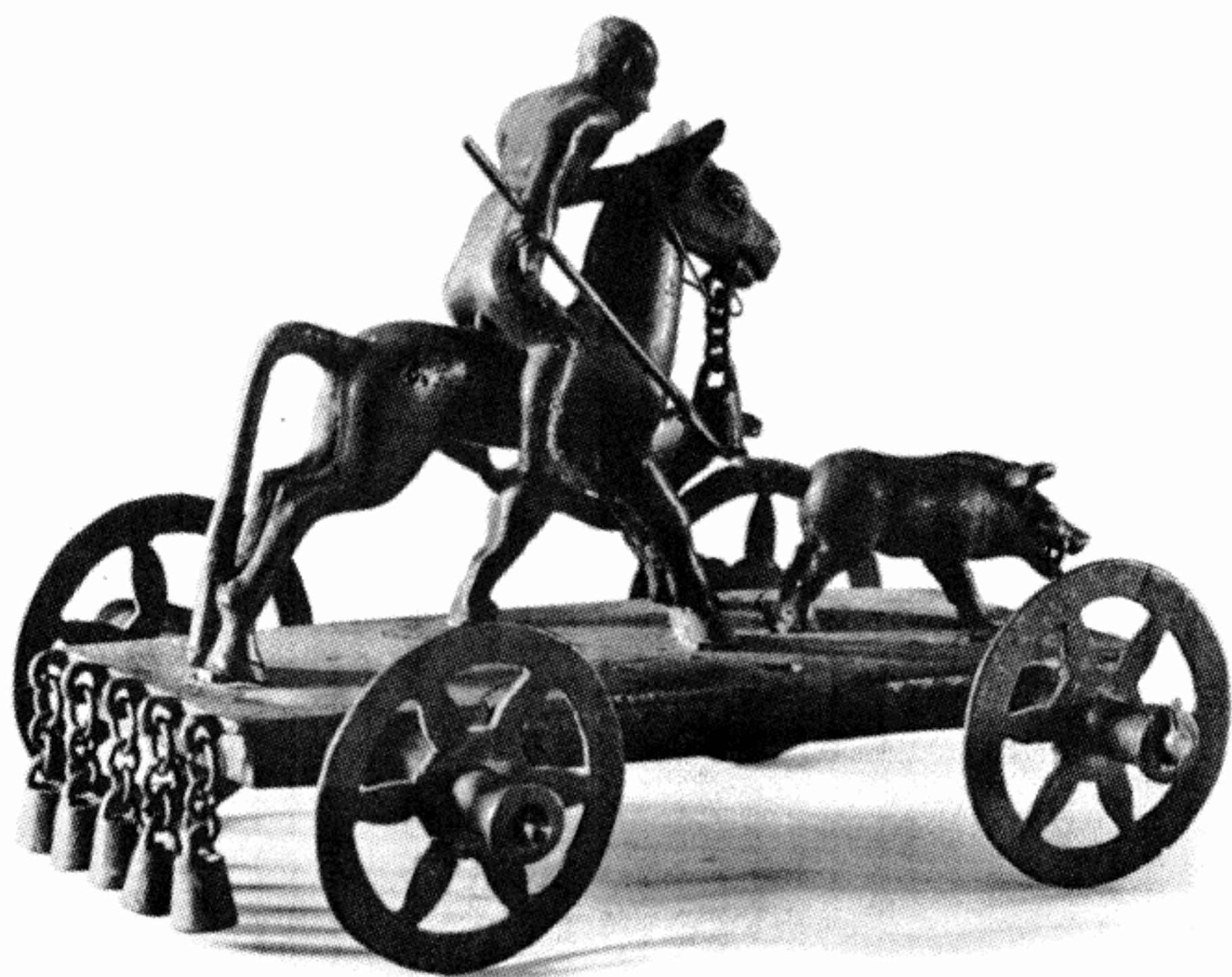
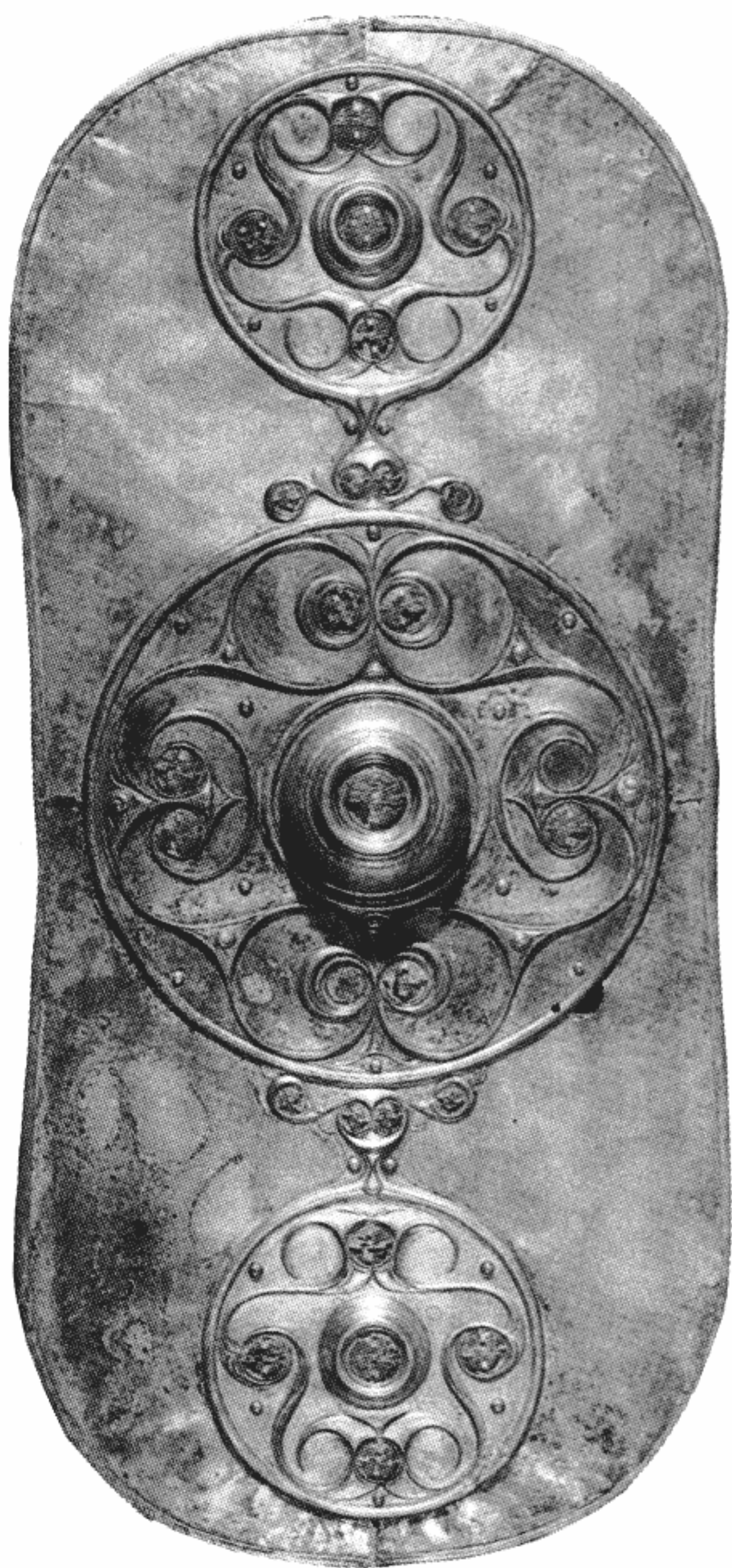
III　アルスター神話

赤枝の戦士たち（レッド・ブランチ・チャンピオン）

ダーナ神族が戦いに破れ、地下に逃れて目に見えない種族となったあと、ミレー一族が目に見える種族として、アイルランドを統治することになります。王の都をターラに定めて城砦を築いたのは、ミレー一族を勝利に導いたエレモンでしたが、何百年かの後、エヴァン・ヴァハに王城を築いたのは、キンボイス王でした。いまではナヴァール・フォートと呼ばれ、アーマの南西に小高い丘が草深いなかに残っているだけですが、神話時代の王たちの古い都として、はなやかな宴（うたげ）のハープが流れ、戦士たちの叫び声や馬や戦車の音が響いていたのです。赤枝の戦士団（レッド・ブランチ・チャンピオン）の鎧や楯が光るなかに、英雄ク・ホリンの槍も見えていたでしょう。コノール・マックネッサが王であった時代のエヴァン・ヴァハの地が、このアルスター神話の英雄たちの舞台になります。

王といってもこの時代には、ひとりの王が全アイルランドを統治するのではなく、五つの王国（今は四つの地方）、アルスター、コノート、マンスターとレインスターが二つに分れ（ミース）、一五〇の小さな部族（トゥアハ）がその中に入っていました。一つの王国は、王家を頭（かしら）にして貴族（地主）、騎士（チャンピオン）、ドゥルイド僧（詩人）、技術者（鍛冶屋、医師など）、そして一般の人々の下に、下僕や奴隷がいるというように、各階級に分かれており、日本の、城を持った大名の藩に似ているようです。そう考えていきますと、赤枝の戦士たちは、武士にあたるかもしれませんが、騎士といっても、馬の背に乗ってはいず、御者のいる馬が引く戦車を走らせ、槍と楯と剣を持ち、投石器で石を射て戦うのです。

赤枝の戦士団は、王の護衛をつとめ、外敵を防いだり、他の王国との戦いのために、王に雇われているいわば職業軍人ですが、親戚や連盟の味方たちの集団から成っています。ローマの軍団（リジョン）を手本にして組織され、三つの連隊からできており、一隊には三〇〇人ほどの戦士がいたそうです。戦いのないときは、野営をして武術の腕をみがき、狩りや釣りをして、冒険的な生活をしていました。二世紀あとのフィンをリーダーとするフィアナ騎士団になりますと、よりいっそう組織化され、厳しい試験や訓練が課されるようになります。赤枝の館が戦士たちの集会の場所であったので、この名まえで呼ばれているようです。

赤枝の戦士たちの中でも、一ばんの勇者は、ク・ホリンで、勇士アキレウスやヘルメスに

騎馬戦士像

ブロンズ楯

たとえられていますが、太陽の神ルーを父として、神秘的な誕生をしており、超自然的な力を持つ半神半人の英雄です。ク・ホリンが活躍するのは、コノートの女王メイヴが、クーリーの牛を奪おうと起こした戦い『クーリーの牛争い』（『トィン・ボー・クールニャ』）の物語のなかですが、これは『イリアス』のような英雄サガで、大らかで素朴で野性的である一方、神秘的で幻想的な魅力にあふれています。書かれた物語としては一ばん古いもので、一一〇〇年ごろの古書『赤牛の書』のなかに入っています。赤い牛の皮の上に書かれ、赤い牛の皮で装幀されているのでこの名があります。

『トィン』の中から、英雄ク・ホリンの一生と活躍を主なところからたどってみましょう。神々たちはまだこの時代にはしばしば現れ、英雄ク・ホリンとことばをかわし、戦いを助けたりじゃましたり、自在に活躍します。『トィン』のなかから悲劇の恋人たちの物語『ノイシュとディアドラ』をとりました。これはフィアナ神話群の『ディルムッドとグラーニャ』とあわせて読んでいただくとその似ていることにお気づきになると思いますが、これらは中世の『トリスタンとイゾルデ』の基といわれています。

光の神ルーの子ク・ホリン

I　〝英雄の誕生〟

ある冬のことです。エヴァン・ヴァハの城にコノール王や貴族、戦士たちが集まっていました。そこに使者があわてて入って来ると、こう知らせました、鳥の大群が現れて、穀物畑や果物の木を食べ荒らしています、と。王や戦士たちはその光景を見て怒り、すぐさま九台の戦車に乗って、投石器を使い、鳥の群れを追い払いはじめました。このとき、コノール王は、妹であるデヒテラが御者をつとめる馬車に乗っていました。

鳥たちは、戦士の射る石をたくみにかわしながら、美しい翼をひろげさえずりながら飛ん

でゆきます。鳥たちは二羽ずつ銀のかせでつながれ、二〇羽ずつ九つの群れをつくり、野を渡り丘を越え、王や戦士たちをあちこち引っぱりまわしたあげく、ボイン河のほとりにある妖精の丘近くまで連れて来ました。このとき三羽だけが、群れをはなれ、林に入りました。王たちが、かなり遠くまで来てしまったのに気づいたときには、日はすでにとっぷり暮れ、雪も舞い下りはじめていました。

王は戦車の馬を解いて、泊まるところを探すようにいいました。幸いコナルとブリックリュが、丘の林の中に新しく建てられたような一軒の家を見つけ、中から男と女が出て来て快く迎えてくれましたので、王と戦士たちは中に入りました。小さな家と思いましたのに入ると大きくなったように思われ、出されたごちそうは、これまでに味わったこともないようなすばらしいもので、一同は満足して床につきました。

夜がふけたころ、妻に赤ん坊が生まれそうだといわれ、デヒテラはすぐ納屋に手伝いに行きました。まもなく男の子が生まれましたが、ちょうど同じときに、家の外でも戦士の馬に、二頭の子馬が生まれました。男の子を預かってデヒテラが育てるという約束をし、その代わりに子馬を夫妻に贈り物にしました。

ところが、一夜明けてみますと、丘にあったすべてのものが、かき消えているではありませんか。家も夫妻の姿も、そして鳥さえ一羽も見あたりません。ただ男の子と二匹の子馬だ

けは、残っていました。アルスターの戦士たちは、男の子をエヴァン・ヴァハの城へ連れて帰りました。だが不運なことに、赤ん坊はまもなく病気になって死んでしまいました。わが子のようにかわいがって育てていたデヒテラの嘆きようは、はたの見る目にも気の毒なほどでした。

子どもの死を嘆きながら家に帰ってきたデヒテラは、のどがかわきましたので、召使いに飲み物を持ってこさせました。飲み物のコップをデヒテラがちょうど唇に持っていったとき、小さな虫がすっと入って、飲み物といっしょに、デヒテラの体の中に入ったのでした。

その夜、デヒテラは夢を見たのです。りっぱな美しい男の人がやって来てこういいました。

「あなたはまもなく、わたしの子を産むでしょう。デヒテラよ、あなたを妖精の丘に連れ出して、一晩そこに寝かせたのはわたしです。あなたがかわいがっていた死んだ子は、わたしの子でした。その子は再び、あなたの子宮に入っているのです。その子にセタンタという名まえをつけるように。わたしは太陽神ルーです。二頭の子馬は、その子が大きくなったとき、戦車を引かせるためにいっしょに育てるように」

デヒテラのお腹の子はだんだん大きくなっていきました。アルスターの人たちは、その子の父親がだれなのか知りません。兄のコノール王は心配して、妹をスルトヴと結婚させることにしました。婚礼の前に月満ちて、デヒテラは、男の子を産み、父である太陽神ルーのこ

とばに従って、セタンタと名づけられました。
だれがこの子を育てるか、王のまわりの戦士たち、毒舌家のブリックリュや、勝利のコナル、豪傑のブリュガ、知恵者のファーガスや、詩人のアマーンなどが、義理の父になって知恵と勇気のあるりっぱな若者に育てようと申し出ましたが、元服するまで、妹のフィンコムに預けようと王は決めました。そのとき、ドゥルイド僧のモオランが、セタンタの未来をこう予言したのでした。
「人々はこの子を讃美するでしょう。御者も戦士も、王も聖者も、みながこの子がした事を、語り伝えることになるでしょう。あらゆる悪と戦い、破壊をふせぎ、あらゆる争いを解決するでしょう、その短い生涯のうちに」

2　ク・ホリンの元服

七歳になりますとセタンタは親のもとを離れて、りっぱな戦士になるよう訓練を受けている貴族の子弟たちといっしょに、宮廷内で暮らすことになりました。
ある日の午後のこと、コノール王は貴族や戦士たちといっしょに、クランという金持の鍛冶屋の館でおこなわれる宴会に出かけました。クランは、戦士たちの馬車や武器を一手に引

き受けて作る、いわば武器製造業の御用商人でした。

一同が道を急いでいたとき、球技(ハーリング)をしている少年の一団に会いました。一二人の少年を、セタンタがひとりで相手にしていたのですが、投げる球は鋭く、また相手を巧みにかわし、確実にゴールに入れるという妙技を見せていました。王はしばらく車を止め、感心して見ていましたが、ほうびとして今夜の宴会にいっしょに来るようにと、セタンタを誘いました。セタンタはそれを受けましたが、ゲームが終わってから参りますと約束して、球技(ハーリング)の群れの中に帰っていきました。

コノール王はクランの館に着き、宴会が始まり、赤枝の戦士たちは出される数々の料理や酒を楽しみ、詩人たちが朗々と語る昔の王たちの偉業や勇士たちの手柄話に耳を傾けるのでした。クランは館の護衛のために、猛犬の鎖をはずしてもいいだろうか、と王にたずねました。一〇人の戦士がかかっても倒せず、ふつうの犬なら一〇〇匹ほどの力のあるすばらしい番犬、とクランは犬を自慢しました。王はセタンタが遅れてくるのをすっかり忘れており、全員がそろっているからよいだろうといいましたので、番犬は放されました。

一方セタンタは、球技(ハーリング)で少年たちを負かし、はずんだ気持でボールをついたりしながら、クランの館のある砦近くまでやってきました。すると、その音を聞きつけ、けたたましいほえ声をたてながら、セタンタを八つ裂きにかみさこうと牙(きば)をむいて、番犬がすごい勢いで、

向かってきたのです。

広間にいた王と戦士たちは、犬がけたたましくほえたと思うと、なんともいいようのない恐ろしい声が響き渡ったので、思わず杯をおいて耳をすませました。とつぜん王は、セタンタが後からくるのを思い出し、猛犬の牙にかかって八つ裂きにされたかと、一瞬、恐怖におそわれました。みなは剣をとると、急いで砦に出ました。タイマツの明りに照らし出されたのは、血まみれになって立っている少年でした。そして足元には、大きな番犬が血を流して死んでいるではありませんか。飛びかかってきた猛犬と格闘のすえ、セタンタは素手でのど元をつかんで門の石の柱に投げつけ、猛犬を殺してしまったのでした。

コノール王や戦士たちは、セタンタのすばらしい勇気と力をほめたたえ、みなは少年を宴会の席へ連れて行こうとしました。ふとふり返ったセタンタの目に、飼い主であるクランが、忠実だった番犬の死を悲しんでいる光景が映りました。セタンタはひき返すと、こういいました。

「この番犬と同じような犬を、国じゅう探して、連れてまいります。そのときまで、夜はぼくがあなたの番犬になって、お屋敷とあなたをお守りいたしましょう」

このセタンタの勇ましい行為を記念するために、ク・ホリン（ホリンの猛犬）という名まえにするように、とコノール王はいいました。それでこのときから死ぬまで、ク・ホリンとい

う名まえで呼ばれるようになりました。「ク」というのはゲール語で「猛犬」ですが、古代アイルランドでは猛犬は勇気や美の典型とも考えられていて、クロイとかクコオブ、ベアルクというように、クのついた名まえが多くあったようです。

ク・ホリンという名まえになって一年後のこと、ドゥルイド僧カファが生徒たちに占いの術を教えているところに、ク・ホリンは通りかかりました。カファはその日のことを占っていました。

「今日、はじめて武器を身に着ける（元服する）若者は、幸運であろう。その者はこのエリンの国にかつてないほどの、偉大な戦士となろうから。その者の生命ははかないであろうが、なしとげた行為は、いつまでも人々の口に伝えられてゆくであろうから」

このことばを聞いたク・ホリンは、手にしていた球技（ハーリング）の道具をそばに置くと、王のところに行って、武器を身につけさせてください、と申し出ました。王は喜んで、少年隊たちが使う二本の槍と楯と剣とを与えました。ク・ホリンがその槍をふりますと、柄はたちまち折れ、くだけてしまいました。これを見て王は、もっと強い武器を次々に与えましたが、ク・ホリンの手にかかると、みな折れてしまうのでした。戦車もためしに乗ってみましたが、ク・ホリンの足でふみつけられますと、たちまち音をたてて壊れてしまいます。そこでついに王は、自分の戦車、二本の槍、剣を与えてみました。これらは特別に作られたものでしたから、さ

すがに壊れません。

「わしの槍と楯とをおまえのものとして使うことを許そう。その武器が、おまえに栄光と名声をもたらすことを祈ろう」

元服したク・ホリンはこのようにして、はじめから王の武器を身につけ、王の戦車に乗ることになったのです。

3　エマーへの求愛

ク・ホリンは成長するにつれ、賢く高貴でりりしい若者になっていきました。そのうえ武芸に秀でていましたので、みなに愛されましたが、とくにク・ホリンを一目見た娘たちは心をときめかせ、人妻さえ彼にあこがれますので、エヴァン・ヴァハの戦士たちは、早くク・ホリンに妻を探したほうがよいと思いました。

そうこうするうちに、ク・ホリンは、これはと思う娘に会うことができました。フォーガルという領主の娘のエマーでした。エマーは当時のすぐれたケルト女性が持つべき六つの特性――一つは美しい容姿、二つにはきれいなやさしい声、三つ目はさわやかな弁舌、四つ目は針仕事が上手なこと、五つ目は聡明であること、六つ目は貞淑であること――をすべて備

えた娘だったのです。

エマーは緑の草原に腰掛けを並べ、近くに住む領主の娘たちに、刺繍を教えていました。そこに遠くから馬の蹄（ひづめ）の音と、車輪のはずむ音が聞こえてきました。エマーは娘のひとりになにが来たのか、物見のやぐらにのぼって見てくるようにたのみました。すると娘はこう報告しました。

「戦車がこちらにやって来ます。灰色と黒の二頭の馬が、すごい勢いで土をけ立てて、銀と銅の馬車を引いて走って来ます。馬の頭は火を吹き、け立てる土煙りは、鳥の群れのように後ろに飛んでいます。馬車には美しくたくましい若者が乗っていますわ。真っ赤なガウンには金のブローチが光り、背中に真っ赤な楯を背負っていますが、縁の金が陽に輝いてきれいです。御者は背の高いほっそりした男ですわ。まき毛をピンでとめて、顔の両側には金のカブト板をたらし、赤と金の棒で、馬を走らせています」

エマーに求婚するため、ク・ホリンが、御者で友人のレーグに馬を駆らせて、フォーガルの館にやって来たのでした。

ふたりは、謎かけのような会話をかわしました。物事をあからさまに表現しないで、一つのことばにほかの意味を含ませたり、象徴させて述べる表現を使ったり、あるいは遠まわしにいったりすることが、当時のケルトの上流社会では喜ばれていたのです。たとえば、エマ

ーの豊かな胸のふくらみを見て、ク・ホリンがこういいます。
「心地よげな国がはるかに見えます。武器をすてて、わたしはその国で休みたい」
するとエマーはこう答えます。
「どんな方でも、この国を旅できるというわけにはまいりませんわ。自分の重さの二倍の金を持っており、鮭がはねるように跳びあがれ、一打ちで九人の三倍を切って、一組の真ん中の人だけは無傷のままに残しておけるような方でなければ」
エマーはク・ホリンに、こういいたかったようです。あなたはまだ結婚するには若すぎます、その前に修行して武芸をみがき、特別な技も身につけ、りっぱな戦士になって資格を得てからいらしてください、結婚はそれからと。このことばを聞くとク・ホリンは、そのまま戦車をかえし、エヴァン・ヴァハに帰りました。けれどエマーは、ク・ホリンこそ未来の夫と心に決めたのでした。
エマーの父フォーガルは、ク・ホリンの求婚を快く思わず、じゃましようとしました。他国人を装ってコノール王のもとに出かけて行きますと、ク・ホリンの強いことをほめ、もし「影の国」を訪れ、スカサハという女の戦士から武術を学べば、この世にないほどの勇者になろうといいました。じつは「影の国」まで行くには、荒れ果てた平原を横ぎり、大森林を越え、荒海を渡るという危険な難所をいくつか突破しなければならないのでした。そし

てスカサハというのは魔術にもたけた強い女戦士で、ひじょうに危険でしたので、ク・ホリンが生きて帰らないことを願ってしかけたワナだったのです。

4 「影の国」での修行

ク・ホリンは、エマーにいわれた謎のようなことばの意味がわかり、「影の国」のスカサハのもとへと旅立ったのでした。いわば武者修行の旅でした。困難な個所をいくつか切りぬけ、「不幸の原」に来ましたが、一足歩むごとに、ぬかるみに足をひきこまれ、闇の中で苦しんでいました。すると、どこからともなく、ひとりの若い男がやって来るのが見えました。その顔は太陽のように明るくかがやいており、ク・ホリンはなにか心に希望がわくのを感じました。それはク・ホリンの父の太陽神ルーだったのです。ルーはク・ホリンに車輪を渡し、この車輪をころがしてその後についてゆけばよいと、教えてくれました。

ク・ホリンが車輪をころがしますと、火花が散り、その火のためにあたりは明るくなり、熱のために沼地は乾いて固くなり、ク・ホリンは難なく「不幸の原」を渡りきることができたのでした。

谷の近くまで来たとき、スカサハに術を教わろうと、危険を犯してやって来た者たちが、

それ以上進めず、崖にテントを張って集まっているのに会いました。その人々の中に後になってク・ホリンの親友となり、武術の好敵手として一騎討ちをやることになるファーディアもいました。どうやったらスカサハのところに行けるかをたずねますと、ファーディアはこう教えてくれました。
「あの『弟子の橋』を渡るのだ。しかしあの橋は、渡ろうと足をかけると、真ん中がマストのようにまっすぐに立ってしまい、はね返されるので、今までに渡れた者はひとりもいない」
そしてまたこうつけ加えました。
「スカサハが教えてくれる魔術の極意は二つあるのだが、その一つがこの橋を跳び越える術、もう一つが、ゲイ・ボルグという槍の使い方だ。だからスカサハから教わらないかぎり、この橋を跳び渡るのは難しいだろうな」
しかしク・ホリンは、勇敢にも、独力で挑戦したのです。一度、二度、三度——満身の力をこめて、高く力いっぱい跳び越えようとするのですが、そのたびに真ん中がはねあがって、押し返されてしまうのでした。見ている者たちの嘲笑のなかで、ク・ホリンはくじけず、四度目に挑戦し、こんどはやすやすと、鮭がはねあがるように、真ん中を跳び越えたのです。はじめて会ったとき、エマーがいった謎のようなことば「鮭とび」の術は、この意味だった

ことが、ここに来てわかります。
そして、日本の英雄、源義経が、屋島の戦いのとき、並んだ船を八艘跳び越えたという「八艘とび」の光景が重なって浮かんでくるようです。洋の東西を問わず、英雄には人並みはずれたすばらしい力が備わっていてほしいと、人々は願うようです。
ク・ホリンが「弟子の橋」を跳び越え、着いたところは島で、スカサハの堅固な七つの城壁がそびえ、九つの木の柵には一つずつ首がさしてありました。蛇の群れや恐ろしい怪物が、ク・ホリンめがけて跳びかかって来ましたが、それを切り払い、槍の先で門を破って入っていったク・ホリンを見て、スカサハはその勇気と大胆さに驚きました。
ク・ホリンはスカサハの胸元に剣をつきつけ、戦術、武芸の秘術をすべて授けることを約束させました。それから一年と一日、スカサハは戦いの魔術をすべて伝授し、免許皆伝の極意をク・ホリンに与えたのです。別れ際には、ゲイ・ボルグという魔法の槍を授け、ク・ホリン以外にこの武器を使うのに値する戦士はないとまで賞讃しました。ゲイ・ボルグの槍は、すごい重さで、敵の陣地に投げられると、無数の矢じりが飛び出して、敵軍をやっつけるという不思議な魔法の槍ですが、ク・ホリンは死ぬときまで、この槍を手に戦うことになります。
エヴァン・ヴァハで休む間もなく、ク・ホリンは、エマーとの結婚の約束を果たそうと、

フォーガルの館に向かいました。父フォーガルは、かたくなに娘との結婚を許そうとせず、ク・ホリンを見ると、砦から攻撃をしかけて来ました。そこでク・ホリンは、三つの砦を「鮭とび」の術で一気に跳び越え、向かってくる九人組の三つのグループの兵士たちをひとりずつを残して、一気に打ち倒しました。フォーガルもその刃(やいば)の下に倒れましたので、ク・ホリンはエマーとその身内の娘たちを金銀の箱といっしょに、砦から連れ去ったのでした。初めてエマーがク・ホリンに会ったときにいった謎のようなことばは、ここでみんな現実になったのでした。結婚の資格がじゅうぶんになったク・ホリンの腕に、エマーは抱かれました。エヴァン・ヴァハの宮廷の人々の祝福の中でふたりは結ばれ、ク・ホリンの死ぬ日まで愛し合いました。

5　ク・ホリンと息子コンラの一騎討ち

ク・ホリンが「影の国」にいたときのことです。スカサハとオイフェという女戦士との間に戦いが起こりました。オイフェもスカサハと同じように魔術を使い、武術に巧みで、強さと狂暴さで、みなに恐れられていました。ク・ホリンに出陣させまいとして、スカサハは彼の飲み物に眠り薬を入れました。効き目のある二四時間のあいだに、自分の軍勢が遠くに行

けば、ク・ホリンが戦いに加わるのをあきらめると思ったからでした。しかし、スカサハは計算違いをしていたのです。ふつうの人なら二四時間効く薬が、ク・ホリンには一時間の効果しかなかったのです。目ざめたク・ホリンは武器を手に、軍隊の後を追いかけて来ました。スカサハはため息をつきました。戦いが一生、この若者の運命につきまとうことになるのを予感したからです。

戦いは開始され、スカサハのふたりの息子とともに、ク・ホリンはすさまじい働きをみせ、オイフェの屈強の勇者を、六人もひとりで打ち倒してしまいました。

軍勢がやられるのを恐れ、一気に解決をつけようと、オイフェは一騎討ちの勝負を申しこんで来ましたが、スカサハの代わりに自分が一騎討ちに出よう、とク・ホリンはいいました。そしてその前に、オイフェが一ばん大切にしているものは何か教えてくれと、スカサハにたずねました。

「オイフェの大切なものは三つある。二頭の馬と、戦車と、その御者だ」

ク・ホリンとオイフェは、知っているかぎりの秘術をつくして長いこと戦いました。そのうち、オイフェの一撃が、ク・ホリンの剣の鞘を切り落としたのです。すかさずク・ホリンは、

「あれを見ろ、オイフェの戦車が、馬と御者もろとも、谷間に落ちてしまったぞ！」

オイフェが驚いて、その方を見たすきに、ク・ホリンはオイフェにおどりかかると地面におさえつけ、胸元に剣をつきつけました。スカサハと永遠に平和を結ぶこと、約束が成立した証拠に人質を出すこと、そして自分の子を産むこと。

ク・ホリンは別れるときに、オイフェに指輪を渡し、子どもが生まれたら、コンラと名づけるように、この指輪がその指に合うようになったら、アイルランドに来てもよいが、それまではだれにも自分のことは話さず、だれとも戦わせぬように、といい残しました。それからク・ホリンは「影の国」を去り、アイルランドに帰ったのでした。

ク・ホリンとオイフェとの子コンラは、七歳になると、青銅の舟でひとりアイルランドに渡って来るのですが、父ク・ホリンは初めて会うわが子を、殺さねばならぬ羽目になります。コンラは小舟に石をたくさん積み、投石器につがえて、飛んでいる海鳥を次々と射落としていました。すばらしい手練の業(わざ)で、浜べにいたコノール王は、それを見て感心すると同時に心配になり、その若者がアルスターの国に上陸するのを禁止しました。戦士のひとり、勝利のコナルが王の命令を伝えに行きましたが、コンラは石をそばに放ち、その風だけでコナルを倒し、楯のひもでしばりあげてしまいました。王は次々と使いを出し、同じことを伝えさせるのですが、この若者にかなう者はいず、しばられたり殺されたり、アルスターの戦士は

さんざんな目に会いますが、しかし若者は自分の素姓も名まえも名乗らないのでした。

王はク・ホリンにこの若者と戦うよう命じました。妻のエマーに、あなたの子かもしれないからやめるようにといわれますが、ク・ホリンはアルスターの名誉のために戦うといいます。ふたりの戦いぶりはすさまじく、剣では勝負がつかず、素手の格闘になりましたが、若者はさまざまな業をみせます。波の上を跳び越えたり、体を岩に生えているようにピタリとくっつけてしまったり、ク・ホリンが満身の力で動かそうとしても、びくともしないのでした。そのとき若者の両足が岩の表面に足あとをつけ、それが今日(こんにち)まで残っていて、この浜べはフットプリント（足あと）という名がつけられたのだということです。

しばらく海の中で戦っているうち、ク・ホリンはゲイ・ボルグの槍を思い出し、若者めがけて投げますと、あやまたず脇腹を射ぬきました。

「スカサハは、この槍のことは教えてくれなかった」

このことばから、わが子コンラであることがわかったク・ホリンはさらに若者の指に、あの指輪があるのを見ました。傷ついた若者を抱きあげると、ク・ホリンは海べに並ぶコノール王や戦士たちの前へ運んで来ました。

わたしはこの重い荷を、

両腕に抱いて運ぶのだ、

アイルランドの土にと――・
片腕にはわが子の偉大な武器を、
もう片腕にはわが子の勝利品を、
アルスターの戦士たちよ、
ここにわが子を捧げる――

ク・ホリンはわが子とわかっていながらも、王と国への忠誠のため、戦士の名誉のために戦い、わが子を殺したのです。同じような主題は日本の軍記物の中にもわが子と戦って殺す挿話がありますし、ペルシアの伝説の中にも息子ソフラーブと戦って殺す父ロスタムの悲劇があります。さしもの強いク・ホリンも、わが子を手にかけて殺した嘆きは大きく、三日のあいだ、だれもそばには近寄れなかったといわれています。

6　クーリーの牛争い

あるとき、コノートの女王メイヴは、夫のアリル王と財産を自慢しあいました。コノートでは国の決定権はいつもメイヴが持っており、夫の王より支配的な存在で、自分の力を誇っ

ていました。ふたりは高価な宝石や指輪、金の腕輪やブローチに首かざり、紫・緑・黄色の服から、青銅の水差し、鉄のつぼなど、持ち物を次々と並べては競い合い、あげくの果てに野原に出て、家畜を比べましたが、優劣がつけられませんでした。しかし、アリルの飼っている牛の群れのなかに、白い角をしたフィンヴェナフというすばらしい雄牛がいました。子牛のときはメイヴの牛の群れにいたのですが、成長してからは女に従わず、王の牛の群れに入ってしまい、そのときはアリルの持ち物になっていました。気位が高く虚栄心の強い女王は、この牛と同じものがない自分の財産は無に等しいとまで思ってしまい、さっそく使いを出して、この牛と同じくらい価値のある牛がいるかどうかを調べさせました。アルスターのクーリーにいるドウンという褐色の牛が、フィンヴェナフと同じくらいすばらしく、それはファクトナのダーラの持ち物だということがわかりました。

そこでメイヴは、一年のあいだドウンを借りたい、お礼には五〇頭の小牛を贈るか、ダーラ自身の領地と同じ土地を贈るか、女王の友情も捧げるから、すぐに連れてきてほしいというようにと、ダーラに使いを送りました。しかし使者の交渉がうまくいかず、ダーラは貸すことをことわったのです。メイヴは怒り、どうしてもその牛を手に入れたい、力ずくでも奪おうと決めました。メイヴは激情的で、自分の強い意志のほかには、法律や規則などないも同然でした。

メイヴ女王は、コノート地方の軍勢を集め、アルスターに侵入し、クーリーの褐色の雄牛を奪おうと戦いを起こしました。七年間にわたるこの両国の戦いが、ケルトのイリアスともいえる『クーリーの牛争い』(『トィン・ボー・クールニャ』)の物語になるわけです。メイヴ女王と夫のアリル王、それにコノール王への復讐のためにアルスターを去り、コノートに来たファーガス・マクロイの三人がコノート軍を率いるわけですが、これに対するアルスター軍では、英雄ク・ホリンが、ひとりで勇壮な活躍を見せます。りっぱな戦士となったク・ホリンは、御者で親友のレーグと、二頭の愛馬、灰色のマッハと黒のセイングレンドの引く戦車を走らせ、魔の槍ゲイ・ボルグをかざして、戦場でコノートの軍勢を相手に超人的な戦いをしたあとで、この戦いで短い命を終わるわけです。しかし『トィン』の物語では、英雄の死は書かれていません。メイヴ女王はアルスターのク・ホリンと和平を結び、メイヴ女王の娘フィンダヴェアとク・ホリンはしばらく暮らし、アルスター軍は勝利を得て、エヴァン・ヴァハに引きあげたというところで終わっています。ク・ホリンの最期については、ほかの古文献に、またさまざまな形の伝説としても伝わっています。

二つの国の長い戦いの原因となった牛について見てみましょう。これはただの雄牛ではありません。さまざまな転身を終えたあとで、牛になったという人間で、もとは妖精の血を引いておりました。じつは、このコノートの白い角のフィンヴェナフも、アルスターの褐色の

牛ドウンも、はじめは同じ豚飼い同士で、ひとりはマンスターの妖精王ボォヴに仕え、もうひとりはコノートの妖精王オハル王に仕えていました。ふたりは敵同士で、さまざまに姿を変えては、戦いを続けました。まず大きな鳥（鳥かハゲ鷹）となって空で戦い、次に水の怪物（クジラといわれています）となって水の下で戦い、次には鹿となり、次に人間の戦士に変わり、幽霊となって戦い、竜となって相手の土地に雪を降らせているうちに、ウジ虫（鰻ともいわれます）に変わりました。その姿で空から落ちて来て、一匹はクーリーの川に落ちてダーラの牛に飲まれ、もう一匹はコノートの泉に落ちてメイヴの牛に飲まれたのでした。そこから二匹の特別な牛が生まれたとなっています。

ある説によりますと、褐色のドウンは、毎日五〇頭の牝牛に子牛を産ませ、その背中で三〇人の子どもが遊べるほど巨大で、狂暴な野生の力は、獅子や竜のようにすさまじかったということです。またフィンヴェナフも、そのかげで一〇〇人の戦士が休めるほど大きく、その乳で何十人もの人を養うことができるほど巨大であったといわれています。こうした超自然的な牛は、インドのヒンズーの神話の中で、空の神インドラが力強い牛の姿となって現れていたのを思い起こさせます。そしてこの褐色の牛を手に入れるために命をかけて捕えようとして攻め寄せるコノートの軍勢は、「夜」の攻撃であり、これを守るク・ホリンは光の神ルーの子であるので、「太陽」の力だという象徴的な読み方もあるいはできるかもしれませ

ん。しかし『トィン』の物語の最後で、この二匹の牛は死んでしまいます。長い戦いのすえにメイヴ女王は褐色のドウンを捕まえます。そしてコノートに連れて帰る途中、アエイの原でフィンヴェナフと出会うと、二匹は戦いを始めてしまいます。猛烈な戦いとなり、肉片があたりにとび散り、血まみれのすさまじい格闘のすえ、フィンヴェナフは息絶えてしまいます。殺したほうのドウンも、狂気のようにかけ出したかと思うと、とつぜんすさまじいうなり声とともに真っ黒い肉塊を吐きだし、アルスターとイヴェアフの間の「牛の背」というところ（このために名がつけられたのかもしれません）で死んでしまいます。

この牛を手に入れたい欲望のため、命をかけて戦い、多くの戦士を死なせ国土まで荒廃させた女王メイヴは、牛は死に、アルスターとの和平が成ったので、戦いを止めるべきですのに、こんどはク・ホリンへの復讐心を燃やし、この英雄をほかの者たちに殺させます。そのメイヴ女王の最期はどうかたどってみますと、八八年のあいだコノートを支配してから、あるとき、長年の宿敵であったアルスターの者の手にかかって死んだとなっています。

後年になってメイヴは、ライヴ湾にある小さい島にひきこもって暮らしていましたが、島のある池で、毎朝水浴びをするのを習慣としていました。コノール王にフォアベイという息子があり、彼はメイヴの水浴びをそっとうかがい、ひそかにその池の岸べとの距離を測りました。フォアベイはエヴァン・ヴァハにもどりますと、その距離のところにりんごを置き、

毎日投石器で、そのりんごを射落とす練習を積みました。腕が確かになったところで、その島に出かけ、機会をうかがっていましたが、ある日、メイヴが水に入ろうとしたとき、投石器で額の真ん中を射ぬいたのです。女王はその場で倒れてしまいました。

メイヴ女王は戦いの女神のように勇ましく、はげしく、強い意志に従って行動をしました。『トィン』の中にも、戦いの女神モリグーのほか「影の国」の女戦士スカサハやオイフェなどのアマゾネスたちが登場します。彼女たちの雪のように白い腕や胸には、恐ろしい火のような激情がうずまいており、怒らせるとどのような目に会わせられるか危険でもあります。ケルトの伝説ではしばしば女性もこうして男性と肩を並べて戦ったことが描かれています。

スライゴーのクノックナリの山の上にはいまでもメイヴ女王の墓があり、人々に崇拝されてゆくうちに、メイヴは豊饒と活力を司る女神となり、いつのまにか妖精の女王（マブ女王、夢を司る）と混同されてゆき、いまでも見えない姿で存在していると人々に信じられています。

7　戦場のク・ホリン

メイヴ女王は大きな体に金髪を肩になびかせ、緑のマントには金のブローチが光っていま

した。手には槍を持ち、御者に引かせた戦車の上から指揮をするさまは、戦いの女神のようでした。その青白い顔はひとたび事が起これば、火のような情熱で輝くのでした。七人の息子が率いる軍勢、レインスターの戦い好きな加勢の軍勢、巨人のフィルヴォルグ勢、コノール王に反旗をひるがえしたアルスターの戦士の顔も見える大きな混成軍を従えていました。
　出陣に際してドゥルイド僧に占わせた戦いの結果は、「女王は帰ってくる」というものでメイヴには気に入りませんでした。進んで行く女王の道に、とつぜん、黒い馬の引く馬車に乗った乙女が現れ、こういいました。
「わたしはフェデルマ、予言者です。クロガンの妖精の墓から来ました」
　予言者と聞いて女王は、軍勢の行く手を占えといいました。
「真っ赤に見えます。軍勢は赤く見えます」
「ほんとうか？　アルスターでは女神ヴァハの呪いの下で人々は劇痛に苦しんでおり、戦える者はいないはずだ。勝利はわが軍のものだ。もう一度占ってみよ」
「軍勢は赤く見えます、ひとりの金髪の男がいます。頭に英雄の後光が輝き、肩には勝利が満ちています。戦いのときにはドラゴンに変わり、ゲイ・ボルグと象牙の柄の剣を戦場で高くかざしています。この男のために、多くの傷口から、真っ赤な血が流れるでしょう」
　このときアルスター全土が、えたいの知れない病で苦しんでいましたが、光の神ルーの子

であるク・ホリンには、その呪いは及びませんでした。メイヴの軍勢は、アルスター近くに来ますと、不意に飛んでくる石の矢に当たって、次々と兵士たちが倒れてゆきます。ク・ホリンの投石器にやられるのですが、いつどこに姿を現すかつかめず、全軍は不安に包まれていました。いつのまにかメイヴ女王のペットである犬や小鳥やリスも次々と石が当たってやられてゆき、女王の髪かざりをつけようとしていた女官も、飛んで来た石で殺されましたので、女王は恐怖にとらわれ、そのすさまじい働きを止めたいものと思い、ク・ホリンに会いたいと使いを送りました。浜べにやって来たまだ少年らしい一七歳の美しい勇者を見て、メイヴはこれが一日に一〇〇人の戦士を殺した恐ろしいク・ホリンかと驚いてしまいました。メイヴはもしコノール王を捨て、わが軍につくならば、莫大な贈り物や土地はもちろん、わたしの友情も与えようと誘惑しましたが、ク・ホリンのアルスターへの忠誠はひるがえすことができませんでした。ただ一つ、一日にひとりと戦う、つまり一騎討ちをするという申し出にはク・ホリンは賛成しました。メイヴの考えでは、ク・ホリンに一日に一〇〇人殺されるよりは、ひとりを犠牲として殺させたほうがよいし、その間に他の軍勢は先へ進めると考えたのです。

進んで行った軍勢は、アルスター近くの森の中にある白い墓石の柱に、樫の枝で作った環がさがっており、そこにオガム文字でなにかが刻んであるのを見つけました。ファーガスが

読んでみますと、「片方の足と手と目だけを使って、樫の枝を折り曲げて環を作らぬかぎり、ここを通ってはいけない　ク・ホリン」というものでした。ク・ホリンは自分でしたことをメイヴの軍勢に禁制（ゲッシュ）として課したのでしたが、だれひとりできる者がいず、この禁制を無視して森に入ったため、コノートの軍勢は一晩、霊のために苦しむことになりました。

翌日、メイヴの軍勢は、ク・ホリンと対戦することになりました。二台の馬車がメイヴ側から使者として走って来ました。ク・ホリンはそれを迎え討ち、使者と御者と馬四頭を、そくざに殺してしまいました。そして森に入って先が四本に分かれた枝を切ると、四つの首をその四本の枝の先に突き刺し、河の浅瀬に立てたのです。これもメイヴの軍勢にたいする禁制（ゲッシュ）だったのです。それは軍勢のだれかが、この枝を片方の手の指先だけで引きぬくことができぬかぎり、浅瀬を通ってはいけない、というものでした。

ファーガスが馬車を浅瀬に入れて、片手の指先で四つの首の刺してある枝を引きぬこうとしました。満身の力をこめて引きぬこうとしましたので、一七台の馬車をふみぬいてしまいました。やっと引きぬけたときには、日はとっぷり暮れ、軍勢はその河べから先へは、一歩も進めませんでした。ク・ホリンはメイヴの軍勢が、侵入してくるのをそうやって長びかせて、アルスターが呪いから立ち直る時をかせいでいたのです。

コノートの軍勢は、約束通り、一日にひとりずつ戦士を送り、ク・ホリンと一騎討ちの勝負になるのですが、ひとりまたひとりと、コノートの勇者たちは血に染まって倒れてゆくのでした。

8　戦いの女神モリグーの復讐

その日の戦いに疲れ、ク・ホリンが眠っていたある夜のこと、すさまじい声が北の方から聞こえてきました。ク・ホリンは御者のレーグに馬車を出させ、その方角に走らせました。すると、赤い馬に引かせた馬車に乗り、赤い服に赤いマントをひるがえし、長い灰色の槍を手にした女が、急に目の前に現れると、こういったのです。
「わたしはある王の娘です。あなたの勇ましい戦いぶりにひかれ、こうしてやって来ました。わたしの愛をあなたに捧げたいのです」
それは死と破壊を司る戦いの女神モリグーでした。
「わたしは戦いで疲れていますので、女の人とつき合っているひまなどありません」
こうク・ホリンが答えますと、女神は落胆と怒りとに燃え、こういいました。
「戦いを手伝ってあげようと思ってやって来たのに、それならじゃまをしてやる。戦ってい

るおまえの足に、鰻になってまきついてやる」
こういったかと思うと、女の姿も馬車もこつぜんと消えてしまい、近くの樹の枝に烏が一羽とまっているだけでした。
翌日の会戦は、コノート軍の音に聞こえた豪の者ロフとの一騎討ちでした。ロフは顎にひげのない若造とは戦わん、といいましたので、ク・ホリンは、顎に黒イチゴの汁をぬってひげにしました。
ク・ホリンとロフとは、河の浅瀬で戦いました。とつぜん赤い耳の牛が、まっしぐらにク・ホリンめがけて突き進んで来ました。モリグーの変身です。ク・ホリンはその足を切り落としました。次にモリグーは鰻に変身しますと、河の底にもぐり、ク・ホリンの足にしつこくからみつき、ほどこうとするすきに、ロフの剣はク・ホリンを、浅くでしたが刺してしまいました。次にモリグーは狼に変身し、ク・ホリンに飛びかかって来ましたが、その目をク・ホリンはえぐりました。またその間にロフの剣で、ク・ホリンは傷を負いました。しかしク・ホリンはひるまず、かえって燃えるような好戦欲をあおられ、魔の槍ゲイ・ボルグでロフの心臓を真っ二つに刺し貫きました。このときモリグーは老婆の姿となって現れ、受けた傷の手当てをク・ホリンにたのみました。ク・ホリンがその願いを聞いてやったので、それ以来ク・ホリンの味方になり、いくつかの難所を切りぬける手助けをしてくれることにな

ります。

その夜、ロフから受けた傷で、体の衰弱と疲労を覚えて、ク・ホリンはラーガの墓地に身を横たえていました。そして一騎討ちをしているすきに、メイヴの軍勢に連れ去られた褐色の牛のことを思っていました。その丘の上からは、メイヴの軍勢の夜営の火が赤々と燃え、その明りのなかにたくさんの武器がひかるのが見えました。その軍勢の間から、ふいにひとりの戦士がまっすぐにこちらに向かって来たのですがだれも気づかないようでした。背の高い品のある顔は闇のなかに輝き、赤い金のふちかざりのある上着の上に緑のマントをはおり、銀のブローチでとめていました。手には白銅でふちどった黒い楯と、五つに分かれた矛と、槍を持っていました。ク・ホリンの父である光の神ルーだったのです。ク・ホリンがアルスターのためにつくしたその忠誠をほめ、傷口に薬草をぬってくれると、こういいました。

「お寝(やす)みク・ホリン。傷が治るまで、ゆっくりお寝み、ラーガの墓地のそばで」

ク・ホリンはそのやさしい声を聞くと、すぐに深い眠りにおちてしまいました。眠っていた三日三晩のあいだ、ルーはク・ホリンに代わって自らの剣と槍で、メイヴの軍勢の侵入を防いで、戦ってくれたのでした。ク・ホリンはその深い眠りからさめたときには、すっかり元の体にもどっていました。そしてまた、一騎討ちの勝負が始められるのでした。

9　親友ファーディアとの一騎討ち

伝令がいつもク・ホリンの勝利を知らせに戦場からもどるのに腹を立て、メイヴ女王は最後の切り札とばかり、コノート軍のもっとも強い戦士、ダマンの息子ファーディアを一騎討ちに出そうとくどきました。しかしファーディアはク・ホリンとは昔からの親友で、「影の国」でスカサハからいっしょに武術を教わった間柄でしたので、どうしても引き受けません。メイヴが自分の娘「美しい眉」のフィンダヴェアを嫁にやるといってもことわりましたので、アイルランドじゅうの詩人に命じ、おまえを馬鹿にする詩を作らせ、みなの間で歌って恥をかかせてやるとおどしました。あげくの果てに、ク・ホリンがおまえをよくいってなかったとウソをいってけしかけました。ファーディアはこの残忍な命令を恨み、親友の悪口に怒り、不名誉な評判がひろまるのは戦士の恥と恐れ、混乱した心で、悲しみながら、ク・ホリンとの勝負に出かけたのでした。

ファーディアは夜がまだ明けきっていないときに、指定された浅瀬に出かけ、戦車をとめるとその中で親友の現れるのを待ちました。夜がすっかり明けましたが、ク・ホリンは現れません。やっと陽が高く昇るころになって、ク・ホリンの戦車のとどろく音が聞こえてきま

した。
「おお！　ファーディア、なぜ君は僕と戦うのか。僕たちはともに武芸を学び、森でたわむれ、ベッドを分けあった仲ではないか、いや、深い眠りさえ分けあった仲ではなかったのか」
これを聞くとファーディアもため息をつき、いいました。
「おお！　ク・ホリン、どうか僕たちの友情は忘れないでくれ、これは悲しい運命なのだ。ことばではなく、武器でやりとりをせねばならぬときが来たのだ」
そこでふたりはどの武器を持って戦うかを相談し、まず短い槍を投げることから始めました。短い槍は蜂のようにうなり声をたてながら、陽の下ですごい勢いできらめき、飛び交いましたが、勝負はつきません。こんどは長い槍にして、親友を傷つけるために戦い、こんどはたがいに血を流しました。夜になり戦いが終わりますと、ふたりはかけ寄って肩を抱き合い、それから陣地に引きあげました。ふたりの御者は同じ火に当たり、二頭の馬は同じ小屋に入れられ、ふたりの勇者はたがいに傷の手当てに薬草やヒルを贈ったり、食料を与え合うのでした。
次の朝、昨夜の親友は再び敵同士に変わり、戦いは続けられるのでした。こうして三日のあいだ、長い槍で突き合い、剣で切り合い、互角の武力を持つふたりの戦いは激しさを増し、

友人同士の表情は、しだいに好戦欲に燃えた戦士同士のすさまじさに変わっていったのでした。そして四日目、どちらかが倒れることを予感した、最後の決戦の日でした。

ク・ホリンが突きかかってくる槍を、ファーディアは巧みに楯でかわし、しかもク・ホリン自身をはね飛ばすほどの力で押し返してきました。そのとき、ク・ホリンの血管や細胞には、たぎり立つような好戦欲と熱気とがあふれ、体は膨張して巨人のような姿となり、頭上には怪しい閃光がひかりはじめました。ふたりは武器を捨てると、格闘となって、上に下に、転がり打ち当たり、そのすさまじい戦いぶりに、谷間の悪魔も妖怪も野獣も、恐ろしいうめき声をあげ、浅瀬の水は恐れて止まってしまい、ふたりは乾いた土の上で格闘を続けました。

そのとき、ファーディアの一撃が、あやまたずク・ホリンに深く突きささりました。傷口から流れ出るク・ホリンの血で、乾いた河は再び赤い流れとなりました。ク・ホリンは満身の力をこめて起きあがると、御者の投げた魔の槍ゲイ・ボルグを、指先にはさみ、ファーディアめがけて投げつけました。槍はあやまたず、鉄製の鎧を突き破り、ファーディアの体に刺さってはじけ、中から出た三〇の矢じりはすべての細胞をひき裂いたのでした。

「すべてはすんだ。ク・ホリン、すまなかった」

ファーディアはこう叫ぶと息絶えたのです。ク・ホリンはしっかりファーディアを抱きかかえると、自分たちの陣地まで運び、疲れと傷の痛みと、親友を失った悲しみで倒れてしまま

いました。息を殺して見ていたメイヴの軍勢は、これで恐ろしい敵は死んだものと喜んで勝ちどきをあげましたが、ク・ホリンは死にませんでした。
友人たちがマアセムネイに運び、傷口を河で洗いましたが、その流れにダーナの神々が薬草を流しましたので、まもなく傷は治ったのでした。

10 英雄の最期

女神ヴァハの呪いから回復したアルスターの軍勢と、コノート軍とは、ミースのガラフで猛烈な合戦となりました。もちろん傷が癒えたク・ホリンの戦いぶりはすさまじく、殺された敵の死体はまわりに飛び散り、野を赤く染め、ク・ホリンの乗った戦車は車輪だけになってしまいました。退却するコノート軍を追っていったク・ホリンは、戦車の下にうずくまったメイヴ女王を捕えました。しかし命は助けてくれという女王のたのみに、
「女は殺さない」
とク・ホリンはいい、何年もの間苦しまされてきた女王であるのに、かえってシャノン河を越えるまで護衛をしてやりました。
こうした恩を受けたはずですのに、そしてガラフ平野の合戦のとき、アルスターと和睦し

たはずですのに、また目的の褐色の牛ドウンを捕えたはずですのに（死にましたが）、気位の高いメイヴのク・ホリンに対する恨みは深く、さまざまな復讐を試みます。ク・ホリンに恨みを持つ者たちを集めて、ク・ホリンを討つよう煽動するのでした。たとえば父をク・ホリンに殺され、復讐の念に燃えているカラティンの六人の息子たちを、女王はバビロンとアルパ（スコットランド）に送って、魔法や妖術を身につけさせました。カラティンの息子たちは妖術を使ってク・ホリンのまわりに、合戦の音、軍馬のいななき、戦場の炎などを現出させ、ダンダルガンのク・ホリンの城の炎上のありさまも作り出しました。ク・ホリンは驚き、すぐさま武装をととのえると御者に戦争の用意を命じました。このとき愛馬マッハはどうしたのか戦車につくのをいやがりましたが、レーグが骨を折って戦車につなぎますと、マッハの目からは黒い涙が流れ落ちました。

城にかけつけ妻の無事を見ると、みなの止めるのをふり切って、ク・ホリンは、そのまま戦場へと戦車を急がせるのでした。カラティン兄弟の幻と戦い、その妖術でク・ホリンは錯乱させられていたのです。途中、別れを告げにたずねた母デヒテラが出してくれた杯（さかずき）のぶどう酒は、ク・ホリンが飲もうとすると、血に変わってしまいました。エマニアの野を流れる河の浅瀬に来たとき、白い衣の髪の長い女が、血に染まった服や武器を洗っていました。ク・ホリンがよく見ますと、女は泣きながらク・ホリンの鎧の胴着や胸あてを洗っているの

でした。驚いて近づこうとしますと、こつぜんと消えてしまいました。この女はバンシーだったのです。近く死ぬことになっている人の衣服を流れのほとりで泣きながら洗い、死を予告するのです。もう一度、ク・ホリンは不思議なものに出会います。片目の三人の老婆です。森の中でたき火を作り、樹の枝の串に犬の肉を刺して焼いていました。ク・ホリンを呼び止めると、犬の焼肉を食べて行けと誘いました。身分の下の者からの食事の招待はことわらない、というのがク・ホリンの誓約（ゲッシュ）の一つでしたので、しかたなく戦車を下りると、肉の串を手に食べましたが、その手も肩も半身がしびれてしまいました。自分の名の動物「犬」を食べてはいけないというのが、またゲッシュだったのです。すでにおわかりのようにク・ホリンという名まえは「ホリンの猛犬」という意味だからです。

　再び戦場ですさまじい働きをみせているク・ホリンの戦車の音が近づいてくるのを聞き、アークは策略を立て、弾唱詩人を連れて待ちかまえていました。そばにはあの妖怪のような魔術使いのカラティン兄弟と、父をク・ホリンに殺されたレウィがいました。

「ク・ホリン、おまえの槍をくれ」

　弾唱詩人はこういいました。弾唱詩人に求められたとき、ことわっては戦士の掟に反するといわれており、ある王は求められて目玉をくりぬいて与えたともいわれています。

「ク・ホリン、槍をくれないのなら、わたしはあなたを諷刺した詩を作って広めてやる」

「お持ちなさい。ほしがる人をことわって笑われたくはないですから」

ク・ホリンは槍を投げますと、それは詩人の頭を越えて九人の兵を殺しました。するとクロイの息子レウィは、カラティンの息子の用意した三本の槍のうち一本を手にしました。

「その槍は王に当たるはず」

と呪いのように、カラティンの息子はいいました。投げられた槍はク・ホリンの御者レーグの胸に刺さり、息絶えました。彼は御者の中の王でした。また弾唱詩人がク・ホリンに槍をくれるように、そうしなければおまえの一族を笑いものにする、とおどしました。ク・ホリンが投げた槍は、また九人の三倍の兵を倒しました。こんどはアークがカラティンの息子の槍をとると、戦車めがけて投げました。槍は愛馬のマッハを貫き、馬は槍をたてたまま戦車をはなれかけ去ってしまいました。マッハは馬の中の王でした。こうして三度目の弾唱詩人の要求は槍をくれなければ、おまえの国アルスターを笑いものにするというのでしたが、これにもク・ホリンはしかたなく答え、槍を投げたのです。同じように九人の兵を殺して落ちました。

レウィはカラティンの息子から三本目の槍をとりながら、この槍は何に当たるかといいますと、

「その槍は王に当たる」

という答えが返ってくるやいなや、勢いよく投げました。それはク・ホリンの脇腹を貫いたのです。はらわたが戦車に飛び散り、もう一匹の馬、黒いセイングレンドは、いずくへともなくかけ去ってしまいました。

ムルスヴニャ野には、一瞬静かさが流れました。野には戦士がひとり残されました。

「湖に行き、水を飲みたい」

ク・ホリンは敵に許しを得ると、はらわたを手でかき集め、湖に行き、はらわたを洗って体に納め、体を洗うと、水を飲みました。野原に石柱が立っているのを見たク・ホリンは、自分の体をベルトでその柱にしばりました。横になって死ぬより、立ったまま死にたいと思ったのです。敵の戦士たちは遠巻きになって、勇者ク・ホリンの最期の光景を見守っていました。血が流れとなって湖にそそぎ、カワウソがその血をなめていましたが、ク・ホリンの眉にはまだあの妖気が漂い頭上には光が輝いていました。敵軍は恐ろしくて近づけませんでした。そのとき、どこからともなく愛馬マッハがかけもどってくると、敵軍をけちらしはじめ、追い払い、大勢を食い殺しました。

ク・ホリンの首はしだいに下がり、最後のため息がつかれると、背後の石の柱には、ひびが入りました。すると、どこからか一羽の鳥が飛んで来て、ク・ホリンの肩に止まりました。戦いの女神モリグーが、最後の別れに来たのでした。レウィはク・ホリンが絶命したのを知

ク・ホリンの死（ブロンズ像）

ると、肩越しに髪をつかみ首をはねました。するとク・ホリンの持っていた剣が落ちて、レウィの右腕を切り落としました。レウィの軍勢はその復讐として、ク・ホリンの右腕も切り落とし、首といっしょにメイヴ女王のところに持って帰りました。

旅先でこの知らせを聞いた親友の「勝利のコナル」は、途中で、血をしたたらせた愛馬マッハに出会い、いっしょに湖にかけつけ、石柱のク・ホリンのみじめな姿をみて、復讐を誓います。そして後にリ・フィ河畔でレウィを打ち殺すことになります。マッハは、愛するク・ホリンのそばに寄ると、胸の上にその頭をのせました。その目からは黒い涙が落ちました。

悲しみのディアドラ

　コノール・マックネッサ王と赤枝戦士団（レッド・ブランチ・チャンピオン）が、アルスター地方を守り治めていたときのことです。
　ある日、王の語り部の長であるフェリミ・マクディルが酒宴を催して、王と戦士たちを館に招きました。ハープの調べや詩人（バード）の歌う詩がたえず続き、ギリシアの酒がまわされ、猪の肉や川魚の料理、小麦粉の菓子など、山海の珍味が並んで、人々は楽しいときを過ごしました。フェリミの妻は、宴会がうまく運ぶよう、忙しくみなをもてなしていましたが、おなかには生まれる時期の近い赤子がいたのでした。
　酒宴をじゅうぶんに楽しんだ王や戦士たちは、それぞれのベッドに引きあげ、女たちも寝るしたくをしていました。疲れたフェリミの妻も、部屋に入ろうとしたそのとき、おなかの

中で赤ん坊が叫び声をあげました。その声は、家じゅうに響きわたり、そのすさまじい叫び声に驚いた戦士たちは、何事ならんと剣をぬいて広間にかけつけて来ました。
フェリミの妻がみなの前に連れてこられると、ドゥルイド僧のカスヴァズは、そのおなかに手を当てました。手の下に動く赤ん坊を感じながら、カスヴァズは、こう予言したのです。
「これは女の子です。ディアドラ（災いと悲しみを招く者）という名がふさわしい。この子のために、たくさんの災いと死がやってくるだろう」
その予言通り、まもなく女の子が生まれました。ディアドラのために、たくさんの戦士たちが生命（いのち）を落としたり追放されたりする、というドゥルイド僧の予言を聞いた戦士たちは、赤ん坊を殺したほうがいい、と口々にいいました。しかしコノール王は、それをとどめてこういったのです。
「それはならぬ。この子の不吉な運命をとりのけてやろう。災いの手のとどかぬところで、わしが育てよう、そして年ごろになったら、わしの妻にしよう」
コノール王は、宮殿近くの森にある砦のなかに、この子を入れさせました。周囲には外壁が高くそびえ、だれも乗り越えられませんでした。中には乳母とその夫、養育係として、女詩人のラヴァカンだけが、入ることを許され、ディアドラは、この三人しか知らずに、毎日暮らしていました。そしてやがて、国じゅうのどんな娘もかなわぬほど、美しい女性に成長

したのでした。
ある冬の日のこと、乳母の夫が夕食のために小牛を殺し、その血が白い雪を真っ赤に染めました。すると、黒い鳥が飛んできて、その血をすすりはじめました。この光景を窓から見ていたディアドラは、ラヴァカンにいいました。
「わたしは、あの三つの色をした方と結婚したいわ、鳥のように黒い髪、血のように赤い頰、雪のように白い体をした方と」
「おやおや、お姫（ひい）さま、そうしたお方ならすぐ近くにおいでですよ。ウシュナハさまのご子息、ノイシュさまです」
「そう、そのお方とお会いできなければ、病気になってしまうわ」
ノイシュは弟のアンリ、アーダンとともに、赤枝の戦士団のすぐれた戦士で、ウシュナハ三兄弟としてみなに知られていました。平和なときには優雅で気品があり、狩りのときには猟犬のように速く走り、戦いのときには強く勇敢でした。ノイシュの歌声はまたすばらしく、それを聞けば、牛さえ、いつもより多くミルクを出すほどでした。
あるとき、砦のそばの丘の上で、ノイシュはひとりで歌をうたっていました。その甘い歌声を耳にしたディアドラは、そっと家をぬけ出して、ノイシュのそばに近づきました。気づいたノイシュはいいました。

「すばらしい牝牛が通りますね」
「そうでしょうか。でも、牝牛は雄牛がいなければ、ふとるばかりですわ」
「あなたにはこの地方の雄牛がいるじゃありませんか。アルスターの王という牛が」
「二匹の雄牛からならば、わたしはあなたのような若い雄牛を選ぶでしょう」
「それはできませんね。カスヴァズの予言があるのですから」
「あなたは、わたしを拒むおつもりですか？」
「ええ、そうです」
こうノイシュがいいますと、ディアドラは急にノイシュの両方の耳をひっぱっていいました。
「わたしを連れてここから逃げられないのなら、この二つの耳は《不名誉》と《もの笑い》のしるしになるでしょうね」
「ああどうぞ、お願いですから放っておいてください！」
「いいえ、わたしを連れていってください」
ディアドラに強くたのまれて、困ったノイシュはとうとう大きな叫び声をあげてしまいました。驚いてかけつけた弟たちは、ノイシュからわけを聞くとこういいました。
「なにか悪いことが起こるかもしれない。しかし、そうであっても、不名誉の名をきせられ

て生きているよりはましですよ。彼女をよその国へ連れていこうではありませんか。どこの王でもわれわれなら歓迎してくれるでしょうから」

兄弟たちはこう決めると、夜のうちに出発しました。一五〇人の戦士たちと、一五〇人の女たちと、一五〇頭の猟犬と同じ数の召使いたち、もちろんその一団のなかには、ディアドラもいました。コノール王の追手を逃れるため、各地を転々として、さらに一行は海を渡って、アルパ（スコットランド）に逃れました。そこで温かく迎えてくれた西部地方の王に戦士として仕えました。緑の野に建てた家の中で、一同は平和に暮らしておりましたが、ディアドラのことは人目につかぬよう、みなで気を配っていました。もし王がその姿を見たなら、災いが起こるかもしれないと思えたからでした。

しかしある朝早く、王の家令が家の前を通り、ふたりが床にいるのを見てしまったのです。家令は王にこういいました。

「今日はじめて王さまにふさわしい女性を見つけました。ウシュナハ一族のなかにいる、ディアドラという女ですが、これこそ西国の王にふさわしい女性と存じます。ノイシュを亡きものにして、ディアドラをお取りあげになられたらいかがでしょう」

王は同意して、ひそかにディアドラをくどきましたが、思い通りにいかず、そこで戦いをしかけて来ました。それがたび重なるので、兄弟たちはその地を逃れて、海峡近くの小島に

たどり着きました。

このうわさが、エヴァン・ヴァハのコノール王まで聞こえました。ある貴族がいいました。

「コノール王、ウシュナハの兄弟たちが、ひとりの悪い女のために、敵の中で倒れては、なにかと不名誉なことでございます。いっそ彼らを許し守ってやって、故郷に帰すようにしたらいかがなものでございましょう」

コノール王は心の中では、ノイシュがディアドラを連れて逃亡していることに怒っておりましたが、顔には出さず、ウシュナハの兄弟たちが国に帰ってくることに同意しました。そしてノイシュの幼いころからの親友ファーガス・マクロイにこう命じました。

「ファーガス、行ってウシュナハの兄弟たちを連れもどしてこい。友人としてわしが迎えると伝えてくれ。だが、帰り道に次の二つのことは守るように。おまえはベールクの館に寄ること。そしてウシュナハ兄弟にはエリンの領内に入ったら、わしの出す食べ物のほかは、ぜったいに口にしないことを誓わせよ」

王によこしまな考えがあるとは少しも思わず、ファーガスは喜んで王の命令に従うことを誓い、兄弟たちのところにやって来ました。ノイシュは喜び、すぐにエリンへ帰ろうといいますと、ディアドラはなにか不吉なものを予感したためらいましたが、ファーガスの保護のもとにあることを注意され、帰る用意をしたのでした。

エリンに上陸し、王の命令通り、ベールクの館に寄ったファーガスは、あなたのため三日間酒宴を用意したからぜひ滞在するように、と招待されました。一日も早くエヴァン・ヴァハに兄弟たちを連れていかねばならぬファーガスは、ことわろうとしましたが、

「ファーガス、饗宴の招待をことわるのは、君の『誓約（ゲッシュ）』を破ることではないか」

こうベールクにいわれて、困ってしまいました。戦士たちはひとりずつ、自分の生命（いのち）に代えても守る誓約（ゲッシュ）を、王や貴族や戦士たちの前で誓うのですが、その誓約（ゲッシュ）を破ると、一生涯、不名誉の烙印を押され、また不幸や不運がやってくると信じられていました。「どんな宴の招待も決してことわらない」というのがファーガスの誓約（ゲッシュ）でした。これを知っていた王は、ベールクにいいつけ、ファーガスの足をとめさせ、兄弟と引き離そうとしたわけです。兄弟たちも、「コノール王が出してくれる以外の食べ物は口にしない」という誓いをさせられていたので、これを守るため、どうしても急いで、エヴァン・ヴァハまでもどらねばならなかったのです。

そこでファーガスの息子フィアハが一同の保護をし、エヴァンの原に着きました。するとそこには、ファーンマグの王、イーガン・マクダルハクトが待ち受けていました。兄弟たちを殺す役目を引き受けていたのでした。

イーガンが、部下を従えて野原を進んで来ますと、フィアハがノイシュを守ってその前に

立ちました。イーガンの大槍（おおやり）はフィアハの体を突きぬけ、さらにノイシュの体を貫き通しました。これをきっかけに野原にはすさまじい殺し合いの場面がくりひろげられました。ディアドラは後ろ手にしばられて、王のところに連れていかれました。

『トィンの伝説』の中では、このようにノイシュはエヴァンの原で、すぐにイーガンの槍に突かれて死んでしまうのですが、ディアドラの伝説に関するほかの本を見ますと、ノイシュが木の葉の数ほどの敵を倒し、勇敢に戦う場面がさまざまに描かれています。そして三兄弟の最期も、ドゥルイド僧のかけた魔法で泥沼に落ちて捕えられることになっていたり、コノール王の謀略で武器を捨てたところを捕えられ、殺される話もあります。そして三兄弟が海神マナナーン・マクリールから授けられた剣で、同時に首を切り落とされることになっている伝説もあります。戦いの場面は人々の想像をさまざまにかきたて、次々と場面の描写が細かくなっていったのでしょうし、また勇ましくりりしいウシュナハ三兄弟の悲しい最期を、いろいろ美しくかざりたかったのでしょう。

このエヴァンの原で、激しい戦いがくりひろげられ、槍の突き傷や刀の切り傷を負わぬ者がなく、またたくまにアルスター戦士の三〇〇名が命を落とし、女たちまで殺され、エヴァンの里は灰になったといわれています。ファーガスもかけつけて戦ったあと、コノートに脱

出するのですが、彼に同行した難民の数は三〇〇〇人にのぼり、一六年にわたってアルスターには、人々の泣く声が絶えなかったと伝えられています。

その原因となった美しいディアドラは、一年のあいだはコノール王のとらわれ人となって暮らしていましたが、その間、一度も笑顔をみせたことはなく、食べず眠らず、いつも顔をひざに埋めていました。そしてノイシュや兄弟たちと楽しく暮らした昔の日々を思い出し、悲しく歌うだけでした。

あるときコノール王がたずねました。

「この世でおまえが一ばんきらいなものはなにかな?」

ディアドラは、そくざに答えました。

「あなたです。それからイーガンです」

「そうか、それではこれから一年のあいだ、イーガンにおまえをくれてやろう」

ディアドラは王と、愛するノイシュを殺したイーガンといっしょに馬車にのせられました。コノール王はそれをじっと地面を見つめたまま、ディアドラは一度も顔をあげませんでした。コノール王はそれを見ながら、こうあざけったのです。

「こうしてわしとイーガンにはさまれたおまえは、二頭の牡羊にはさまれた牝羊そっくり

だ」

このことばを聞くと、ディアドラはすっくと立ちあがり、馬車から身をおどらせると、岩に頭をうちつけて生命をたってしまったのでした。

ディアドラが葬られた墓からは、一本のイチイの木が生えました。するとノイシュの墓からもイチイの木が生えました。二本のイチイの木は同じように大きく育ってゆき、いつのまにかアーマの教会の屋根の上でおたがいの枝をからませ、しっかりと結びついて、どうしても引き離すことができなくなりました。

Ⅳ　フィアナ神話

フィンとフィアナ騎士団

英雄ク・ホリンと「赤枝の戦士団」が活躍してから約三〇〇年のち、コーマック・マックアート王が統治していた時代になりますと、フィン・マクールとその子オシーン、孫のオスカーたちの騎士団を中心とした、さまざまな物語が展開していきます。騎士団は「フィアナ」と呼ばれます。職業的な騎士の集まりで、ローマの軍団（リジョン）に似た組織を持ち、「赤枝の戦士団」も同じようですが、外敵を防いだり、他の地方のハイ・キングと戦ったりするために、王に雇われている、いわば職業軍人団でした。戦いのないときには狩りをしたり、魚を捕ったり、戦いの訓練をしたりしていたようですが、騎士たちが草を刈り石をつみ、火をたいて野営をし宴会をしたり、冬の食料を作るのに肉を焼いた場所という「フィアナの炉端」というのが、各地方に残っています。

フィンが首領となったときに一ばん栄え、フィアナ・フィンとも呼ばれましたが、ク・ホリンのように御者に引かせた戦車の上では戦わず、ひとりひとり馬に乗った騎士になります。アーサー王の時代のような共通した騎士道はまだないのですが、自分に課した誓約(ゲッシュ)を守って、王への忠誠、仲間への友情と礼儀は正しかったようです。一二冊の詩書に精通していて、自分でも詩を作れるという資格も要求されていました。なによりフィアナの組織に入るための試験は厳しいものでした。それを見てみますと、まず、㈠地面に掘られた穴に膝をたてる(半身は土に埋まるかっこうになる)。その姿勢のまま榛(はしばみ)の棒と楯を持って、九人の騎士が、九つの畝(うね)の向こうから、いっせいに投げる槍を防ぐこと。㈡一本の木の長さほど後から追ってくる武装した騎士に、追いつかれたり傷つけられたりしないよう森の中を逃げる。もし結んでいた髪のひももとけず、森の枝も折らず、逃げのびれば及第であるが、最後に武器を持っている手がふるえていたりしても落第。㈢自分の額の高さの枝を跳び越えたり、膝の高さに身をかがめて坂をかけぬけること。また走っている最中に足にささったトゲを、速度をゆるめずぬきとること――こうした陸上選手のような技術の資格を要求され、及第してやっと騎士団のひとりになれるのでした。

騎士のひとりキィルータが、何百年もたって聖パトリックにこの世に呼びもどされ、フィアナの組織が繁栄した原因はなんですか、とたずねられたとき、

「すべての者の心に真実があったから、腕には勇猛があったから、口にしたことは必ず実行したから」

と答えたということばは、この騎士団の精神をよく語っているようです。

ク・ホリンも守り、フィンも守ることになる誓約（ゲッシュ）（複数はゲッサ）は、この時代の騎士たちのいわば自分に誓って課した禁制や騎士の厳守すべき誓いのようです。「ゲッシュはケルトの騎士たちに特有な繋縛（けいばく）であり、呪符であり、禁制であり、禁厭であり、不思議な力を持つ差し止めである。もしこれに違反すれば、不幸を招きついには死ぬようなこともある」と辞書にあります。身分の高い王、領主、戦士たちは、自分自身の誓約（ゲッシュ）を持ち、それを神聖な義務として服従し守るのですが、それを犯せば、運命を狂わせ、生命（いのち）にもかかわります。呪文や予言や迷信に近いものもあるようです。ク・ホリンは「犬の肉を食べてはいけない」というのが誓約（ゲッシュ）ですが、最後には死ぬ前に魔女に食べさせられますし、ディルムッドは「猪を狩ってはいけない」という誓約（ゲッシュ）を破って、殺されます。もっともディルムッドは「婦人からの保護の依頼を拒絶してはいけない」という誓約（ゲッシュ）をも持っていたため、グラーニャからのかけ落ちの誘いをことわれず、悲劇が起こったのでした。コナリー・モアの誓約（ゲッサ）は「三匹の赤い馬について行ってはいけない」、「鳥をうってはいけない」というのであり、ファーガスのは「宴会の招待をことわってはいけない」というのでした（これを敵に利用され、ウシュナハ

の兄弟は悲運におちいったのでした）。また「ターラを右回りしてはいけない」、「九日目の夜に家から外へ出てはいけない」とか、いろいろな誓約（ゲッシュ）を各自が持っていたようです。しかし女性がしてもらいたいことをすぐ誓約（ゲッシュ）として相手に課すのは、なにか我を通そうとするインスタント・ゲッシュのようですが、ディアドラもグラーニャも、誓約（ゲッシュ）だといってむりなことを恋人にやらせているようにも思えてきます。しかしその人特有の誓約（ゲッシュ）というものをどうやって知るのか、またどうやって決めるのかは解らず、なにかドゥルイドの教義が背後にあるような不思議な感じがしてきます。

ク・ホリンを中心とする「赤枝の戦士団」の物語が、大らかで素朴であるのに比べますと、フィンやオシーンの神話群は、繊細で美しくロマンの香りが濃くなってくるようです。英雄のいさおしや勇ましい死を讃えるよりは、愛や離別、戦いや自然を中心に、神秘的な夢と幻想の世界が広がっています。フィンが銀の腕のヌァダの曾孫となっているように、ダーナ神族とは絶えず交渉があって、オィングスは騎士たちを助けに出て来ますし、妖精の王となっているダーナ神が、地上に出て来ては騎士の助けを求めたりしています。騎士たちはたのまれて妖精と戦ったり、怪物や巨人と戦ったりしますし、騎士にも魔法の槍や魔剣があり、魔法の馬も魔法の船も自在に使っています。英雄は、この地上の世界と神々の世界と妖精の世界とを自在に行き来して活躍するのです。舞台はク・ホリンのアルスターやコノートから、

南のレインスター、ミドランドへと移り、やわらかで変化に富む森林や野山に、フィアナ・フィンの騎士たちの馬のひづめの音が響きわたるのです。

フィンと知恵の鮭

フィンの母親はヌァダの孫娘マーナで、父親はバスク家のクール（《空》という意味で、ゲールの神カムラスと同義）でした。母のマーナは、夫が敵対しているモーナ家に殺されますと、スリーヴ・ブルームの森に隠れてひそかに男の子を産み、ディムナと名づけました。敵に殺されるのを恐れて、ふたりの老婆にその子の養育をたのみますと、チリイの王と結婚したのでした。

ディムナは金髪で肌が白く、美しかったのでフィン（《美しい》、《白い》という意味）と呼ばれ、自分でもディムナ・フィンと名乗るようになりました。球技が上手で、泳ぎも走ることも狩りも上手な勇気のある強い若者となりました。あるとき、ボイン河の堤の「フェックの溜り」のそばに住んでいるドゥルイド僧フィネガスのところへ行き、知識を与えてもらう

ため弟子になりました。フィネガスは七年のあいだ、知恵の実をつけた榛が実を落とす、フェックの溜りを探し、そこに住む鮭を捕えようとしていました。「知恵の鮭」といわれるこの鮭を食べれば、世界のあらゆる知識を得ることができるのでした。フィネガスはこの鮭をフィンと呼んでいました。

ある日のこと、フィネガスはやっとこの鮭を捕えることができ、フィンに渡しながら、料理するようにいいつけ、しかし少したりとも食べてはいけないと注意しました。料理した鮭を持ってきたフィンの顔が、すっかり変わっているのに驚いたフィネガスは、鮭を食べたかと聞きました。

「いいえ、食べません。ただ鮭を焼いているとき、火が燃えあがって、親指にやけどをしましたので、指を口の中に入れただけです」

こういうフィンの答えを聞いたフィネガスは、

「おまえの名まえはたしかディムナだったが、そのほかの名まえはないか？」

と聞きました。

「ええ、フィンといわれています」

「それでじゅうぶんだ。この鮭はおまえが食べていい。予言は成就されたのだ！　おまえはいまこそ、聖なる知恵の人となるのだ！　あらゆる知識を、おまえは自分のものにできたの

だ」

フィンはこのとき以来、なにか物事を考えねばならぬときになると、親指を口に入れさえすれば、よい知恵が浮かび、よい判断が下せたのでした。美しさと勇気の上に賢さもフィンにはつけ加わったのです。フィンは父クールが持っていた地位を、再び自分も手に入れたいと思い、大胆にもひとりでターラの王の集まりへ出かけて行ったのでした。

王は見なれぬ者が騎士の間にいるのに気づくと名まえをたずねました。フィンは父が昔していたように、自分も王に仕え忠誠をつくしたいと悪びれずに述べましたので、王はフィンの勇気とりっぱな態度に感心して、騎士の地位を彼に与えました。まもなく次のようなことが起こったのです。

恐ろしい妖怪が毎夜ターラに現れ、火を吹きかけては町を焼き、人々を殺すのでした。怪物は不思議な竪琴を奏で、人々を眠りに誘いこんでは、こうした災いをしかけていたので、人々は防ぎようがありませんでした。

「王よ、もしわたしが、その怪物を退治しましたなら、父がついていたフィアナの首領の地位を、わたしにくださいますでしょうか」

フィンのこうしたたのみを王は許しましたので、怪物退治に出かけることになりました。

幸いなことに、父クールの従者が、魔の槍を持っており、それをフィンに貸してくれまし

た。アラビアの金で作られ、穂の先は青銅でできており、その穂先を額に当てれば、全身には力があふれ、好戦欲がわいてくる不思議な槍でした。

やがて夜になり、ターラの平原いちめんにたれこめた霧のなかから、不思議な竪琴の調べが響いて来ると思った瞬間、一つの影が近づいて来ました。フィンは魔の槍を額に当て、竪琴の魔力を払いのけました。フィンが平然としているのを見た怪物は、逃げようとしましたが、フィンはすばやく追いかけると、魔の槍をかざして妖怪の首をはね、ターラへともどって来ました。

約束どおり、王はフィンを、フィアナの首領にすることにし、王への忠誠を誓わせました。フィンはその勇気と賢さと誠実さで、男性には広い心で接し、女性にはやさしい心を示し、すべての人々に寛大で温かい心をむけるよい首領となり、フィアナ騎士団はフィンのときにによりよく組織され、栄えたのでした。

フィンと妖精サヴァ

ある日フィンが騎士たちと狩りから帰る途中、とつぜん、一匹の子鹿が道へ走り出ました。人も猟犬も、この美しい子鹿を追って、森の奥まで行き、フィンだけが残されました。そばには忠実な二匹の猟犬ブランとスコローンだけがいました。この二匹は、じつはフィンの母の妹の子どもたちでした。フィンの母マーナの妹チレンには、ウランという夫がありましたが、妖精がウランに恋をし、その思いをとげるために、妻のチレンを魔術で犬に変えてしまったのです。この二匹はチレンの産んだ子どもたちだったのです。追われていた子鹿は、谷間で逃げるのをやめ、二匹のブランとスコローンは、その子鹿のそばに行くと、仲よくたわむれはじめました。こうして子鹿と猟犬とは、いっしょに館へ帰って来たのでした。

その夜、フィンがふと気づきますと、ベッドのそばに美しい女の人が立っていました。そ

してしずかに口を開きました。
「わたしはサヴァといいます。狩りの帰り道にあなたの前に現れた子鹿です」
フィンは驚きましたが、女の人はこう続けました。
「わたしは妖精の求愛を受け入れませんでしたので、魔術で鹿にされ、三年のあいだ森をさ迷っておりました。妖精のひとりがわたしをあわれんで、アレンにあるフィンの屋敷に入れば、魔法が解けるようにしてくれたのです。ブランとスコローンの猟犬には、人間の性質がありますので、わたしはあの二匹に捕えられ、あなたの館へ入って来ようとしたのです」
フィンはその女の人の身の上を聞いて同情し、また美しさにもひかれ、いっしょに館に住むようにすすめて、ふたりは結婚しました。おたがいに深く愛し合い、楽しい喜びの日々が続いていましたが、ある日北方の敵が攻めてくるという知らせがあり、フィンは出陣することになりました。フィンは七日のあいだ、部下の騎士たちを指揮して勇敢に戦い、敵を追い返して、やっと八日目に館へ、愛するサヴァのところへと帰ってきました。
フィンは自分の凱旋を喜び迎えてくれる愛するサヴァの姿がないのを不思議に思い、また召使いたちの表情に暗いものが見えるので、不吉な予感を覚え、家来のひとりにわけをたずねますと、次のような答えでした。
「あなたさまがお出かけになりましてから、奥方さまは毎日、おさびしそうにお屋敷の窓辺

から下の道をながめては、お帰りをお待ちでございました。三日目でございましょうか。あなたさまがお帰りになったのです。はっきりとお姿も、ブランやスコローンのほえる声も、騎士の方々の声まで、わたしたちにも聞こえていたのでございます。だれが幻だなぞと疑いましょう。奥方さまは大そうお喜びで、門までかけ出しておいででした。わたくしどもには、幻影だということがそのときにはわかっておりましたので、何度もお止め申したのですが、わたくしどもの声はお耳に入らぬように、あなたさまの方へと走っておいででした。

　ところが、とつぜん、奥方さまは悲しい叫び声をお立てになったと思うと、門のところで立ちどまりました。すると、幻のなかのあなたさまが榛（はしばみ）の杖で、奥方さまを打たれたのです。とたんに、サヴァさまのお姿は、子鹿になってしまったではありませんか。幻のなかのあなたさまや猟犬どもは、門から屋敷へ逃げこもうとする子鹿を捕えると、そのままどこかへ行ってしまったのでございます。

　わたしどもも武器をとって、その妖しい幻の一行を追いかけたのでございますが、馬のかけ去る音と、猟犬どものほえる声のほか何も見えず、どうにも戦いようもなく、そうしますうちに、幻も音もサヴァさまも、みなかき消えてしまったのでございます。わたくしどもにはどうすることもできない、一瞬の出来事でございました」

　これを聞くとフィンは何もいわず、部屋に閉じこもってしまいました。その日から七年の

あいだ、フィンは毎日、ブランとスコローンの猟犬だけを連れ、サヴァのゆくえを探したのでしたが見つけられず、探すことはやめましたが、サヴァのことは忘れることができませんでした。

ある日のこと、騎士たちとスライゴーのベン・バルベンの森で狩りをしていたとき、猟犬があまりにほえるので、その方へ行ってみました。すると、大きな木の下に長い髪をした裸の男の子がおり、それを守るかのように、ブランとスコローンが、ほかの猟犬たちを近寄せまいとほえたてていたのでした。男の子は恐がりもせず、整った美しい顔をあげ、フィンや騎士たちに、かえってにこやかな笑顔を見せるのでした。

フィンはその子の顔をじっと見ていましたが、七歳ぐらいのその男の子を、館へ連れ帰りました。口がきけるようになってから語ったその子の話は、連れ去られたサヴァが、森の中で妖精の男と争いながら、苦心してその子を育てた物語のように、フィンには思われました。

「たくさんの緑に囲まれた崖のそびえる谷間に、深い洞穴があって、その中で楽しく暮らしていたのです。育ててくれたのはやさしい農婦でしたが、ときどきやってくる恐い男の人が、ある日、榛の杖でわたしの母代わりの女の人をつよく打ちますと、ふたりはどこかへ行ってしまいました。わたしはそのあとを追おうとしたのですが、手足が動かなくなり、そのまま何もわからなくなって、気がついてみましたら、山の木の下にいたのです」

フィンには、子鹿のサヴァの姿が浮かんでいました。サヴァの子、自分の子に違いないと思い、子どもにオシーン（子鹿）という名を与えました。フィンは、このオシーンとファーガスというふたりの息子を持つことになります。ファーガスは詩人であり、弁舌に巧みで外交の役も務めるほどでした。オシーンは勇敢でりりしい騎士になったばかりでなく、詩人としてもすぐれ、フィアナ騎士団の物語も、多くはオシーンの作と伝えられており、後に聖パトリックの前に姿を現したオシーンが語ったものともいわれています。スコットランドの詩人マクファーソンが、十八世紀に「オシアン物語」を書き、オシアンの名で世界に知られるようになりました。

常若(チル・ナ・ノグ)の国へ行ったオシーン

　オシーンが常若(チル・ナ・ノグ)の国の王女ニァヴに連れていかれ、楽しくいっしょに三年暮らして帰りますと、すでに三〇〇年がたっており、白馬から落ちて足が地に着いたとたん、白髪(しらが)の老人に変わり果てる――竜宮へ行った浦島太郎の話と似た筋をもっているこのオシーンの話には、さまざまな変型(ヴァリエーション)があって、広く伝わっています。ニァヴが白馬に乗り美しい姿で現れるものもありますし、豚の顔をもった女の姿で現れる話もあります。豚の顔になっているのは、父である常若(チル・ナ・ノグ)の国の王が、自分の娘の婿に王座を奪われるという予言を聞いて、だれとも結婚できぬよう豚の顔に変えてしまったのです。ただ、フィンの子オシーンと結ばれればその魔法は解けるという条件がついており、フィンが承知しましたので、魔法は解け美しい姿にもどることになります。

また古い伝承物語では、老人に変わったオシーンは、その場で灰になってくずれ去ってしまったり、小さく縮んで煙か霧のようにかき消えてしまったりしていますが、後の時代の話では、もう一度、常若の国(チル・ナ・ノグ)へ帰って、金髪のニァヴと楽しくいまでも暮らしていることになっています。またオシーンが三〇〇年たって、老人になって生きている間に、聖パトリックに会い、自分の口からニァヴと行った常若の国(チル・ナ・ノグ)と、帰って来たときの出来事を語ったという話も伝わっています。オシーン自らの口から、その体験を聞くことにしましょう。

「ある霧ぶかい朝のこと、わたしたちフィアナの騎士は、レイン湖の堤に近い林の中で狩りをしていました。空気にはかぐわしい花の匂いがみち、小鳥が枝にさえずっていました。まもなく鹿を狩り出し、われわれは叫び声をあげながら、しげみの中を追いかけて行きました。するととつぜん、西の方に馬に乗った人かげが現れましたが、よく見ますと、白い馬に乗った乙女でした。フィンも騎士たちもみな、狩りを忘れ、驚いて、この世のものとは思えぬほど美しいその乙女に見とれてしまったのです。細い金の王冠が頭にひかっていました。金の星がひかる茶色の絹のマントは、金のブローチでとめてあり、地上をおおうほどすそを長く引いていました。肩には金髪が波うち、目は青く澄み、その白い手で白馬の手綱をにぎって、レイン湖の白鳥のように優雅に馬の背に座っていました。白馬にもマントがきせられ、

銀のあぶみがついていました。

父フィンはていねいにその女の人に近づき、名まえと来た用向きとをたずねますと、その乙女はしずかに口を開きこういいました。

『フィアナの気高き王よ、わたしはずっと遠い西の海のかなたにある国から、はるばるやって来たのです。わたしは常若（チル・ナ・ノグ）の国の王の娘、金髪のニァヴです。わたしはあなたの息子、勇敢で気高く聡明なオシーンに、愛を捧げようと、こうして長い旅を続け、迎えにやって来たのです』

わたしはこのことばを聞き、その美しい乙女のつややかな金髪を見て、一目で心を奪われてしまいました。わたしはそばに寄りその白く小さな手をとって、輝く星のようにまばゆい美しさをほめ、あなたのほかにわたしの妻になる人はこの世にいないといいました。

『それなら、わたしの白馬にいっしょに乗り、常若（チル・ナ・ノグ）の国へ行くことを、あなたの誓約（ゲッシュ）にします』

乙女はこういってから、これから行く常若（チル・ナ・ノグ）の国がどんなに楽しく美しくすばらしい国であるかを歌うように語ってくれたのです。

『その国は若さの国、太陽のひかり輝く喜びと楽しさの国、金銀や宝石にあふれ、蜂蜜と酒もたえることなく、木々には果実がたわわに稔り、緑の枝には花々が咲き乱れている国です。

その国に住む人は苦しみも知らず、病気も、老いも、死も知らず、楽しい宴（うたげ）が続き、美しい音楽がたえず聞こえます。何百という数知れぬ絹やサティンの服、何百というすばらしい剣。あなたが呼べば、何百という勇士がおともとしてはべるでしょう。あなたがお望みなら、たくさんの竪琴が美しい調べを奏でるでしょう。あなたは常若（とこわか）の国の王冠をかぶり、つきせぬ喜びと、色あせぬ若さと雄々しさにあふれた国を治めるのです、金髪のニァヴがあなたの妻になって。さあいっしょに、常若（チル・ナ・ノグ）の国へまいりましょう』

　わたしは喜んであなたといっしょにまいります、世界の多くの女性から妻に選べるのは、あなたをおいてはおりません、と答えますと、フィンとフィアナの仲間たちは、悲しみの叫び声を三度あげました。この世でもう二度と会えぬと嘆く父フィンに、すぐにまた帰ってくるとわたしは約束し、仲間にも別れを告げました。そしてニァヴの後ろに乗りますと、白馬は鈴の音を合図に、すばやく西の方角を目ざしてかけ去り、海べまで来ました。

　白馬は金のひづめが水にふれると、三度いななき、みるまに海の中へ突き進むと、三月の雲より速く波を越え、わたしたちふたりを乗せ海の上をかけ続けました。見るまに島影は消え、ただ波があり、しぶきのような霧があるだけでした。その霧のなかにはいろいろな珍しくすばらしい光景がくりひろげられていきました——。島々や町、ライムストンの白い塔、輝く王宮。あるときは角のない子鹿が現れたかと思うと、赤い耳の白い猟犬がそれを追いか

けていきました。あるときには茶色の馬に乗った乙女が、手に黄金のりんごを持って現れたかと思うと、そのあとから黄色いマントをひるがえし、剣を手に白馬に乗った騎士が走っていきました。こうした不思議な光景はいったい何なのかとたずねますと、ここのことは聞かないで、これから行く国でのできごととは比べものにならないからという答えでした。

やがて海の逆巻く波の上に、輝く美しい宮殿が現れました。それはフォモール族の王宮で、妖精の女王が連れてこられ幽閉されているということでした。しかしフォモールの巨人に、一騎討ちをして勝たなければ妻にならないという誓約（ゲッシュ）を与えているということを聞き、わたしは巨人と一騎討ちをして勝ち、妖精の女王を救ったのです。広間でのすばらしいもてなしのあとで、ニァヴとわたしは白馬に乗るとまた海原（うなばら）を走っていきました。

嵐の雲が切れ、陽の光が射したかなたに、緑の野が広がり花々が咲き、青い丘や輝く湖や滝のある美しい国が見え、金や緑、紅、黄色、色とりどりの宝石でかざられたすばらしい建物が現れました。常若（とこわか）の国の宮殿でした。豪華な服装の高貴な人々を従え、金とダイヤモンドの王冠をいただいた王が、美しい王妃と迎えに出てくれ、みなにわたしを紹介してくれました。

『これに見えられておりますのは、フィンのご子息、オシーン殿、わが娘ニァヴがエリンの国より海原を越え、ここまでお連れ申した。オシーン殿、ようこそお越しくだされた。いつ

までもこの若さの国にご滞在くだされ。わが娘、やさしい金髪のニァヴが、あなたのよき妻となりましょう』

何日もすばらしい祝宴の日が続き、ニァヴとの楽しい日々は夢のように過ぎ、三年の月日はまたたくまでした。そのときになりわたしは、父や友人にもう一度会いたいと思うようになって、ニァヴにエリンに行かせてほしいとたのみました。

『わたしにはあなたの願いを退けることはできません。けれどわたしの心は悲しみでいっぱいです。もうあなたにお会いできないかもしれませんから』

そんなことばをいうニァヴをおかしいと思いながらも、すぐにもどるからと約束し、わたしの心は、父や友人やエリンの思い出でいっぱいになっていました。

『エリンはもうあなたがお出かけになったときのようではないのです。フィンもフィアナの騎士もとうの昔に去り、いまでは聖人や僧侶であふれているのです。どうかわたしのいうことをよく聞いてくださいまし。この白馬が道をよく知っています。けれど、白馬から下りてはいけません。白馬から下りて、あなたの足が土にふれたなら、もう二度とわたしのところには帰れないのです。どうかこのことだけは忘れないでくださいまし』

わたしは、けっして白馬から下りないと約束し、ニァヴの涙を見て心は悲しみに重くなりましたが、故郷へ帰る喜びのほうが強かったのでした。白馬はわたしを乗せると、常若の国

をあとに、一路、海原をかけ続け、緑のエリン島の西の海岸に着きました。なつかしい山や野を走りながら、なにか自然が昔とまったく変わってしまっているのに気づきました。丘も湖もみんな小さく縮んでしまったように思えたのです。フィアナの人影も、その友人の家も見あたりません。ニァヴのいったことが、ほんとうだったのかと、恐ろしい気分におそわれました。

そのとき、向こうから小さい人々が小さな馬に乗ってやって来たのです。わたしを見ると、大きな体に驚き、不思議そうな興味ぶかげなようすで、わたしの着ている鎧や兜、そして金の柄のついた剣などを見ていました。わたしはその人たちに、フィンとその騎士たちのことを知っているかどうかたずねました。

『ずっと昔に、エリンのフィアナという騎士団の首領をしていなさった、フィンという英雄のことは聞いて知ってますよ。いろいろな本に書いてありますからね。よく覚えてはいませんが、なんでも、その息子さんのオシーンという方は、若い妖精の娘と常若の国へ行ってしまったということですよ。父親や友人が悲しんで探しましたが、とうとう帰って来なかったということです』

それを聞いたときの驚きと悲しみは、忘れることができません。驚いて見ている人々を残し、わたしはまっすぐに、父の館のあったアレンの丘めざして走りつづけました。森をぬけ

平野に来て、なつかしい高い塔や白い壁が建っているはず、と思ってながめた丘には、さびしくくずれた廃墟と、雑草やかん木がしげっているだけでした。わたしは悲しみにうちひしがれながらも、なつかしい昔の人々の顔を求めて、あちこち、夢中になって馬をかけさせましたが、出会うのはわたしを驚いてながめている見知らぬ小さな人たちだけでした。
ちょうどアズモルの谷にさしかかったとき、そこは昔フィアナの仲間と狩りをしていたなつかしいところでしたが、大勢の小さい人々が、大きな磐石を動かそうと、必死になっているのに出会ったのです。わたしの息子オスカーが生きていたなら、右手でひょいと持ちあげ、ふうふういっている人たちの頭ごしに投げるところですが、その小さい連中は、その石の下敷きになれば、何人もつぶされてしまうようでした。
わたしは馬の上から身をかがめますと、片手でその石をつかみ、少し遠くへよけて、下敷きになっている小さい人を救ってやったのでした。そのとたんに、力のかかっていた金のアブミが切れ、わたしは馬から落ちると両足が地面についてしまったのです。すると、白馬は高くいななないたと見るまに、三月の風より速く、かけ去ってしまい、わたしはひとり残されました。
次の瞬間、恐ろしい変化がわたしに起こったのです。目はかすんで見えなくなり、若さが消えてゆき、全身の手足から力がぬけてゆくように感じて、地面に倒れてしまいました。そ

してこのような目の見えぬ、弱々しい、しわくちゃの老人になってしまったのです。あの白い馬は、もう二度とわたしの前には現れてくれませんでした。わたしの視力も、若さも、力も、もどりません。このようなありさまで、わたしはやさしかった金髪の妻ニァヴのことを思ったり、父フィンや昔の仲間たちのことをいつもしのんでいるのです」

聖パトリックに語ったオシーンの常若の国（チル・ナ・ノグ）へ行った話は、これで終わっています。

妖精にたのまれた戦い

夏の初めのある日のことでした。フィンはアレンの丘にある館にエリンの主だった人を招待して宴を催し、それがすむと、野や谷や森に分け入り狩りをすることになりました。フィアナの騎士たちは、一年を、大きく二つの部分に分けていました。前半は、ベルティナ（五月一日）からサウィン（十一月一日）までで、この期間は猟犬を連れて毎日狩りをし、後半はサウィンからベルティナまでで、この間は屋敷や公共の建物（ベタ）に滞在して、宴会や集会を開いたり、客を招いたり出かけたりして過ごします。もちろん戦いのないときのことです。

みなは狩りのしたくをし、猟犬を連れ、エヴリンの山やレイン湖のほとりや、リマリック近くまで広い範囲を馬でかけ、狩りを楽しみました。コルキィラの丘まで来たとき、なにか

谷から美しい音楽や人の声が聞こえるように思われ、ダーナ神族がドゥルイドの呪術を使って見ているのかもしれない、これ以上狩りが続けられるかどうかようすを見ようということになり、ひとりが探索に出かけ、フィンと他の者たちは、木かげでチェスをはじめました。

そのとき、丘に向かってひとりの奇妙な巨人(フォモール)が馬を引いてやって来たのです。大きな体はふくれあがっているように見え、そこから骨ばかりの手足が出ており、両足はがににはいちめん毛が生えていて、なんともいえぬ醜い大男でした。いくさに出かけるようなないでたちをしているのですが、鎧や武器はさびつき、色のあせてうす汚れた楯を背中に背負い、長く重そうな剣を左の腰にひきずるようにさげ、手には、これもまたさびついて長いあいだ使ったこともないような槍を持っていました。そして右手には鉄の棒をひきずっているのですが、重いため、歩いたあとには長い溝ができていました。

引いている馬もぶかっこうで、主人の大男より大きく見える体ぜんたいは、もじゃもじゃの毛がいちめんに生えているのですが、あばら骨が一本一本浮いて見え、足は曲がり、長く大きな頭を前へたらし、大男にむち打たれながら、少しずつ動いてくるのです。鉄棒で男が馬の背中をたたくたびに、雷のような音があたりに響きました。なんとも奇妙な大男の騎士でした。

巨人は丘を登って来ますと、驚きながら警戒して立って見ているフィンに礼儀にかなうあいさつをし、下僕として使ってほしいとたのんだのです。そして名まえはギラ・ダッカー（《がんこ者》の意）だと名乗りました。森からふいに現れた大男を、奇妙だと思いましたが、自分に仕えたいという者をことわってはいけないというのがフィンの誓約（ゲッサ）の一つでもありましたので、ギラ・ダッカーを一年の契約で召しかかえることにしました。

フィアナの人々は、このおかしな下僕になじめず、いろいろな仕事をいいつけては、働かせたり、からかったりしていましたが、あるとき、おもしろ半分に、大男のやせ馬を動かそうとしましたが、たたいてもけっても、だれがやってみても、石のようにがんとして動きません。そこで大男と同じ重みを加えれば動くだろうと、騎士のコナンがいいましたので、次々とみなが馬の背によじ登りはじめ、一四人になっても、馬はじっとしたままでした。騎士たちがわいわいいいながら、あばら骨の出ているやせ馬に、ハエがたかるように乗ってさわいでいるのを見て、ギラ・ダッカーはぶつぶつ怒りはじめ、愛馬をいじめるこの屋敷からひまをとるといい、仕事を放り出しますと、不満げなようすで、よろよろ門を出て行ったと思うと、小山を越えて行きました。そこまでくると、急にシャツをたくしあげたかと見るまに、一目散に西の方を目ざしてかけ出したのです。ケリーの海岸まで三月の風より速く走って行ったのです。馬は主人のギラ・ダッカーが西の方へかけ出したのを見ると、急に頭をも

たげました。それまでは、一四人を乗せたままどんなことをしてもじっと耳をたれて、てこでも動かなかったのでした。

しかしこのとき、やせ馬は、すばらしい速さで、主人のあとを追って、かけ出したのです。一四人の騎士を背中に乗せたまま。それを見ていたフィンの館の者たちは、一四人のあわてようがおかしいおもしろいと、はじめ笑って見ていましたが、背中の一四人は急に馬にかけ出され、危険にさらされて、気が気ではありませんでした。

ギラ・ダッカーは、ケリーの海岸まで来ますと急に海の中に飛びこみました。後を追っていたやせ馬も、つづいて海にかけこんだのです、一四人を背中にのせたまま。しかもやっと追いついたひとりが馬のしっぽにしがみつきましたが、その人も足して一五人が、海の中へ沈むと西の国へと姿を消してしまったのです。

フィンたちは消えた一五人を探すため、フィアナの騎士たちと航海に出かけました。幾日かののち、奇妙な島にたどりつきました。けわしい岩が壁のようにそそり立っておりましたので、身軽なディルムッドが、その岩壁を登って、島を探索してくるよう命じられました。ディルムッドは、海神マナナーンと妖精の丘のオィングスに育てられたので、特別の能力があったためでもありました。ディルムッドが岩壁を越え向こう側に着いてみますと、そこには世にも美しい風景が広がっていたのです。

花々は咲き乱れ、小鳥はさえずり、清い流れがわき、木々が繁っていました。しかし人影は見あたりません。そこでディルムッドは、下草を分け枝をはらいながら、森の奥へと入っていきました。するとある木かげに、泉を石で囲った井戸があり、たえず水晶のような水がわき、小さな流れになって草間を流れていました。ディルムッドは、岩を登り、のどが乾いていましたので、水を飲もうと泉に口をつけたところ、水の底から、重い鎧の響きや低い声が聞こえてくるように思いました。あたりを見てもだれもいませんでしたが、石の上に金とエナメルでかざられた美しい杯（さかずき）があるのに気づきました。

そこでディルムッドは、その杯で水をくみ、飲もうとして唇に持っていったところ、西の方の森から、武装した騎士が近づいて来ました。その目は怒りで赤く燃えていました。ディルムッドの弁明など耳に入らぬように、いきなり剣をぬき打ちかかって来ました。ディルムッドも楯をかまえ、森の中で一騎討ちが始まり、一日じゅう戦いましたが、勝負がつかぬうちに、日が暮れてしまいました。すると「井戸の騎士」は、急に泉に飛びこんだかと思うと、姿を消してしまったのです。

次の日も再び、井戸の騎士は現れると、ディルムッドに戦いをいどみ、夜になるとまた泉に飛びこんでしまうのでした。三日目のこと、同じように戦って夜になりました。が、井戸の騎士は、泉へ飛びこむときに、ディルムッドの体に両腕をまきつけると、泉のなかにいっし

ょに重なって落ちていったのでした。
はじめは真っ暗でしたが、かすかにぼんやりした明るさがあらわれました。ディルムッドの意識がはっきりして来るとともに、ちょうど光がさしてきて、見まわしますと、緑の草原に倒れていたことに気づきました。しばらくして高貴な身なりの男がやって来て、ディルムッドを助け起こし、大きな城へと案内しました。妖精の王はディルムッドを手厚くもてなし、妖精の他の種族との戦いのために、騎士たちの助太刀を必要としていることを話しました。
船で待っていたフィンや騎士たちは、ディルムッドがいつまでたってももどらないので、不安になり、二日目に島へ全員上陸したのでした。森をぬけて一行が進んで行きますと、深い洞穴の前に来ました。フィンたちは勇気を出して、その洞穴をつき進んで行きますと、緑の草原の広がる美しいところに出ました。ディルムッドが行ったと同じ妖精の国だったのです。まもなく、やせ馬の背に乗ったまま海へ沈んだ一五人の騎士たちも、この妖精の王宮にいることがわかったのでした。
そしてあの奇妙な大男の下僕、ギラ・ダッカーは、じつはダーナ神族のアヴァータという妖精の王だったのです。フィアナの騎士たちの助けを借りるために、姿を変え地上にやって来て、強い勇者たちを連れ去ったのでした。妖精の王はフィンに戦いの援助を願い、フィンはいうまでもなく、ディルムッドも、一五人の騎士も加勢を承知したのでした。

フィアナ・フィンのすばらしい働きによって、この国の妖精は勝利をおさめ、フィンの息子オシーンは、すばらしい手柄をたて、敵の王の息子の首を打ち落とし、王の娘タシャの愛を得たのです。
妖精王はフィンたちの働きに感謝し、お礼に何をさしあげたらよいかとたずねました。フィンはこう答えました。
「あなたは昔、ギラ・ダッカーとしてわたしのところで下僕として働いてくださった。こんどのわれわれの働きは、そのお返しです」
すると馬の背で運ばれる恐ろしい経験をしたコナンが、大きい声で打ち消しました。
「いや、だめですよ。やせ馬の骨だらけの背中にふりまわされながら、海を越えてこんなところまで連れて来られたんですよ。あのときの驚きと恐ろしさ。あんな目に会ったんですから、ただこのままではすまされませんよ」
妖精の王はたずねました。
「では、どうすればよろしいのですか？」
そこでコナンはこういったのです。
「なにがほしい、これをくれというのじゃないんです。ただあんな恥ずかしい目に会った名誉をつぐなってもらいたいだけなんです。それにはあなたの妖精国の貴族たちを一五人、あ

のやせこけた骨だらけの馬の背中に乗っけてください。そしてあなた妖精王みずから、馬のしっぽにつかまって、ここから逆に本土まで走らせるのです。そうすれば、われわれ一五人の気もすむでしょう」

それは名案だ、とフィンたちは喜び、妖精王はそうしましょうと約束したのでした。フィアナの騎士たちは無事に帰り、クノックニィに野営の場所を定めて、テントを張って住んでいました。そうしたある日のこと、丘のかなたから猛烈な速さで近づいて来るものがありました。先頭を走っているのは、ギラ・ダッカーで、あい変わらず醜いままで、その後にあのやせ馬が走って来ましたが、その背中には、一四人の妖精国の貴族たちがしがみついており、しっぽには妖精王アヴァータがつるさがっているではありませんか。騎士たち、とくにコナンは喜び、みなで大笑いとなりました。

やせ馬は前にフィアナの騎士を背に走り出した地点まで来て急に止まり、背中の一五人が下りはじめたとき、ギラ・ダッカーは手をあげて、馬が立っていた丘を指しました。フィアナの騎士たちがその方を見て、ふとふり返りますと、妖精の王の貴族たちの姿はもうありませんでした。そこでギラ・ダッカーはと見ますと、大男の姿もすでにかき消えており、それ以後二度とフィアナの騎士たちは、この奇妙な大男の騎士に会うことはありませんでした。

ディルムッドとグラーニャの恋

フィン・マクールの軍団の中で、戦いに強く、しかも美しく魅力ある騎士は、ディルムッド・オディナでした。その紅い頬にある小さなホクロを見れば、どんな乙女も心をときめかしてしまうのでした。ギリシア神話の愛と美の象徴である少年アドニスと似ているかもしれません。アドニスが猪に殺されたように、ディルムッドもまた猪によって死ぬことになるのです。けれども、ディルムッドを殺した猪には、次のような因縁がありました。

ディルムッドの父ドンは、息子ディルムッドをボイン河のほとりにある妖精の丘の王、オィングスにあずけ、養子として育ててくれるようたのみました。一方、ドンの妻は、オィングスの家来であるロクの子を産みましたので、ドンは怒りと嫉妬から妻とはうまくいっていませんでした。その不義の子がまだ小さいころ、広間でたわむれていた猟犬たちが暴れ出し

たので驚き、急いでそばにこしかけていたドンの膝の中に逃げこんだのです。ドンは、その子をはさんでいる両足に力を入れると、そのまま体を押しつぶしてしまいました。そうしてから、その死体をおもちゃにせよとばかり、まだ興奮してほえている猟犬たちの間に投げたのでした。

まもなく父親のロクは、わが子の無残な死体を見、死因をフィンから聞くと、ドゥルイドの杖で子どもの死体を打ちました。すると子どもの死体から、とつぜん一頭の猪がはね出したのです。その猪には耳もしっぽもありませんでした。猪は子どもの死体を見ながらこういったのです。

「ドンの息子、ディルムッド・オディナの生命を奪ってやる。きっとやると誓う」

こういったかと思うと、広間をかけ出し、スライゴーのベン・バルベンの森に入ってしまいました。時期が来るのを待とうとするようでした。

そのあいだにドンの息子ディルムッドは、オィングスのもとですばらしい青年に成長し、フィアナの軍団のすぐれた騎士となったのでした。

ある朝早く、フィンはひとりで緑の草の上に座っていました。息子のオシーンがどうしたのかたずねますと、妻を失ってから毎夜ゆっくり眠れないといいました。そこでオシーンや戦士たちは、フィンによい妻を見つけようということになりました。部下のひとりが、コー

マック・マックアート王の娘グラーニャが、フィンにふさわしいと報告しました。
そこでフィンはふたりの戦士をタ－ラにつかわし、コーマック王にグラーニャを花嫁に迎えたいと願いました。グラーニャが、父のコーマック王の義理の息子としてふさわしい方ならよいと返事をしましたので、婚約は整い、宴会のためにフィアナの騎士や貴族とともに、フィンはタ－ラの城にやって来ました。盛大な祝宴の席上に、きら星のごとくフィアナの騎士たちは並び、フィンは王の右手に座をしめました。グラーニャの前に座っていたドゥルイド僧で詩人のダラが、立ちあがると、彼女の先祖の勲をほめ讃える歌をうたいました。
グラーニャはドゥルイド僧に、なぜこんなにみなが集まっているのかとたずねました。あなたさまとフィン殿との結婚のためですといいますと、さらにグラーニャは聞くのでした。
「おかしいと思うわ。なぜフィンは、息子のオシーンとわたしを結婚させようとしないのかしら。わたしのお父さまより年をとっているフィンの妻になぞ、わたしはふさわしくはないのに」
グラーニャはフィアナの戦士たちを、ひとりひとり見ては名まえをたずねるのでした。
「あの人はなんていうのかしら？　オシーンさまの隣りにいる、黒い巻き毛の、紅い頬をした、ホクロのある方は？」
「あの歯のきれいなりりしい騎士殿は、乙女たちのあこがれの的の、ディルムッドさままで

す」

グラーニャは侍女を呼ぶと、金の杯を持ってくるよう命じました。その杯に飲みものを入れると、彼女からの祝杯として、フィンのところへ持っていかせました。フィンはそれを飲みますと、すぐに眠ってしまいました。睡眠薬がひそかに入れられていたのでした。杯は次々にまわされましたので、宴会に出席しているほとんどの人が、コーマック王もフィアナの戦士たちも、少数を除いてみな眠ってしまいました。

グラーニャは、ころ合いを見はからって席を立ちますと、オシーンとディルムッドの間に座り、まずオシーンにわたしの愛を受けてくれといいました。しかし、父フィンと婚約をした人の愛を受け入れることはできないといいましたので、グラーニャはディルムッドに向かって同じことをたのみました。同じような断りの返事が返ってきたのですが、グラーニャはさらにディルムッドにこういったのです。

「今夜、フィンやアイルランドの王が目をさます前に、この城からわたしを連れ出すことをあなたの誓約(ゲッシュ)とします」

そうしてからグラーニャは、昔ターラの野原でディルムッドが球技をしていたのを見た日から、忘れられなくなったということをいって、ディルムッドをくどいたのです。ディルムッドが帽子で隠しているホクロが、ボールを投げたときずれた帽子の下から見え、その魔の

魅力を持つホクロをグラーニャが見てしまったので心を奪われたのだともいわれています。そのホクロは「青春」の愛と美の印として、妖精がディルムッドにつけたものだったのです。ディルムッドはグラーニャにいわれたことをどうすべきか、オシーンや仲間にたずねますと、戦士は課された誓約（ゲッシュ）は守るべきだという答えでした。しかしディルムッドはフィンに背くことはできないという忠誠の心と、はげしい求愛との間に迷ったのでしたが、誓約（ゲッシュ）を破るべきでないという仲間の意見に従うことにしたのでした。

そこでディルムッドは、友人の戦士たちに別れを告げると、グラーニャを連れてひそかに城をぬけ出しました。けれどディルムッドは、グラーニャに、フィンのところへ帰るようたのんでみました。

「いいえ、わたしは帰らない。死があなたとわたしをひき離すまで、もうあなたとは離れません」

グラーニャの決心が固いことを知ったディルムッドは、

「おお！　グラーニャ、あなたの心がそんなにわたしを思ってくれるなら、もうしかたがない。どこまでもいっしょに行こう」

といい、シャノン河を越え、クランリカードの森をめざして、ふたりで逃げたのでした。そして森のなかに、七つの戸のある隠れ家を作りました。

フィンは、ディルムッドとグラーニャを追いました。息子オシーンや孫のオスカー、そのほかの戦士たちもいっしょでしたが、みなはふたりをかばっており、隠れ家の近くに来たとき、オシーンはそっと猟犬ブランを離しました。ブランはディルムッドを見つけると、その膝に顔をこすりつけて危険を知らせたのです。ディルムッドは、仲間たちの温かい心を感じました。

ボインの妖精の丘の王オィングスは、養子ディルムッドの身に危険がせまっているのを知ってかけつけましたが、ディルムッドはグラーニャだけを連れて逃げてくれるようたのみましたので、オィングスはマントを広げるとなかにグラーニャを包み、リマリックまで運んで行ってくれました。その間にフィンの追っ手たちは隠れ家を見つけ、まわりをとり囲みました。ディルムッドはドアの一つ一つをめぐり、だれが立っているのかたずねますと、六つまではなつかしい友人たちの声が返って来ました。しかし七つ目には答えはなく、フィン自身が立っていることがわかりました。そこでディルムッドは、ドアを飛び越えると、フィアナの騎士たちの頭の上を走るようにして、森をぬけ、グラーニャの後を追ったのでした。

そして再び、ディルムッドとグラーニャはシャノン河を越え、北をめざしクレア地方まで逃亡の旅をつづけました。河でとった鮭を料理して食べ、草の寝床で休んだのでしたが、追

っ手はそうした小屋の中に、料理していない生の肉や七匹の鮭を発見しました。これはディルムッドが、グラーニャと清い間柄であることを示す印だったのです。
しかしグラーニャには、ディルムッドのそうした忠誠心が気に入らず、自分の熱情に答えてほしいと思っていました。ちょうど湿地帯を通りかかったとき、泥がグラーニャに勢いよくかかりました。
「ディルムッド、あなたは戦いでは勇気がある人かもしれないけれど、この泥のほうがあなたより勇気があると思いますわ」
こういわれてディルムッドは、
「そうかもしれません。フィンのことを思ってわたしは、これまであなたから遠ざかっていたのです。ですが女の人から責めることばをいわれては、がまんできません」
ふたりは森へ入ると小屋を建て、鹿をとって料理しましたが、その夜ディルムッドは、肉を残さず料理して、ふたりは泉の水といっしょに食べてしまったのでした。
ディルムッドは一つ目巨人サーリー・ノーズマンから猟をする許可をもらっていましたが、魔法の木の実だけはとってはいけないといわれていました。この実は三つ食べただけで、どんな病気もすぐに治り、一〇〇歳の人が食べれば三〇歳の若さまでもどる不思議な力のある木の実でした。けれどグラーニャはこの木の実を食べたいといいだしたのです。ディルムッ

ドは巨人にまずたのんでみましたが、もちろん断られ、ディルムッドは力ずくで木の実をとらねばならず、戦ったすえ巨人を打ち負かしますと、二人は木の実をとるために木に登ると、その上で食べていました。

そのとき、フィンたち追っ手がこの木の下まで来て休み、まもなくフィンはオシーンとチェスをはじめました。フィンはオシーンを追いつめ、あと一手で勝つところまで来ました。それを木の上から見ていたディルムッドは、チェス盤の駒の上に、木の実を落として教え、オシーンは逆に勝ってしまいました。チェスの勝負が三回やられましたが、三回ともディルムッドが木の実を落として教えたので、オシーンが勝ちました。グラーニャはわたしたちの命よりオシーンのチェスのほうが大切なのか、とディルムッドを責めました。フィンには、だれがオシーンに駒の手を教えたのか、わかりましたので、木から下りてくるようにいいました。

ディルムッドは、木の間から姿を現し、みなの前でグラーニャに口づけをしました。フィアナの戦士たちは、ディルムッドを捕えようとしましたが、オィングスが現れるとグラーニャを妖精の丘に連れ去り、ディルムッドも木から飛び下り、みなの頭の上を越えて、ボイン河畔まで逃げのびたのでした。それからまたふたりの恋人は追っ手を逃れ、十六年の年月のあいだ、ほとんどアイルランドじゅうを逃げまわったのでした。地方のあちこちに、「ディ

ルムッドとグラーニャのベッド」と呼ばれる石がいまでも残っています。
　そうこうするうち、オィングスが仲に入ってフィンとディルムッドは仲直りをし、コーマック王はグラーニャの代わりにほかの娘をフィンに与えました。ディルムッドは父より領地を受け継いでグラーニャと暮らすようになり、四人の息子もでき、財産も増え、戦士としての栄誉も多く得て、ふたりには平和が長く続くように思われました。
　ある日グラーニャは、コーマック王とフィンのふたりを、自分の館に招きたいといいました。やがてアイルランドの最高のふたりは、多くの部下をひき連れてやって来ると、一年滞在し、饗宴は毎夜くりひろげられたのでした。ある夜、けたたましい猟犬のほえ声に目をさましたディルムッドは、翌朝、投石器と剣を持ち、不吉な予感からしきりにひきとめるグラーニャをふり切って、声のするベン・バルベンの山へ入って行きました。
　山ではフィンたちフィアナの戦士が狩猟をしており、ベン・バルベンの魔の猪を狩り出していたところでした。魔の猪は三十人もの人々を殺し、やがてこちらに向かってくるのをフィンはディルムッドに教えました。けれど、猪を狩ってはいけないということがディルムッドの誓約(ゲッサ)になっていること、その魔の猪のいわれをフィンは話したのでした。
「フィン、あなたがそんな恐ろしい猪をわざわざ狩り出したのは、わたしを殺すためなのですね。わたしがここで死ぬのが運命と決まっているのなら、わたしにそれを避ける力はない

わけです」

ディルムッドのこのことばが終わらぬうちに、耳としっぽのない猪は姿を現し、ディルムッドに猛烈な勢いでとびかかってくると、ディルムッドを牙ではねあげ、地面にたたきつけました。その瞬間、ディルムッドも剣で猪の脳をえぐっていたのでした。猪は倒れましたが、ディルムッドも死にひんしていました。長年の仇を討ったように冷たく見ているフィンに、ディルムッドは、両手で水を飲ませてくれるようたのみました。フィンが井戸から水を両手ですくって飲ませれば、どんな傷も治るという不思議な力を持っていたからです。しかしフィンは断りました。けれど居合わせたオスカーや戦士たちに、ディルムッドを助けぬのなら戦うといわれ、近くの井戸から両手で水をすくうと、ディルムッドのところまで帰ってきましたが、両指のあいだを開き、水をこぼしてしまうのです。飲ませようとするたびに、グラーニャとのにがい経験を思い出すのでした。三度目にすくった水が唇にとどかぬうちに、ディルムッドは息を引きとってしまったのです。

グラーニャは悲しみ、息子に復讐を誓わせたのでしたが、このベン・バルベンの悲惨なできごとから月日がたっていきますと、悲しみも日ごとにうすれてゆくのでした。

ある日フィンはグラーニャの館を訪れ、上手にかきくどいてグラーニャの心をやわらげてしまいました。そして結婚を同意させると、ふたりはアレンの丘のフィンの館へ仲よく帰り

ました。グラーニャは息子たちとフィンとを和解させ、自分はフィンの妻として死ぬまでいっしょに暮らしたのでした。

あとがき

ここに集めたケルトの神話は、アイルランドの神話といっていいかもしれません。スコットランドやウェールズ、マン島にも類似した神話は伝わっていますが、アイルランドほど豊富で、原型を保っているような神々の世界は残っていないようです。ケルト神話という場合、アイルランドに残っているものが、どうも中心にならざるをえないようです。ウェールズにも『カーマイゼンの書』（一二世紀）、『タリエシンの書』（一三世紀）、『ハーゲストの赤書』（一四世紀）などの古写本が伝わっており、マロリー以前のアーサー王伝説の形がみられる『マビノギオン』もあります。しかし、これは英雄サガといったほうがよく、赤枝の戦士団のク・ホリンや、フィアナ騎士団のオシーンたちに、その原型は見られるのです。

青銅の兜に腕輪をひからせ、走る戦車から槍を投げ、敵の首を誇らしげに下げているク・ホリンたちレッド・ブランチの戦士から、絹のマントを金のブローチでとめて狩りに興じ、妖精の女王と白い馬にとも乗りして常若（とこわか）の国へ旅に出るフィアナの騎士たちの推移をみてゆ

きますと、アーサー王と円卓の騎士たちの姿は、より洗練され、宮廷ふうとなり、理想化された結果のように思えてきます。「ディアドラとノイシュ」の悲恋、「ディルムッドとグラーニャ」の恋の世界は、そのまま「トリスタンとイゾルデ」や「ランスロットとグウィネヴィア」の愛にもつながっていることが見られるでしょう。アーサー王のよき教育者であって、よき助言者でもあった魔法使いマーリンも、ケルトの王たちに仕えていたドゥルイド神官に通じていることをお感じになったでしょうし、ハープの響きが流れ、焼肉の匂いがただよい、杯（さかずき）がうちつけられるコノール王の宴卓に、ガウェーンやトリスタン、パーシヴァルが並んでいても少しもおかしくないとお思いでしょう。円卓の騎士たちが探求の旅に出る聖杯も、ダーナ神族の財宝とつながっているかもしれませんし、アーサー王の魔剣エクスキャリバーも、ク・ホリンの魔の槍ゲイ・ボルグやルーの魔剣と関係ないとはいえませんし、騎士に武芸を授けてくれるスカサハや戦いの女神モリグー、そして騎士たちと愛を語るサヴァやエーディンたちは、アーサー王をアヴァロンに連れてゆくモルガン・ル・フェやヴィヴィアンたち、湖の精に近い存在でしょう。

「力をもち富める者たちは、古代アイルランドの神々をトゥアハ・デ・ダナーン種族、あるいは女神ダヌの神族と呼びましたが、貧しい者たちはその神々をシー（妖精）と呼びます。妖精の丘に住む者たちの意味です……」と、アイルランドの詩人W・B・イエイツはいって

いますが、「ダーナ神族」たちが「目に見えない種族」となり、「妖精」になっていった経路も、おわかりいただけたと思います。また、アイルランドに妖精が豊富なことの原因や源は、このアイルランド神話の世界のなかからくみとれるのです。

ケルトの神話として神々の話を、一冊の中にすべて網羅してある本があると便利なのですが、残念ながらそうした大著は見つかりませんので、左記の本を基に選択し、さまざまな話の型を編集し直して書いてみました。話を選ぶに際しては、ダブリンで、ケルト神話の専門家であるネッサ・ドーラン博士にご相談にのっていただけたのは幸いでした。選択が難しく、一つの話でも、筋がさまざまに違って伝わっており、ク・ホリンを最後に刺したのはだれか、ディアドラはどのように身を投げたか、恋人が死んだあとのグラーニャの身のふり方はどうだったか、などいろいろと読みすすんで行きますと、一つの研究書が書けそうなほどなのです。

またわたしはゲール語やアイルランド語の専門家ではなく、古代アイルランド語の発音を、どう日本読みにするかで苦労しました。日本語はもちろん、ゲーリックの音とまるきり違い、複雑な音を単純に表記するわけですから。幸いケンブリッジのトマス・シム＝ウィリアムズ博士にご指導頂けましたが、思い違いや不備の点があると思いますので、大方のご教示を頂ければ幸いです。古代アイルランド語読みにしたわけですが、ひのもとの国というよりにっ

ぽんといったほうがいい場合があるので、エリンではなくアイルランドといっているような個所がいくつかありますし、メズヴとせずメイヴ女王を採りました。こうした固有名詞の読み方はやっかいな上に、アイルランドの場合、たとえばク・フリン、ク・ハラン、ク・ホリン、いずれにするかで迷い、またディアドラにしても、ディアドレ、ディアドラ、ジャアドラ、デァドルーといく通りにも発音できそうな上に、さまざまな綴りが伝わっているのです。一例としてあげてみましょう。Deirdre, Derdriu, Deirdrie, Deiridrie, Deurduil, Dearduil, Dearshuil, Diarshula, Deurthula. ケルト民族のふしぎの一面です。

物語のテキストとして用いた本は次の通りです。

1. D'Arbois de Jubainville：*The Irish Mythology Cycle* 1884
2. Standish O'Grady：*Silva Gadelica* 1892
3. Myles Dillon：*Early Irish Literature* 1948
4. Charles Squire：*Celtic Myth & Legend, Poetry & Romance*（?）
5. J. J. Campbell：*Legends of Ireland* 1950
6. *The Tain*（*Tāin Bó Cuailnge*）by Thomas Kinsella 1969
7. Proinsias Mac Cana：*Celtic Mythology* 1970
8. P. W. Joyce：*Old Celtic Romances* 1978

9. Jeffrey Gantz : *Early Irish Myths and Sagas* 1981
10. Maria Tymoczko : *Two Death Tales from The Ulster Cycle* 1981

日本のものでは、唯一といっていい『アイルランドの神話伝説』二巻本を、昭和五年に八住利雄氏が書いておられます（復刻版名著普及会、昭和五十五年）。広い視野から選択され、該博な知識を基に加えられた解説は、高い水準のものであり、多くの示唆をいただきました。

ケルトの神々については、まだ知りたい書きたいことがたくさんあり、そのためにはイギリスに滞在しているのはよいのですが、本書の編集を担当されている前澤美智子さんには、海のかなたからの間遠の便りは、いつも心配の種だったであろうと、改めて申しわけなく、感謝しています。海神マナナーン・マクリールの魔法の船「静波（ウェーヴ・スウィーパー）号」があったなら――と何度も思いました。

一九八二年十二月　ケンブリッジにて

井村君江

文庫版あとがき

「世界の神話」全十巻のなかの一巻として、『ケルトの神話』が刊行されてから七年が経ってしまった。そのあいだにケルトの文化にたいする多くの研究書が海外で出版され、また実際の発掘が各国で行われて、新しい事実が次々とわかってきている。その度に神話や伝説が、歴史に書き替えられていると言えるかも知れない。

たしかにケルト民族が造った単一の国家は、どこにも存在しなかった。だがケルト民族を探っていくことは、そのままヨーロッパ各民族やブリテン島の民族のルーツを考えることに繋がるわけであり、キリスト教以前の異教と呼ばれる先史時代の人々のものの考え方や信仰を知ることにもなってくる。外国の人々にとって自分たちの依って立つ基盤、民族の起源であるケルトを探る事は大切な作業であろう。しかし彼等の文化や文学を学ぼうとする者にとっても、ケルトに関する知識はやはり必要であろうと思う。

古代民族を知るための共通した方法であろうが、いわば幻の民ケルトをより良く知る方法

として、次の三点が挙げられると思う。(1) 考古学的な発掘による出土品から考察し想像していくこと、(2) 古代の人々が書き残した文献から推定していくこと、(3) 神話や民間伝承などから組みたてていくこと。そしてこの三つの分野の研究が相互に協力しあうケルト研究が、ここ数年の間にとくにイギリスでは急速にすすめられ、その成果が次々とまとめられているのである。

具体例を挙げてみれば、イギリスの各地で出土品が発掘されて話題になっているが、なかでも一九八四年八月一日に、マンチェスターの南の郊外ウイムスローのリンドウ・モスの泥炭(ピート)の中から発見された、茶色のミイラは重要なものであった。上半身だけであったが顔もまた胃の残存物もよい状態であり、「リンドウ・マン」と名付けられていま大英博物館に展示されている。ケルト学者アン・ロスと科学者のドン・ロビンスが中心になってミイラを科学分析した結果、約二〇〇〇年も昔のケルト人であり、三回外からの手に依って殺されたと見られ(テウタテス、エスス、タラニスの三神への生け贄か)、その儀式のためにみずからを犠牲にしたドゥルイド僧であろうと推定されている。あるいは、イギリスでの最後のケルトの女王といわれるアイスナイ族のプラスタグスの王妃ボーデイシア(ブーデイカ)が、紀元六〇年頃ローマ軍に反乱を起こした頃に生きていた身分の高いケルト族出身者で、戦いの勝利を神々に願うため、自らを捧げた死かも知れないと考えられている。科学的証明と歴

史的推察から、このリンドウ・マンに関しては、アン・ロスとドン・ロビンスが共著のかたちで『ドゥルイド・プリンスの生と死』（一九八八）という興味ふかい本をまとめている。ユリウス・カエサルが『ガリア戦記』でケルトの指導的地位にあった神官として恐怖と共に記録し、ケルトの神話の世界でも活躍しているドゥルイド僧が、不意に今世紀のイギリスで、土の中から実際に姿を現したわけである。

ケルト民族の女王ボーデイシアは、セント・オーバンでローマ軍に痛手を負わせたが、激戦のすえ破れて毒をあおいで死ぬ。ローマ軍はその反乱にたいする抗防戦のために道路を造ったが、ピーターバラの湿地帯（フェン・コウズウェイ）の上を覆うかたちで通るこのローマン・ロードを、一九八二年十一月に掘り起こしたところ、何千という木材の破片が発見された。科学分析の結果は、紀元前一〇〇〇年頃の人々が湖のそばに建てた住居跡であろうということで、「フラグ・フェン」の湖の村と呼ばれた。かなり良い状態で泥の中に三〇〇〇年近くも眠っていたそれらの木材の配置や作り方から、クラノッグという萱ぶきの木と泥でできた円い住居で、フィンやオシーンたちが住んでいたと同じような当時の家屋の間取りや構造が見えてくるのである。いまも続行中の発掘はあと十五年は掛るということで、その間に更に多くの未知の事実が発見され、ブリテン島のケルト民族の歴史に新たな照射が当てられることであろう。

もちろんヨーロッパの各国でも発掘と発見は続いている。例えば、ラ・テーヌ文化の素晴しい武具や装飾品などが、スイスのヌシャテエール湖畔の各地で数多く出土しているが、それらは美術館や博物館に分類・展示されている。しかしこの夏も訪れたベルンのシュワーブ・ビエンヌ考古学館では、出土品を整理中であるばかりでなく、ケルトの発掘品があまり多いため展示しきれず、それだけの建物の建築を八年がかりで計画しているとのことであった。

ケルト民族の謎の面白さは無限である。「リンドウ・マン」が発掘された地域や、チェシャー、リンカンシャーなどの湿地帯（ボーグ）には、ボガート、ボーグル、ボギー、ボガンといった妖精が出没するというが、一説にはリンドウ・マンのように生け贄にされた人の魂の変身で、黒犬や白い牛、または鬼火になって現世の人にとり憑き、悪さをすると信じられていると、アン・ロスは前述した本の中で書いている。ケルトの発掘体とその現場が、古くから妖精と関わりがあったという記述を見るのは興味ふかい。ケルト神話の神々が人間の英雄と愛しあい、英雄はまた妖精と関わりを持ち、また神々は妖精になり、英雄は鷹や鮭になり、乙女が蝶や白鳥に変わったりするケルトの神話の世界のもとにある、いわば輪廻・転生の考え方が、ここに垣間見られるように思うからである。

このたび本書を文庫の一巻にするに際して、本文はそのままにしたが、固有名詞の読み方

には大幅な改訂をほどこした。これまでは古い発音に従っていたが、一般に行われている読みはこれを採ることにした。また訂正した読みが数箇処あるが、御助言を賜った東京大学の伊東俊太郎先生に感謝申しあげたい。今回ケルトに関する写真を入れ、ケルトの雰囲気をだすことに努めたが、多くの資料の中から選択の際に、的確な判断を述べてくださり、魅力ある文庫を作って下さった編集者の中川美智子氏に感謝申しあげる。

一九九〇年三月十日　東京

アイルランドに発つ前日

井村君江

この作品は一九八三年三月二五日、筑摩書房より刊行された。

ちくま文庫

ケルトの神話

一九九〇年三月二十七日　第一刷発行

著者　井村君江（いむら・きみえ）
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―六―四　〒一一一
電話東京五六八七―二六八〇（営業）
五六八七―二六七〇（編集）
振替口座六―四一二三

装幀者　安野光雅
印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社
ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替いたします。
©KIMIE IMURA 1990 Printed in Japan
ISBN4-480-02392-5 C0198

ちくま文庫

眠れない時代　リリアン・ヘルマン　小池美佐子訳
赤狩り旋風が吹きあれる混乱と動揺の時代、毅然と生き抜いた女性劇作家ヘルマンの自伝。

メリディアン　A・ウォーカー　高橋茅香子訳
60年代の黒人運動とは何だったのか。黒人女性の挫折と希望を描く長編小説。

ザ・ベスト・オブ・バラード　J・Gバラード　星　新蔵訳
SF界の巨匠が人間心理や神秘的な時間を描いた、解説付き自選短篇コレクション。

荒涼館（全4冊）　C・ディケンズ　青木雄造・小池滋訳
霧深い荒涼館に引きとられた少女エスタを巻き込む訴訟事件。十九世紀英文学の傑作。

骨董屋（全2冊）　C・ディケンズ　北川悌二訳
産業革命期のイギリス。薄幸の少女ネルをめぐる美と醜、善と悪。あのポーも感動した名作。

ピクウィック・クラブ（全3冊）　C・ディケンズ　北川悌二訳
陽気な紳士ピクウィック氏。人を助け悪をこらしめようとするが、行く先々で失敗ばかり。

千一夜物語（全10冊）　佐藤正彰訳
あらゆる物語の中で、もっとも多くの驚きと不思議に満ちた大ロマンを個人訳で贈る。

カンタベリ物語（全2冊）　G・チョーサー　西脇順三郎訳
十四世紀イギリスの貴族から農民にいたる各階層の思想、人情、風俗を生き生きと語る。

ドン・キホーテ（全4冊）　セルバンテス　会田　由訳
「正義と善の理想の王国」をめざす、老騎士と従者が巻きおこす笑いとペーソスの遍歴譚。

ギリシア神話　串田孫一
恋多きゼウス、嫉妬に狂う妻ヘラ……。しなやかな哲学者によるギリシア神話入門の書。

ギリシア神話　英雄物語　C・キングズレイ　船木　裕訳
神話で活躍する英雄たちの物語をやさしく語った、キングズレイの幻の名著。

オデッセウスの冒険　チャールズ・ラム　船木　裕訳
長編叙事詩『オデッセイア』を格調高くわかりやすいラムの再話で贈る。本邦初訳。

い
16
1

ケルトの神話

井村君江

ちくま文庫

450
[437]

定価450円(本体437円)

神々は英雄と結婚し、英雄はまた妖精の恋人に……〈幻の民〉ケルトの人びとが伝え残した神話のかずかず。
目に見えぬ世界〈常若の国〉や、目に見えぬ種族・妖精たちの存在を信じていたケルトの人びとの想いが今に甦える。ケルト文化の理解に欠かせない一冊。

ISBN4-480-02392-5 C0198 P450E

ちくま文庫のファンタジー

著者・訳者	書名
池内紀訳	グリム童話[全2冊]
ルイス・キャロル 柳瀬尚紀訳	シルヴィーとブルーノ
ルイス・キャロル 柳瀬尚紀訳	不思議の国のアリス
ルイス・キャロル 柳瀬尚紀訳	鏡の国のアリス
ルイス・キャロル 柳瀬尚紀訳	もつれっ話
ルイス・キャロル 高橋康也他訳	原典対照 ルイス・キャロル詩集
E.T.A.ホフマン 種村季弘訳	ブランビラ王女
G.マクドナルド 荒俣宏訳	リリス
G.マクドナルド 吉田新一訳	黄金の鍵
W.B.イエイツ編 井村君江編訳	ケルト妖精物語
W.B.イエイツ編 井村君江編訳	ケルト幻想物語
L.ダンセイニ 荒俣宏編訳	妖精族のむすめ
W.デ・ラ・メア 荒俣宏訳	妖精詩集
W.デ・ラ・メア 橋本槇矩訳	恋のお守り
絵 R.ドイル、詩 W.アリンガム 矢川澄子訳	妖精の国で
C.G.フィニー 中西秀男訳	ラーオ博士のサーカス
C.S.ルイス 中村妙子他訳	別世界物語[全3冊] ①マラカンドラ ②ペレランドラ ③サルカンドラ
矢川澄子	わたしのメルヘン散歩
荒俣 宏	別世界通信
荒俣宏編訳	新編 魔法のお店

ケルト民族の不思議がいっぱい！

ケルトの人びとが伝え残した幻想的な物語に、古代ヨーロッパの心が鮮かに甦る。

ちくま文庫　定価450円（本体437円）

ちくま文庫

450
[437]

450
[437]

ISBN4-480-02392-5 C0198 P450E

ちくま文庫　ケルトの神話

小さなうつわに大きな夢

ちくま文庫

撮影・濱谷 浩

時代を超えた知のクーデター 待望の文庫版全集

坂口安吾全集 全18巻

第4回発売中

第4巻・小説

外套と青空 女体 戦争と一人の女 石の思い 風と光と二十の私と 花妖 二十七歳 白痴他 1030円 ●第1・2・3巻＊好評発売中

●第5回＊4月27日刊 平均550頁・新字新かな・毎月1冊刊●詳細内容見本呈

筑摩書房

東京台東蔵前2-6-4

電話 03(5687)2680